礎とせる基督教の信仰の二三典型的の場合を畧述せんとするにあるからである。それ故今は教權と理性との間の論爭の一大轉機は、宗教改革と共に來、この時教會の教權は、基督教徒の大多數によつて放棄されたと云へば、それで十分である。併し件の論爭は決して此に終結したと云ふ譯では無い、何せなれば法王や會議のオーソリティに代ゆるに、一の新なるオーソリティ卽ち聖書のオーソリティを以てして、從來の論爭を繼續したからである。此論爭の最後の狀態——聖書のオーソリティに對する攻擊——は自然神教と理智の宗教と一緒に後節に於て述べやう。蓋し這種オーソリティは最早朴素的信仰上の事柄でなく、寧ろ道理に基いた信仰であるからである。併し之に論及するに前ち、先づ吾人は時代に於て著しく之に先んじ、且つ事實上教權の上に立つスコラ的信仰と殆ど相提携したる基督教的信仰の一方面を考察せんければならない、卽ちそは基督教の神秘說に外ならない。此の神秘說は各時代の基督教中に存在するけれど、其の最も典型的なのは中世紀に多いのである。

二

神秘說なる語は種々の意味を有するからして、豫め之が定義を下し置かねば無意義に終る患がある。それでは余は此語を如何なる意味に使用するかと云ふに、そは余の研究しつゝある目的物によつて略、暗示される。此に所謂神秘說とは形而上學的一元論の謂でなく、又變態心理學にて取扱ふ他心通(Telepathy)や心靈論(Spiritualism)の如きものでもなく、寧ろ認識論上の神秘說と其基礎となつて居る經驗を云ふのである。イリングヲースJ. R. Illingworth氏は嘗て神秘說を下のやうに定義した「神秘說とは人類が絕對若くは實在を直接に把捉し得るとの信念である。所謂把捉とは推論によつてでなく、寧ろ直覺的(インチユイチヴ)である。既に直覺的であるからして中間に立つべき階段がない、從て言語や文章によつて之を他人に說明することは出來ない、而かも其人自身には動かすべからざる確實性を持つて居る。」今更に之を神學上の語に言ひ換へれば、「人が神と直接に融合し交通し得る」との信念であると。其故に之を簡單に云へば神秘說とは主もに人々の直接經驗に基づく神の信仰であつて、其の心的要素は感情が主となつて居ると云へる。此の定義は往々神秘論者と稱せらるゝ人々を總て包含すると否

とに係らず、少くとも宗教的經驗の可なり廣く且つ顯著なる方面を包含すると思はれる。

固よりまだ基督教的神秘説に就いて、歴史的立場若しくは心理學的立場からして詳細なる説明を與ふべき場合に達しない。余は單に神秘論者と親密なる人々が、神秘論者に普くではないけれど、極めて普通であると認むる二三の特點を擧げたいと思ふ。第一に神秘論者は、辨證的思考を滅絶し、之に代ゆるに一切の推理推論を超越せる自己の直接經驗を以てせんと意識的に企てる。そして是等神秘論者の採用した實行方法は、かの印度の瑜伽觀行の行者がやつた方法と、其根本に於ては大差なかつた。即ち其實行方法は分つて二段となし、第一に禁慾主義を實行して世俗を離れ、世務を棄て、周圍の利害關係に累はさるゝことのないやうになり、第二に思考作用を少くして、其の全き意識を感情背景の獨り舞臺となし、由て以て神を直覺する。即ち神秘論者は畢竟自己を自己以外の力が顯れて、我前に臨むを待つて居るやうな心地と、其力を迎へる爲めに席を空けて置くと云ふ精神狀態に至らしむるのである。

種々の神秘論者により、辨證的思考を絶滅し、感情背景の獨り舞臺と云ふやうな狀態に這入るために、種々の方法があるけれど、其根本に於ては殆ど皆同一である。基督教的神秘説の開祖、聖デオニシユスには定まつた方法はなかつたけれど、其求むる狀態を實現するために、彼がチモーテー Timothy に與へたる教訓中には、後世に於ける精密なる方法の胚胎せるのが認められる。彼は其の「神秘的神學」に於てかう云ふて居る、「チモーテーよ、汝は不可思議な幻象と撓まず交通し、以て一切の知覺作用、一切の認識作用、是等知覺と認識との一切の對象、及び有無一切の事物を斥け、そして一切の事物や知識以上の神と出來得る丈け合一するやうに知らず識らず高揚興奮せよ。蓋し汝は忘我恍惚の妙境に直入して、かの靈的暗黑の境より發射し來る靈光に接し、こゝに一切を斷ち、一切に累されないやうになるだらう」と。

禁慾主義は、一切の肉體の慾望を絶ち、各自の意志を否定するため、多數の神秘論者によつて行はれた。アッシシの聖者フランシス St. Francis の如き、方式によることを主張しない神秘論者でさへ、神と神秘的冥合をなす準備として禁慾主

義を遂行した。「フィオレッチ Fioretti」を讀んだ者は、左の語を想ひ起すであらう。

「聖母昇天祭が接近したにより、聖者フランシスは非常なる克己と嚴格とを以て斷食を始め、熱心なる祈禱と通夜と鞭撻とによつて身體を苦しめ、精神を興奮した。實に斯樣に祈禱して以て其の品性を高め、其の心靈が神と神秘的冥合をなすの準備をした。」

神秘論者の多數は、一定の秩序ある方法を作らへ、之を數段に分ち、常に神人合一の妙覺を以て頂點として居る。例へは聖ヰクトル寺院のフーゴー Hugo は五段に分ち、先づ聖書を讀み宗教上の事柄を考へることに始まり、沈思冥想忘我の妙境に於て神に沒入融合することを以て極度として居る。聖者テレサ St. Teresa、聖者フランソア、ド、サル、St. François de Sales、十字架の聖者ヂョーン St. John、ギユイヨン夫人 Guyon も亦之と同一の方法を採用してゐる。即ち其の方法は要するに、先づ宗教上の神聖なる問題に就いて沈思 Meditate し、斯くて茲に一切の妄念を絶ち、更に耽想 Contemplation てふ意識の範圍の非常に狹くなつた、所謂一點に集注した專念三昧の狀態に入り、それからして、全く辨證的思考と知的作用のなく

なつた、無念無想の境地に到達するのである。

右に擧げた西班牙や佛國の神秘論者ほどの激烈な神秘的經驗を有せず、又た神人合一の妙覺に參すべき一定の方法を工夫しなかつた他の神秘論者も、尙自己の心內に神の囁きを聞かんには、一切の推論を絶たなければならないことを認めて居る。アレオ岡の聖ヂオニシユースが下のやうに云ふて居る。我々が思考する場合には、感覺器官の妨害を除かんければならないやうに、神を直觀しやうとする場合には思考を斥けんければならない。「神と崇めらるゝ人々が、斯やうに靈光と合一するに至つたのは、其心意が一切の活動を停めた際である。」

「體人間の心意には思考力なるものがあつて、之に由て事物を知的方面から觀察すると云ふことを認めんければならないけれど、吾々の心意が由て以て心意以上のものと接するに至る彼の合一と云ふことは、心意の有する思考力を超越して居ることを認めんければならない。それ故に吾人が神を觀想するには、當にこの合一によるべく、決して我見によつてはならない。全く我執を去りて神に融合致一せる全自我を以てしなければならない。」又たクレールヴーの聖者

ベルナール Bernard は下のやうに云ふて居る、「思考力即ち理智によつて神を求む る哲學者は誠に偉大である。然し感覺や知力を斥け、直下に神と相見んとする 者こそ最も偉大である」と。マイステル、エックハルト Meister Eckhart は其の說教 に於て、高尙なる知識を得るためには、必ず一切の推理作用を絕たなければならない と云ふことを屢、勸めて居る。「心を空うせば空うする程、神の力の働を感ずる」「記憶、悟性、意志は總て思想を雜駁散漫ならしむるばかりである。それ故是等のもの、乃至知覺、觀念作用、及び吾々が由て以て生を保ち若しくは生を保たんと欲する森羅萬象は總て之を打ち捨てねばならない。斯樣にして此に初めて吾々は以前と變つた新生涯を經驗することが出來る、――さもなくば經驗することは出來ない。」「神を知らんためには、吾々の知識は少しも用がない。吾々の知識はこれに由て神を知ることの出來るほどに進歩し增加するものと思ふてはならぬ。何せなれば若し神の閃光が、吾々の心裏に輝けば、吾々の有する自然の光は毫も用をなさないからである、否、寧ろ自然の光は消滅して全くの無に歸するに相違ない。そすると神は神自身の光で吾々の心裏に輝き、吾々が裏に捨てたも

のを悉く回復するのみでなく、又た更に其幾千倍をば、神自己の中に包含しつゝ回復するのである。」

それ故、最高の神秘的知識を得る主なる法則は、それを得やうと試みないのにある。全くそれに到達しやうと努めないことが、到達する最良方法である。思考と意志とは唯障礙たるのみである、若し天光が吾々を照らさんことを欲するならば、全く平日の光を斥けて、天光の吾人を照らし得る境地に吾々の身を置くがよい、强いて照らさしめやうとしても、それは到底出來難いことである。恍惚忘我の妙覺に到達すべき最も綿密な方法を作つた神秘論者は、其妙覺が吾々の意志や努力と無關係で沒交渉であると固く主張する。初の二階段、沈思（ノアテーション）と耽想（コンテムプレーション）とは實に人力によるけれど、最後の階段は全く神の恩（グラアイン）、神の廻向（ギフト）であつて、吾々は之を强ゆることは出來ない。それは丁度風のやうで、風は其の音のするところに吹いて居る。――吾々は風の音を聞き、又た微風の吾が頰に觸るゝを快よく感ずるけれど、それが何處（いづこ）より來て、何處（いづこ）に行くかは分らない、要するに絕對的受動と云ふことが、忘我の狀態に入る最要條件である。この事に關し神秘論者の反覆架

說する所は一心發起(コンヴァジョン)(若くは改宗)の際に述べらるゝ證言「余は先づ試みると云ふことを止めなければならなかつた」と云ふことを想ひ起させる。意識的にして有限なる各自の小意志即ち小我と云ふものは、意識的中樞から擴がつて、其の範圍は誰も知らない彼の大人格の意志即ち大我の統轄し始むるに前に、先づ絶滅しなければならない。

神秘論者にはかやうな經驗は日常の經驗とは其種類を異にし、恰かも突然他の世界へもち上げらるゝが如く、又た此經驗はこの種以外の形式の經驗と全く異つて居て、そを記載するにしても單に消極的の言葉、若くは自家撞着とも見ゆる言語にのみ依らなければならない。デオニシユースが云ふ「神ここにましますと稱せらるゝ靈的闇黑(ダヴァイン・グルーム)は寄りつき難い光である。已に光と云ふけれど、光輝より以上であるから見えない、光線(ライト)の流れが過度であるから、近寄り難くあつて、唯神を知り且つ見る資格ありて思はるゝ人々が此中に這入る。但し其の這入り方が、視力と認識とを超越する神に實際には這入りながら、神を見ず又知りもしないのである。實に此の經驗は人々自ら到達し自證する外、言說を以ては平

易に說き難い。十字架の聖者ヂョーンが曰ふ、人は其の充たされて居る高尙(ナブライム)なる知慧、微妙(デリケイト)な靈的感情を寫し出すべき言葉、方法、比喩法を有して居ない。……それで之を認識する際には、假令神秘的な、甘美な知慧が、吾が心裏に明白にしみじみと感せらるゝけれど、五官の働きをも想像作用をも用ひ得られないからして、吾々は其形式をも、印象をも得ることが出來ない、又何等の說明をも、相(すがた)をも與へることが出來ない。今、人が其の生涯に於て何か或種の事物を初めて見たと假定するに、其人はそを理會し、利用し、樂しむことを得やうけれど、そが單に感覺器官にて經驗され得る事物に過ぎないにせよ、其に名を附け、或は其に關する何等かの觀念をも傳へることは出來ない。……然るに、今そが感覺器官を超越したものである時には、其人の無力なること如何許であらうか。……吾々が使用する言葉が、如何に高尙で含畜的であらうとも、そを用ゐて神に就いて述べやうとする際には、如何許り卑しく、且つ無意義で、不適當であらうか。」ヤーコブ、ボエーメ(Jacob Böhme)曰ふ、「如何なる生活も件の經驗を表現し得ない。どの舌も神の燃ゆる愛の火の何物であるかを述べ得ない。」エックハルト曰ふ、「學者たちが、これ

まで其理性と悟性とで說き、又この後とても審判の日まで說く一切の眞理は、毫も此知識、此密義を含んで居ない。若し此知識、此密議を不知とか、無智とか稱へても、猶其の中には、外部から來た一切の知識、一切の知慧以上の內容を包含するだらう。」(參照老子「道可道非常道、名可名非常名。」)

神秘論者の中にも、其の一般に言說を以て說き難いとする神秘的經驗を、言說を以て說かうとする態度に著しい差異がある。或は幻象を見たと云ふ者もある、或は對話したと云ふ者もある、或は終には無意識となる失神の狀態と云ふ者もある、或は之に反して毫も斯樣な熱烈なる經驗を認めないで、單に靜寂なる忘我だけと云ふ者もある。かの聖者テレサーはイエースを、聖者フランソア、ド、サールは聖母を、スーソー Suso は美しき乙女の形をした「永遠の知慧」に接したと云ふて居る。是等は神秘說を過度に誇張したものであつて、決して其の本然のものではない。大多數の神秘論者は決して斯樣な幻象を見ない、又た求めない、寧ろ其等の幻象を以て不正常的と見、危險であるとする。實際彼等は其等の幻象を以て惡魔の蠱惑に出づと云ふて居る。極端の場合を以て常型となすは、これ

誤謬である。併し斯樣に其說く所に相異があるにも係らず、總ての神秘論者の一致する事柄が二つほどある。第一に、既に述べた通り、件の經驗はどうしても言說を以て說き盡し難い性質のものであること、第二に該經驗に於て、神秘論者等は彼等に接近し、若くは彼等を取り圍み、彼等の生命と連續する大生命に意識的に合一歸入するに至つたとの確信である。

右の經驗の最も單純、最も普通、詮るところ最も良く、最も典型的のものは、赤心より發する眞實熱誠なる祈念の場合に起る。啻に神が自己と俱に在りて、其の捧ぐる所の祈念を聽くと信ずるのみでなく、又た斯く感じて祈念を捧ぐる者は其れ丈け神秘論者であり、且つ最も高尙なるタイプの神秘論者である。斯樣に神が現前すとの感は、懺悔し、希願する餘地なからしむる程に、往々敬虔なる祈禱者の心に溢るるのである。基督敎史上に於て、最上の神秘論者は聖者フランシスであつて、彼は膝づいて終夜祈禱し、唯單に「我が神よ我が神よ」と叫ぶの外何物をも求むることが出來なかつた。「フィオレッチ」に曰ふ、「聖者フランシスは……床を離れて祈禱を始め、兩手を高く上げて、天を仰ぎ見、非常なる熱誠と敬虔の心

もて「我が神よ、我が神よ」と叫んだ。かく叫び且つ涕泣しつゝ、絶えず「我が神よ、我が神よ」と繰り返すの外、何とも云はず朝に及んだ」と。

斯樣な「神の現前の意識」の實例は、神秘論史上に溢れん計りに存在するけれど、今試みに其無數の中より、右の經驗を例證する二三の章句を引用しやう。聖者テレサ曰ふ、「余が讀書して居た折に、住々不意に神の現前の感起り、確に神は余の中に有り、余は全く神の中に捲き込まれた。」「聖者彼得の祝祭日に、祈禱を捧げて居る中に、余は余の直く傍で見た、否、寧ろ感じた、――そは肉體の目や、靈魂の目では何にも見なかつたからして――併し、基督が余の傍に居たやうに思はれた、余に話して居るものは基督自身であると思ふた、少くとも余にはさう見えた。」

ギユイヨン夫人の經驗はかうである。「利己や、我慾の念を放れた妾の精神は、其をだん〳〵に引きつけたる神と合一し、神の中に歸入した。この折には妾は妾を見ず、妾を知らず、唯神のみを見、神のみを知つたと思ふことが出來た。……妾の靈魂は神の中に歸入し、神は妾の靈魂が有つて居た一切のものを取り去り、妾の靈魂に與ふるに神自身の性質を以てした。……こは實に貧困であれど

幸なる貧困、損失であれど幸なる損失、無一物なれど幸なる無一物であつて、そは妾に賦與するに廣大無邊の神其者を以てする。――最早創造物と云ふ有限の狀態に踏躙せず、寧ろ妾の靈魂を此狀態より救ひ出して、全く神の本質中に沒入せしめた。」

ルイスブレーク Ruysbroek は下のやうに書いて居る。「かく神と抱擁し合一する際には、敬虔にして內部的な人は神と一體となり、神に歸入し神に溶融し去る。彼等は神の惠によりて、神と同一である、そは兩者其本質を同じくするからである。」「吾の吾たるは、吾等が耽想することにある。吾等が耽想することこれ吾の吾たる所以であるからである。吾等の精神も、生命も、將た本體も、もち上げられ、そして神たる彼の眞理其者に冥合せしめらるゝからである。」それ故吾等はこの單純なる、而も熱心なる耽想に於て、神と生命を一にし、精神を一にする。……此の最高階段に於て靈魂は直下に神に合一し、神の暗黑中に沒入する。」

クレールヂーのベルナールの說によれば、斯樣な場合には、人は神に沒入したことを自覺する。「一滴の水が多量の酒の中に注ぎ込まれると、其水は自己の本

性を失ひ、酒の味と色とを取るやうに、……又た日光が空中を透過する折には、其の空氣を赫々たる光に變化し、遍く照されたと云はんよりは、寧ろ光其者であるやうに見ゆる如く、人間の意識は言説に絶したる方法にて、神に流れ込み、一向に神の意志に打ち任かせて仕舞ふ。」

エマルソンを讀んだ者は、右説く所に依て「超心靈論」を想ひ起すであらう。「内より、後より、光は吾々を介して萬の物を照し、吾々は全くの無であつて、唯光のみ一切であることを知らしむる。」「我が頭と無限の天との間には、籠も天井もないやうに、超心靈中には何等の障壁なく、此の超心靈中に於て、結果たる人類は終り原因たる神が始まる。神人の障壁は除かれ差別は去り、吾々は一面に神の屬性たる靈的深淵に通ずるに至る。」蓋し此交通は神の心が、吾が心の中に流れ入るの謂である、生命てう海洋の大波がさし來るにより、各個人たる小川がひき退くの謂である。」

ヤーコブ、ボェーメは、右に述べたやうな大生命が徐に彼の中にあつて、成長し行つたと云ふて居る。「其大生命は若き草木に於て現はるゝやうに、屢、余に現はれて來た。假令同一の大生命が、十二年の間余に存したれど、そは常に成長發達して居たやうであつた」と。

彼の著書「基督への摸倣 Imitation of Christ」が右と同一の精神、同一の呼吸に充ちて居る。「上帝はとりわけ完全である、……神は極めて親切であつて、十分の慰安を與へる、……それ故神が神自身ならぬ何物を余に賜ふとも、又何物を啓示し何物を約し給ふとも、余が實際に神を見、神を樂しむことを許されぬ間は、余の心の限りなき願を滿足せしめ得ない。蓋し余の心の望は一切の生物、一切の賜物を超越し、唯神の十全なる靈と合一して始めて滿足することを得るのみである。」

タウレル Tauler はかのベルナール(一滴の水が酒の中に消え失せ、光が空氣に透徹すると云ふた人)と同一の語法で、或は神と稱へ、或は「無創造の深淵 Ungeschaffener Abgrund」と稱へたる、彼の一切を包含する生命との合一の經驗を述べて曰ふ、人類たる深淵は直ちに神の深淵へ注ぎ、「創造されたる深淵は、無創造の深淵に注ぎ、斯くて是等二個の深淵は一個體卽ち純粹なる神的實在となり、人類の精神

は神の大精神に還沒し、底知れぬ海に沈み入る」と。

此點に關しては既にエマルソンから引用したことがあつたが、余が米國に於ける十九世紀の極端なるエニテリアン主義の主張者をテレサや、十字架のヂョーンと同列に置くのを見て奇異の思をなすものもあらう。固より彼等は外面上は甚だ相違するが如きも、而かも其內實は實際同一である。即ち其精神に於ては合一し、そして總ての神秘論者の說く所は詮りは同一に歸する。彼等は一人として人生至深の眞實相は、エマルソンが其の「超心靈論」の末尾に於いて論及したやうな經驗なることを感じないものは無い。「心靈のあらゆる作用に於ける人と神との結合は言說を以ては說き難い。最も單純なる人であつて、誠心も(まこころ)て神を崇敬せば、其人こそ神となるだらう。而も此一層善なる普遍的自我の流入は永久新にして又た不可思議である。」「心靈(ソール)は單獨なる、本來の、純粹なる心靈其者を、彼の單獨なる、本來の、純粹なる神に打ち任せ、この神は其の條件にて心靈に喜んで住し、心靈を導き、心靈を通じて語る。かくて心靈は喜び、生々し、敏活である。心靈は賢明ではないけれど萬有を達觀する。心靈は宗教的ではないけ

れど潔白である。心靈は光明を自己のものと云ひ、そして自己の性質よりも劣りて、しかも自己の性質に屬する法則に從ふて、草は生長し石は落下すると感ずる。見よ心靈は云ふ、我は生れ代りて大なる精神、普遍的精神となつた。不完全なる我は、己れ自身の完全を崇敬する。余は兎に角偉大なる神を感知する、それ故余は超然日月星辰を睥睨し、其等日月星辰を以て常に變轉し行く所の全く偶然の事變及び結果なりと感ずる。永遠なる自然の大波が吾々に這入ること益多くして、余は愈余の考に於ても動作に於ても公共的となり人間的となる。斯くて余は不滅の思想に住し、不死の精力を以て行動するに至る。」

中世紀の聖者とは種々の點に於て餘程異つては居るけれど、其の精神に於ては同一なる他の近世の神秘論者はヲルト、ホイットマン Walt Whitman である。世にホイットマンほどに外形に於て中世の聖者と異るものはないけれど、而かもホイットマンの晩年の詩を讀まんもの、彼の詩中には種々奇異なる名稱にて、かの中世のエックハルトが「靜寂なる曠野」と稱し、タウラーが「無創造の深淵」と唱へたものと同一の名狀し難い神の現前に屢、論及してあることを認むるでなけれ

ば、そを理會せんことは到底出來難い。彼の詩には、神學上の術語なく、僧侶や教會に何等信賴し、憑據するところがないけれど、そは毫も彼の直接の確信力を殺がない。

「おゝ靈よ、吾も亦如何なる法師にもまして神を信ずる、
されど吾は敢てみだりに神の不可思議を說かじ。

おゝ靈よ、爾は吾を喜ばし、吾は爾を喜ばす、
海又海を航へ、或は山又山の上に、或は眞夜中の夢より醒めて、
時間と空間と死との思想——沈默無言の思想——は、
流るゝ水のごと無限の境を通じて吾を浮べ去る、
其思想の空氣を吾は吸ひ、其流の漣の音を吾は聽く、
おゝ神よ、爾てう靈水の中に吾を洗ひ、吾を浴させたまへ、
吾は爾によぢ登らむ、吾と吾が靈とは、爾の山又山によぢ登らむ。

おゝ爾超絕者(トランセンデント)よ、名づくべきやうなきものよ、
神髓(ファイバー)よ、氣息(いき)よ、光明の中の光明よ、
あらゆる宇宙の中心なる爾はこれら宇宙を放出しぬ、
爾は眞、善、愛の偉大なる中心、
爾は道德と心靈の泉、——愛の源——爾はこれらを貯へ滿へたる池、
(おゝ沈鬱なる吾が靈は——其の渴望は癒やされで——かしこに待てるにあらずや、
完全なる友はどこかそこらに恐くは吾々を待てるにあらずや。)

おゝ爾脈搏よ——爾は廣大無邊の空間を通じて、
秩序正しく、安全に、調和して循環する
彼の星辰と太陽と系統との原動力、
若しや吾、吾を離れて、かくすぐれたる宇宙に乘り出し得ざりせば吾はいかで
思索し、いかで呼吸し、いかで言說し得む。

おゝ靈よ、爾眞の吾よ、吾顧みて爾を呼べば、思ひきや
爾は星辰を御し、時間を友とし、
平然笑つて、死を迎へ、空間の廣大を充溢す、
さらずば、吾は一たび、神、自然、及び其の不可思議、
時間、空間、死を思ふや、忽ちに逡巡せむ。」

メーテルリンクが曰ふて居る「人の一生は神を探しつゝ送られねばならぬ、蓋し神は雲深く隱れましますからである。然し神の策略は其一度覺られた曉には、實に平易にして微笑を含んでをる。其瞬間からは毫も取るに足らぬ全くの無でさへ神の實在し給ふことを默示し、吾々人間の生命の偉大は、しかく小なるものに依存して居ることが分る」と。

神秘論者の經驗は、常に劣面額其儘に認容されて居り、且つ認容されなければならぬ。一體該經驗は推論の基本たる與件材料ではなく、寧ろ確實なる直接經驗である。固より神秘論者も甚しくとりとめのない幻象に就いては餘程疑惑を抱くこともある。例へば、聖者テレサのやうな人は、其の見たる幻象中の或者

は、神であつたか、惡魔であつたかを心に決し兼ねたるやうに思はれる。斯樣な場合には神秘論者は、プラグマチック流の吟味をなし、件の幻象は吾人の生活にどれ丈の效果を及ぼすかを尋ねるかも知れない、併し件の經驗が餘程奇怪の度を減じ、餘程深奥な場合には、何等の證明も吟味も用ゐられない、何せなればこの場合には神秘論者は神との合一交通を絶對的に確信するからである。聖者テレサ曰ふ「內城の第五僧庵で、神が我が心の中に現はるゝ折には、覺醒の後にも、我は神に入り、神は我に現れたことを疑ふことは出來ない。そして此確信の度は甚だ強く、假令多年の間、再び此の仕合せな喜ばしい境地に入ることがなくて過ぎても、其一度受けたる恩寵を忘るゝことも、又た其恩寵の眞實なることを疑ふことも出來ない。」

近世の神秘論者、トレヴォアJ. Trevorは下のやうに述べて居る。「心靈生活は、斯樣な生活を經驗した人々だけに其を證明する、……即ち心靈生活の經驗は、かやうな經驗を經たる人々に眞實と證明せらるゝ生活である。そは此經驗はこを經驗した人が客觀的現實生活に接觸するやうになつた時にも、尙依然變動せ

ずして其人と共に同伴して離れないからである。夢ならばこの試驗に耐え得ない、吾々は夢より醒むるや、直に其の夢に過ぎなかつたことを知る。過勞せる腦裡の空想も亦此吟味に堪へ得ない。余の神の現前に就いて有したる最高の經驗は、極めて稀で且つ短時間であつた、――忽然驚いて神此に在りと叫ばざるを得ない程の意識の閃き――若くはさ程には烈しからで、唯次第に消え行く高擧直觀の狀態であつた。余は極めて嚴密に此の刹那の意識の價値を吟味した。余は余の生活と事業とを、斯る腦裡に於ける一片の空想の上に打ち建てはせずやと恐れて、何人にもこの經驗に就いて語らなかつた。併しあらゆる吟味研究を遂げた後に、今は是等の經驗が、余の生活の最も眞實なる經驗として存在し、且つ余の過去の一切の經驗、過去の一切の成長發展を説明し、是認し且つ統一する經驗として存在することを悟つた。實に件の經驗の眞實なること、其の深遠なる意義を有することは絶えず一層確實に且つ明瞭になりつゝあるのである。」

更に近世に於ける他の神秘論者バック Bucke の言を引用せんに、「此の幻象は數秒時間續いて消え失せた。併し幻象に就いての記憶と、幻象の示したことの

眞實であるとの感は、過去二十五年の間變化しないで存在した。余は幻象の示したことの眞實なることを認めた。又た其を眞實に違いないと認むべき立脚地に達した。して其立脚地、其確信、其意識は、非常に神氣の消衰した時にも失せなかつた。」

斯樣な經驗を經た後に、神秘論者が神の存在は絶對的に確實であると云ふは、これ甚しき控へ目の言ひ方である。人に依ては唯推理のみに由てゞさへ、神の存在を固く確信するに至り得る。然るに神秘論者は神は一切の存在物中にて、最も眞實で最も直接に知らる。エックハルトが云ふて居る、「神ほど余に近いものはないと云ふことは、余は生きて居ると云ふと同樣に正確である。神は余が余自身に於けるよりも、尙余に近い。」

之が正確の度は、普通の標準に依て定める譯にはゆかない。そは人生の總ての價値とか習慣とかは、神秘論者の眼から見れば、變化し轉倒して見えると云ふことでも分る。卽ち神秘論者は現世の標準を信せず、自己の神秘的經驗に照して生きて居る。ヂョーン、エープス John Yepes が云ふて居る「神に接したために生

ずる喜びは、其一と接りでさへ如何に多くの生活の苦痛でも、總て之を償ふて餘りある程である」と。實に神秘界を一瞥したいけで、其人の全き世界觀が變ずる。ダウレルが云ふて居る「この新しき幻象を見るものは極めて少數であるけれど、そを見た人には、其見た時間がどれほど短かくても、其の一瞥は永久のものである。一度此幻象に接した人には、天地一切は全くの無である」と。

三

十八世紀の英國には、神秘說を唱へた者は殆んど居ない。尤もキリアム、ローWilliam Lawが居るけれど、之とて所謂例外あるために規則が證明さるゝと云はるる、彼の例外に過ぎない。實に十八世紀は純理論の時代であつて、此時代には信仰は論證を基礎とし、論證によつて打ち立てられんければならない、さうでないと一顧の價値なしとして信用を失ふに定まつて居た。神秘說及び信仰上一般に感情を重んずることは、この健全にして嚴肅な時代には嫌はれ且つ輕侮の標的となつて居たことは、其の時代の代表的預言者とも云ふべきヂョン、ロックJohn Lockが「狂熱信者（エンスーシアスム）」に就いて言ふたことに由て明かである。ロックが曰ふ「あ

らゆる時代に於て、憂鬱と敬虔の念とが混合して居る人々、若くは自負と幻想の結果、神と非常に親しくなつたと思ひ、他人よりも自己の方が神の恩寵に與ると思ふやうになつた人々は、屢、神と直接交通し、神よりの消息に接したと信じ、之れを誇りとして居る。……こは狂熱信者と稱すべきものであつて、理性にも天啓にも基づかず、寧ろ熱した若くは自惚れた腦裡の幻想から生じたものである。然し其一朝確かな地歩を占めた折には、是等の理性や天啓やの一若くは其等の相合したものよりも餘程強く、人々の信仰や行爲やに影響を與へるのである。そは蓋し人は自己から受くる刺戟には非常に熱心に服從するものであるからである」と。

若し此消極的方面に於て、ヂョン、ロックを其の時代の代表者であるとするならば、其の學說の積極的方面に於ても亦敢て之に讓らない。一體自然神教學者も正統派の人々も、彼を以て其の大戰士となして居るが、この事は敢て奇とするに足らない、何せなれば是等の二派は、種々の點に於て相反する處があるけれど、ロックが宗教上の事柄に關して主張した點、卽ち理性を以て信仰の究竟的基礎

となす點に於ては相一致して居たからである。實に英國の十八世紀は理智の宗教の時代であつて、そして其の二大宗派は同じく共に論證を以て信仰の基礎として居り、唯其異る點は其信仰の基礎となる論證の仕方、卽ちどう云ふ風な論證によるかと云ふ點に存するのであつた。

神の存在は、天啓によらなくとも、完全に證明され得るとは、此の時代の殆ど總ての思考家の一致するところであつた。ロックが云ふて居る、「神の存在は理性の發見することの中で最も明白なる眞理であつて」、その證據は「數學の如くに確實」であると。此の時代に主として採用された論證法は、宇宙論的、目的論的證明であつた。尤もクラーク Clarke はボイル講演に於て本體論的證明を用ひたことがある。序でに云はんに、此講演は、基督教の眞理を、無神論者、自然神教者、及び異教徒たる猶太教徒や回々教徒に向つて證明するために、大化學者ボイル Boyle の創立した講演である。

宇宙論的證明は明にロックに由て採用された。彼は有限我の存在より出發して論じて曰ふ、有限なる我は永遠のものでなく、且有限なる我自らを創造しな

かつたし、又「全くの無」は何物をも生じ得ないからして、こゝに何物かゞ無始より存在したに違ひない。そして其の無始より永遠に存在するものは、智慮ある吾々を生ずるために、智慮を具へ且つ非常に勢力を有して居たに違いないと。次に意匠論卽ち目的論的證明は千七百十一年、十二年のボイル講演に於て、デラム Derham が詳述して居る。曰く「全宇宙、卽ち上は太陽地球より、下は最も微小なる動物の腸腺に至るまで、意匠と考案の徵證を示して居る」と。どの自然神教學者も是等正統派の神の存在の證明を批難しなかつた。自然神教學者は實際此證明を全く當然の事、理性に照して明白な事であつて、合理的な人から疑はるべきものではないと信じた。實に宗教的信仰は理性に、否な、理性のみに基かねばならぬことは、常に彼等の繰返した言葉であつた。トーランド Toland が云ふて居る、「吾々は理性を以て確實てうことの唯一の標準、唯一の基礎とする。」「今や一切の眞理は全く推論の上に打ち立てられんければならない。」自然神教の完成者たるマッシュウ、ティンダル Matthew Tindal も同樣に、神の存在は總ての思想家の理性に照して明白なることとして之を許し、基督教に說く眞理は、吾々が原初に於

て有した自然的理性の眞理に外ならぬものである。それ故にそは「創世の古よりあつた」し、福音書は單に「原始の眞正の自然宗教の再現復歸」に過ぎないと主張した。

次に自然神教學者中に、オーソリティを基礎としたる論證と、天啓を基礎としたる論證とに、價値を認むべきや否やと云ふ問題からして、こゝに二分派を生ずるに至つた。ロックは其の二三の同時代の人々から幾分か怪しまられたけれど、尙此際にも彼は其時代の代表者である。して彼の說くところはかうである、天啓を基礎とせる論證は全く正當であつて絕對的證明と見られんければならないけれど、如何なることが斯る天啓であり如何なることが天啓でないかを決定するものは常に理性である。卽ち天啓なることの證明(眞實に神の示現なりとの證明)は、所詮吾々の理性の判斷に訴へんければならない。若しオーソリティ、となる言葉が理性と衝突する場合には、其言葉はどうしても承認することは出來ない。之に反して、假令外見上は眞らしからずとも、若しそが十分に可能で、合理的で、且つ「明白なる天啓」であるならば、そは是認せられんければならない。

例へば神の休徵(sign)卽ち奇蹟——燃ゆる荊棘とか、杖とかが變じて蛇となる類——によつて正しとせられたる聖書中の敎は全く神の證權卽ち天啓であつたことは明白である。

されば天啓は決して信仰の唯一の基礎たることは出來ない、そは如何なる場合にも最後の判斷を與ふるものは理性であるからである。それ故に天啓を基礎としたる信仰の推論によらないものではないことは、丁度、誰でも十分精密に吟味すべき權利ある彼の證人の證言を基礎とせる信仰の推論によらないものではないのと同樣である、そは全く證據の問題である。

トーランドは更に同樣の意見を述べて居る。彼は知識の源を四分し、第一に感覺器官の經驗、第二に心意の經驗、第三に人の證言(ヒューマン、オーソリティ、オア、レベレーション)若くは天啓(オア、レベレーション)とした。そして是等は何れも信仰の合理的基礎たる點に於ては一である。蓋し信仰は「健全なる理性に基いたる確信であるからである。」

當時の自然神教學者の中にロックやトーランドのやうに、聖書の超自然的要素を承認することを欲しないものもあつたがレズリ Leslie は此懷疑の念を退

治し、聖書が合理的信仰の基礎として絶對的に信憑さるるに足ることを理性の滿足するやうに證明する爲めに、「自然神敎學者にとつての簡便法 Short and Easy Method With the Deists」を著し、そして爾後正直なる研究者が疑を挾み得ない程に單純で、明白で、應用し易い判斷の標準を提出すると云ふた。そして其の提出した標準は、主張さるゝ事柄の眞理であるか、どうかを判斷するための四法則となつて居る。所謂四法則とは次の通りである。第一、判斷の對象となるものは、例へば耳目のやうな人間の外感覺器官にて判斷することの出來るやうな事柄なること。第二、其事柄は世人が見て居る前で、公然と成され若くは起つた事柄なること。第三、其事柄が成され、若くは起つた事を間違ひなく將來に證明するために、單に或記念物(若くは記念碑)が公衆の前に設けられ保存さるのみでなく、尙又或外的動作即ち儀禮が行はるること。第四、斯樣な記念物若くは儀禮が、其事柄が成され若くは發生した當時に設けられ、又其當時から始まつたことである。最初の二法則は、其事柄の起つた當時、確實にして疑を容れざらしめ、後の二法則は其事柄の起つた以後に於て、確實にして疑を容れざらしむる。彼はこの標準

に照らしてモーゼの事跡と聖書の眞理なることを證明し、又同時に回々敎の誤謬なることを指摘した。

オーソリティを根據とせる證明に、最も信賴した人は、ウオータランド Waterland である。彼はクラークのなしたる神の存在の先天的即ち本體論的證明の維持し難きことを示し、同時に歷史的證明の一番適當なること、奇蹟で固められたる神の證權(アウアイン・オーソリティ)を本として證明されたるものは、總て之を認容しなければならないと云ふた。

併し斯樣にウオータランドの聖書註釋、レズリの簡便法が出來たにも係らず、超自然を信ずるに當つては、先づ吾人の辨別力に訴ふる傾向と、それからオーソリティを根柢としたる證明を信用する度を減ずる傾向が生じて居つた。ホイストン Whiston は千七百二十二年に「舊約書の眞の本文を回復せんための論 Essay toward restoring the true Text of the Old Testament」を著して、基督以後、夥しき誤謬が舊約の預言書の中に這入り込んだことを示すと同時に、比喩的說明法を攻擊した。コリンス Collins はホイストンの說を批評して、若し基督敎のオーソリティが豫言

の的中と云ふことを以て根據とするとしたならば、比喩的説明法を用ゐ且つ其を擴張せんければならないと云ふたが、又同時に、斯くすることは、不滿足で且つ面白くないと云ふた。ツールストン Wollstonは聖書中の奇蹟を烈しく攻擊し基督の復活に就いてさへ、比喩的説明法を採るべしと唱へ、又一方にティンダルは天啓なるものは「自然的」若くは合理的宗教の説く教理に、毫末の益するところがないと唱へた。聖書のオーソリティを最も痛擊したものはモルガン Morganであつて、彼は舊約書を以て神出の書ではなく全く人間の作である、猶太人のエホバーは、基督教徒の神とは決して同一でないと明言した。併し歴史的證明に最も嚴しく、最も有力な攻擊を加へたものはミッドルトン Middletonであつて、彼は他の人のやうに單に聖書の特殊の點に疑を挾むを以て甘んせず、聖書中には兎に角神の示現即ちインスピレーションなるものが言葉通り本當に有つたかどうかと云ふ、寧ろ全體に關する疑問を發し、聖書は他の文書と同樣に歴史的批評を受けなければならないと主張した。

自然神教はミッドルトンに至つて終を告げて居る。一體自然神教學者には、

新約書、舊約書中の記事に正しき見解を下すべき適當な批評法が缺けて居たけれど、其自然神教の精神——オーソリティや、人々の説に拘泥せず、聖書に關する眞理を發見せんとする欲求丈の點——は本文批評家、高等批評家に殘つてゐて其活動の範圍を暫く英國より大陸へ轉じた。千六百七十年スピノーザは「トラクタートウス、テオロギコ、ポリテイコス Tractatus Theologico Politicus」に於て、モーゼは所謂モーゼの五書(Pentateuch 舊約書の初め五篇)の著者ではないと云ふた。こは眞に聖書の科學的批評的研究の端緒であつたが、そはヴィトリンガ Vitringa、アストルク Astruc、ローズ Lowth、アイッヒホルン Eichhorn、ゲッデス Geddes、エワルド Ewald、グラフ Graf、キユネン Kuenen、ツェルハウゼン等の諸學者を經て、徐々と而かも着々と進歩し、そして從來聖書は神の示現インスピレーションに出づと言葉通りに信ぜられて居た傳説的見解を少しづつ破壞し、遂に聖書は「宇宙の大統治者」たる神人同形的帝王の直接の示現を記したものではなく、寧ろ人類及其の宗教が太古未開の狀態より、基督や保羅(ポーロ)の出づるまでに漸次に發展して來た跡を記する純然たる人間の記錄であるとの新しい見解を漸次に確立した。

勿論かやうな見解の確立は非常なる論爭の結果であつて、古き見解の辯護者は出來得るだけ、之が抵抗を試みたけれど、終局の結果は逃れることは出來なかつた。實に聖書のオーソリティが受けた大打擊の幾分は、最も熱心にして噪急なる聖書辯護者の招くところである。何せなれば十九世紀の中葉に於て、正統派の主張者は、單に高等批評家からのみでなく、尙又自然科學者から攻擊さるるとを自覺したとき、若し進化論を眞理であると假定するならば聖書は「誤謬(フオールス)」である、神の示現ではない、何等のオーソリティないものであるとの斷定を其の立場として動かなかつたからである。斯樣に神學者から激烈なる駁擊を受けたのに係らず、進化論は着々と其地歩を固め、そして進化論は聖書に合はない性質を有すとの幾度か繰り返されたる證明は兩刃(もろは)の劍となつて、兩樣に切れたことは直に明白となつた。若し聖書が獨語したとするならば、正に下のやうに叫んだであらう、「余を味方より救ひ出しさへすれば、余は油斷なく敵に氣を附けん」と。

併し聖書のオーソリティの危險な破壞的な辯護の仕方は、遂に放棄され、主(おも)だつ神學者は、度、熱心に進化論的創造說と、それから彼の高等批評に由て承認され

たる聖書觀とに贊同した。聖書がエホーバの手に成り、若くは天上より「コージンのやうに」一部づゝ太古の聖人たちに下されたと考へらるる時代は既に過ぎ去つた、文字の儘、言葉通りに解されたる示現說は、實際上(理論上でなくとも)非常な保守主義の者は除いた、一切の人々から放棄せられ、聖書は人類の文書の一であると殆ど萬人から認められた。「新神學」の辯護者は、かやうな意見の變化は宗敎にとつては損失ではなく、寧ろ利益であると云ふて居るが、實にさうである。今日のやうな批評的時代に於ては、誤れる論證は永く信仰を維持することは出來ない。それ故自ら其弱點を出來得るだけ早く認識すれば、それ丈結構である。併しかやうに聖書のオーソリティに關する古き見解の失くなつたと共に、一般民衆の神の信仰の最も有力なる根柢の一つが失くなつたことは否定することは出來ない。換言すれば既に聖書の絕對的オーソリティが亡くなつたのである、何せなれば假令現代の大多數の人は、猶聖書の絕對的オーソリティに執着して居るけれど、そは主(おも)だつ思考家から見捨てられ、早く過去の骨董品たらんとするの運命に陷つたからである。過去三十年の間に英米の二國に於て言葉通り

の神の示現說（インスピレーション）に對する一般態度に非常の變化の生じたのを見れば、同一の傾向が今後三十年間にどれだけ進むか、何人も其進歩に限度をつくるに躊躇するであらう。勿論聖書の絕對的オーソリテイからして神の存在を證明する議論は、非常に道理に悖つて居り、其の發足の際からして既に竊取論點(Petitio Principii)を含んで居たけれど、此事は過去に於て聖書が大に一般公衆に重んぜられたことを毫も妨げなかつた。其故に如何に聖書に關する合理的見解を歡迎し得る人でも、彼の一般民衆の神の信仰が、聖書のオーソリテイを根據とする論證法を失つては、其神の信仰の最も强固なる基礎を失つた——少くとも失はんとして居ると云ふことをば認めんければならない。

理智の宗教の爾餘の論證法は余り好運に出會はなかつた。彼の本體論的證明は宗教に何等の影響を與へない、唯單に僅少の哲學者を除いては、一般民衆と沒交渉であるから余は今本問題には論及しないし、又たカントが滿足に永久に論駁したかどうかも論じない。併し宇宙論的證明、特に目的論的證明は、宗教的信仰にとりては極めて重要なる意義を有つて居たからして、之れに就いては簡

單に研究する必要がある。カントが攻擊した宇宙論的證明は、一般民衆的のものではなく、寧ろスコラ哲學者の宇宙論的證明であつた。又之に由て證明せんとする神も一般民間に信ぜらるゝ神ではなく、寧ろスコラ哲學者の信じた神であつた。而もカントがなした攻擊は前者に對しても後者に對しても有効である。宇宙論的證明の一般民衆的なるものゝ標本的なものは、ロックの說いたもので、之に就ては既に述べたことがある。ロックのなしたやうな論證法はカントの批評に對抗し、其の矢面に立ち、之を喰ひ止めることが出來ないことは明白である。即ち其は第一に全く「永遠なる何物かが」無始より存在すると云ふことを、人々に說服し承認せしめることが出來ない、何ぜなれば或る有限物をば因果の連鎖を辿りて原因の原因と無限に遡究し行くと云ふ思想には何等の矛盾する所もないからである。一鏈の鎖には其中より他の鎖は差し置き、何れか殊更に一つを取立てゝ、そこを終局として止らねばならぬやうな鎖は無いからである。通常「大なる第一原因」なる語の使用さるゝ意味中には、理性をしてこの「大なる第一原因」を承認せしむるの力がないからである。併し一歩を讓り仮の宇宙論的

議論が、必然的實在者、即ち永遠なる何物かの存在を證明し得たと假定しても、それは決して、件の議論が證明せんと企てたやうな實在、若くは宗教の要求するやうな實在に到達することは出來ない。此の必然的實在――件の議論の示すものは世界其者であるかも知れない――は一般常用の意味に於ける「神」であると斷定するは、これ全く不都合なる大假定である。又反對に宇宙論的議論の一般通俗的形式を慣用する人々が求むるやうな種類の神――世界の中に在り、世界の一部をなし且つ因果法によつて世界に影響を與へる實在――は決して件の宇宙論的議論を滿足せしめ得ない、何ぜなれば此意味に於ける神は、現象となつて外部に現れた秩序の一部分である、それ故鏈鎖をなして居る鐶がどれでも說明を要するやうに此種の神は說明を要するのである。吾々は連鎖をなして居る鐶の何れに於ても止つてはならないやうに、神なるものに止つてはならない、――實に吾々は現象として存在するものは總て說明を要すると云ふ宇宙論的論證の根本的假定を立場として、神を超越せる範圍につき進むのである。いま若し神の性質を以て、吾人が神なるものに立ち止まらねばならぬやうなものであり、又た神自

身の必然性を神自身の中に含むと考へねばならぬやうなものであると斷定するゝならば、カントが示したやうに、此事は本體論的證明に立ち返らなければ論證することが出來ないのである。そして本體論的證明に就いて如何に論辯さるるとも、それは決して一般民俗的信仰の根據とはなり得ぬ、寧ろ永久、哲學の範圍にあつて、宗教の範圍にあらざることは確である。

併し宇宙論的證明其者の勢力は、さほど大ではなかつたし、又それが失くなつたからとて、宗教的信仰には餘り重大な打擊ともならなかつた。然るに今や目的論的證明に就いて論ずるに際しては、餘程重大なる問題に出會ふのである。それはオーソリティを基礎とする議論に亞いで、自然界と歷史とに神の意匠が現れて居ると云ふことが、大抵一般民間信仰の主なる知的支柱となつたからである。

カントの「物理的神學的證明」に對する駁論は、直接一般民衆の推論に向けて發せられたものではない。それはスコラ哲學者の神觀に對して發せられ、一般民衆の宗教的神觀に對して發せられたものでは無いからである。一般慣用の目的論的證明は之を二段に分つて考察する方便宜である、即ち第一は自然界に於け

る神の意匠の證明、第二は歴史に現はれたる神意(プロヴィデンス)の證明である。

カントが云ふた通り「意匠論は常に鄭重に取扱はれんければならぬ、蓋しそは最も古く、最も明瞭に、且つ人間の理性と最も一致するからである。」實に意匠論は總ての人の注意を惹くほどに明白である。又たヒュームが云ふたやうに、哲學者は之を用ゐて、法則の普遍性からして神の存在を證明せんとし、哲學者ならぬ人は之を用ゐて、法則の中斷(インターラプション)によりて神の存在を證明せんとする位に、其知識の程度にこそ差異あれ、容易に各種の人々に適合する。其の擁護者にはマルチノー Martineau の如き天才より、其注意深きことと人類の解剖とを以て有名なるペーレ Paley を經て、屢に記載したるデラム氏に至つた。デラム氏は意匠、工夫を證明するには、有害動物は有益なる動物よりも子を生むことが少ないと云ふ事實、地球が「非常に大なること」「神より劣れるものゝ作り得ない位な大事業」を擧げ、又慈愛深い意匠者の存在を證明するために、或鳥や昆虫の口が「其の餌食を捕へ攫み且つ裂き」又動物を刺し傷け、其の血を吸ふやうに工夫されて居ると述べた。

目的論的證明のために、自然界の現象が三種類に分たれる。第一類の現象は、

眼のやうなもので、歸納法によつて智慮を具へた意匠者を假定するに至らしむるやうに思はるゝ事物である。ミル Mill が指示したやうに、眼の各部分は唯一の事情(サーカムスタンス)、即ち視ることを補助する性質を通有して居る。其故此性質は單一契合法によつて眼の原因と見做すべきである。併し視ると云ふことは眼が構成されてから後に起るのであるからして、智慮を具へ、目的を有する造物者の心の中にある視ると云ふ觀念を以て原因と見なければならない(此以外の方法で說明されれば)。けれども意匠論にとりては不幸にも、ミルの時代このかた、自然淘汰說が絕えず、廣く且普く承認さるるやうになり、今日の生物學者は眼の組織構造を說明せんがために、特別な神の意匠によらうとする者は無い。實に自然淘汰は神の唯一の攝理であつて、進化論の中には、神の創造と云ふことと矛盾する點は毫も無いと云ふ方が都合が好からう。成る程事實はさうであるけれど、千八百五十九年以後意匠論が非常な大打擊を蒙つたことは拒む譯には行かぬ。進化論は決して意匠論を攻擊はしないけれど、吾々は最早眼の構造のやうな特別の事實に訴へて意匠を說明することは出來ない、蓋し右のやうな特別な事實は、ダル

キン Darwin 以來、超自然的假定に依らなくても、完全に說明され得るからである。

それで目的論は已むを得ず、もつと普遍的な形式を採りて、第二類の現象、卽ち一般に人類の人爲的に作へたものに類似し、從て意匠と云ふことゝ、智慮を具へたる造物者とを含むやうに思はれる事物に退かんければならぬ。併し不幸にも右に述ぶるやうな事物と、人類が人爲的に作つたものとの類似は、意匠を暗示するに足るけれど、所謂暗示なるものは單に類推に過ぎない、決して眞正の歸納法では無い。且つ其等事物と、人爲的に作へられたものとの差異の大なる、吾々のやうな目的を有する造物者の假定は、(右の類似と云ふことのみを根據として)は到底正確と認め難いのである。

第三類の現象は毫も意匠の痕迹を示さないし、若くは假に意匠されたとしても吾人の神と稱ふるものとは非常に異つた勢力(パウヤ)の作用と思はるる現象の一大群である。是等はデラムやペーレの著作の如き宇宙の百科全書的目錄にさへ、つい記載されて居ない事實である。例へば彼の動物や、罪なきもの、苦痛、人類の大部分を取り卷いて居る、殆ど仕樣ない惡い勢力等これである。此の世界は

「善神」と云ふ假說を根據として先天的考察をなして以て期待するところは非常に異つた場所である。

「この個々に分れたる自然(ネーチユア)、
かくも自然ならぬものゝそは何ぞ、
吾等の心にとりてこの大地は何ぞ、
(愛の心なき大地、吾等の脈のひゞきに、
答へん一の脈搏(みやくのひゞき)だになき冷き大地、墓の地)」
「あゝ愛！きみとわれ彼と結んで、
この悲しき物のさだめ悉く捕へ得ば、
吾等はそを切々に碎き去り、
心情の願に副はんごと改め造らばや」

意匠論者は、一般に自己に都合の惡い事柄を輕視し、或は全く之を閑却し、都合の好い事實を拾ふて居る。併し苟くも此問題を眞面目に攷究せんとするには、普く知られたる現實の全體に着目しなければならない。

併し今暫らく意匠論が意匠者の存在を證明し得たと假定するに、所謂其意匠者は如何なる存在(ビーイング)者であるが。若し吾々が總ての事實に着目し、是等の事實からして神の特性を決定するために、歸納法によりてそを吟味するならば、吾々は宗教の要求するやうな種類の神を、何等かの意味に於て證明したと云はれ得るだらうか。若し吾々が此の一意匠論のみに立ちこもるならば、ミルの斷定も餘り寛大に過ぎはしないだらうか。――「存在(ビーイング)者は其の力固より偉大であるけれど制限されて居る。併し制限され方だの、制限する者などは、吾々の推測し能はぬ所である。又其存在者の智慮は大にして恐くは限りがなからうけれど、之を其の力に比ぶれば餘程制限されて居る。又其存在者は其の造つた生物の幸福を希望し、其の爲めに意を勞するけれど、猶之よりも一層意を勞する他の動機があるやうに思はれ、單に其の作つた生物のためのみに、宇宙を創造したとは思はれない」と。ヒュームの言葉を借りて云へば意匠論によりて、「宇宙は時としては、恐らくは意匠見たやうなものから起つたとの斷定、若くは推測することが出來やうけれど、之れ以上には一事をも確むることは出來ない。」

若し吾人がこれ丈で目的論的證明の事をやめたなら、それは不公平な處置であらう。蓋し或る特殊の所業からでなく、寧ろ法則が普く行き渡れること、則ち秩序の普遍性と云ふことから說き出すのが目的論の代表者であるから、今なほ一般通俗的形式のものに下した批評に當て嵌まらないからである。秩序が至るところに普く存在すると云ふことは、確に宇宙の最も著しい特性の一であり、且つ合理性が事物の中心に潛在することを强く暗示するのである。けれども余は宇宙が斯樣な特性を有すと云ふことも、或一定した何物かの存在を證明し得ないと云ふことゝ、それから次に、全く此の事のみに賴り、若くは何か他の經驗的議論に賴つても、吾々は宗教の要求するやうな種類の神には到達し得ないと云ふことを主張せんければならない。

既に自然界に於ける意匠論に就いて論じたところによりて、今更歷史に現はれたる神の目的に關して論ずる必要は殆ど無い。固より歷史にも神の目的みたやうなものが――幾許か――見出し得られやう。何せなれば求むるものは見出すを得るからであり、且つ「歷史哲學」なるものが幾許かそを證明するやうに作へ

得らるゝからである。併し或る神學を辯護する爲でなく、唯虚心平氣に歴史を調べ、其の原動力に關し、歴史の示すものを歸納的研究によつて定めんとするならば、宗教の說くやうな種類の神の信仰を起すやうにはならないだらう。精々の處仁愛なれど非常に制限され、且つ絶えず欺く存在者(ビーング)、若くは實に有力ではあるけれど其の目的は極めて奇怪である存在者、あらゆる情態に於ける人生の大競技を欲し、高尚にして莊嚴なる事件と共に又た最も殘忍にして厭ふべき事件を起さんことを欲する存在者を論定し得るのみであらう。雨の降りかゝるに惡人と善人とを擇ばない、正しき人が屢、迫害を受け、惡人が常盤木のやうに盛へるのを見るには、必ずしも年老ゆる迄を待たない。「イエスの證をなしたともがらの流した血」は決していつでも「教會の種」となると云ふ譯ではなかつた。歴史を書くものは勝利者であつて、——敗亡者は事件の解釋に關する彼等の意見を殘さない。海中にて死んだものが獻げた供物は、海神ポサイドーンの殿堂には吊るされて居ない。エホーバの敬虔なる僕(しもべ)ヨシヤは埃及人と戰ふために主の力を賴みとして出で行き、メギドンにて殺された。トロヤのリピュース Rhipeus は

衆人には最も正しく、最も成功すべき人と思はれたけれど、神だけにはさうでは無かつたやうに思はれる。最早意味深遠なる詩がローマの大詩人によつて書かれなかつた。正義の爭が屢、敗亡し、力が幾度も正義となる。若し世に神意があるとするならば、其神意の根元と吾々人間が必ず見做さんければならない所の根元が屢、粉碎さるゝのである。吾々は歴史の全篇、これ「神意は然らず」と書かれてあると認むるのである。

ローウエル Lowell の「大なる不可知的のものゝ背後に神存す」との詩句は恐く正當であらう。吾々が神の意匠がどう云ふ進路を取るか、其の眞進路を見分け得ないのは、全く吾々人類の盲目なるより生ずる過失であらう。併し若しも吾々は、暗きに隱くれたる神の意匠を認め、若くは其神を信ぜねばならぬとするならば、件の信仰をば、自然とか歴史とかの喧擾なる範圍から歸納的論證をなして得るよりも、寧ろ他の範圍から得んければならないと云ふことは確である。勿論余は「信仰の眼」(アイ、オブ、フェーイス)は、尙世界の事件に神が關與して居ると云ふことを認め、且つ認むることの正しいことを否定はしない。又宗教信者(リリヂアス、パート)は尙「諸(もろ〳〵)の天は神の榮光を

あらはし、若穹はその御手のわざを示す」と叫び得ることをも否定はしないけれど、次の事丈は記憶せんければならない。即ち右の事が可能なるは、神が、天や穹蒼の說明としてよりも寧ろ他の方法にて發見された後であると云ふことである。

之を要するに、余の示さうとする點は、一般民衆の宗教心を滿足せしむるやうな、事物の說明としての神の信仰は、衰滅しつゝあると云ふことである。推論に基いて居る範圍內では、件の一般民衆の信仰を高等批評と進化論とが大に侵略したことは見逃してはならない事實である。又是等の高等批評と進化論との二勢力のために、今迄一般民衆の宗教思想に起つた變化なるものは、今後二三十年間に生ずる變化に較べれば、實に瑣々たるものであることは、之を默過する譯にはゆかない、一般民衆の思想に大影響を及ぼした物質科學は、早く神てう觀念を用ゐないやうになつた。ラプラースLa Placeのナポレオンに答へたる言葉——「陛下よ最早神てう假定を要しませぬ」——は、最早不自然とも不適當とも思はれない。して又二十世紀の進步の度より推して考ふれば、數年を出でないで科學的見解が一般民間の見解となるだらう。

四

以上の四章に於て宗教的信仰の未開の狀態から、現今の基督教に至るまでの發展の徑路を略叙した。即ち神の信仰は最初にはオーソリテイを基礎とし、そして未開人の直覺によつて强められたが、此種信仰の源泉は漸次に薄弱となり、論理的推理的能力に代られた、然るに今や信仰の第二基礎が瓦解し始めて居る、而かも此瓦解は毫も悲しむべきでない、否寧ろ一切の思想家は教育と論理思想との普及を喜ふべきである。併し眞に宗教に關し興味を有する人には此時代の思潮は幾分心配の種となるに相違なく、實に吾人は大なる宗教的危機を通過しつゝあるのである。上述した通り主にオーソリテイに基づいた神の信仰は夙に死滅し、推論に基づく信仰は現に死滅しつゝある、昔時の文字通りの意味に於ける聖書のオーソリテイは、殆ど全く放棄された。宗教は世界を說明するに當り、最早自然科學に代り得べきものでは無い。神の存在に就いての古き哲學的證明はカントから止をさゝれた。カント以後提出されたる論證及び將來組立てらるゝ論證が好運に出會ふや否やは、今此に論じやうとは思はない、何せな

れば、就れの場合に於ても是等の論證は恐くは一般民衆に根據を占め得さうにもないからである。今や吾人は次のやうな破目に陷つて居る、即ち一般民衆の會得し得るやうな論證は最早取るに足らない。偶々取るに足るべき論證は――斯樣なものがあるとすれば――一般民衆が會得し得ないのである。

現今の狀態は宗教學者の特に注意を拂ふ價値がある。時代の徵候に就いて深く研究した人々は、神の信仰はそが眞信仰であつても、なくても、比較的短日月の間に總ての人から放棄さるゝに至り、或は兎に角生き殘るとしても、そは極めて少數の人々に信せらるゝに過ぎぬと云ふと、略言すれば、「アルマゲドンの戰爭起り、――そして敗亡した」と云ふことを確信する。して又多數の鋭き觀察眼を有する者は、マスシュウ、アーノルド Matthew Arnoold と同一の意見を抱くに違いない。アーノルドが曰ふ、「今や信仰の海は、吹く夜嵐に供ふて、物凄じい廣漠たる磯邊をかなたに遠く落ち行き、後には涸れし浮世の砂礫のみ空しく岸に殘つて居る」と。

多數の神は既に老いぼれて死滅し去り、基督教の神の末日審判の日も、遂に來ないではないか。コーレツエー Callaway 僧正は亞弗利加のヅル Zulu 族の大神、ウ

ンクルンクル Unkulunkulu の死滅に就いて述べて云ふ。ヅル人の朴素的な話によると此大神の名は「今や非常に年老いた皺だらけの媼の名のやうだ。一體此老婆は自ら自己の些細な用をもたす力なく、唯朝坐つた場所に日沒までも坐り續くるのみである。そして子供等はこの老婆を玩物にする、そは老婆は子供等を捕へて鞭つとも出來ず、唯口にて話すばかりであるからである。丁度ウンクルンクルてう名がさうである。」「老人たちが內證話をしたい折には、聲を張り上げてウンクルンクルを迎ひに子供等を遣すを常例とする」「ウンクルンクル神は今や子供を玩物にする方便である。」

基督教徒の神は、同一の運命に陷りつゝあるだらうか、其神も亦將來に於て小供を玩物にするの方便とならうとするだらうか、神の信仰は老衰し、そして特殊の神々の信仰が夙に死滅したやうに死滅するの運命を有するだらうか。

余は此疑問に答ふる前に、生活感情の範圍を研究しなければならない。現今の宗教的信仰の眞の基礎は何であるか、一般民衆の信仰は論證を本として居るか、內的經驗を本として居るか、感情の宗教は、宗教社會にどれほど廣がつて居る

か、若し宗教的信仰の實力を評定せんとするならば、是等の問題は吾人の當に攷察すべき事柄である、そして是等の問題の攷察は之を次の諸章に讓つて置かう。

第三編　宗教信仰の現狀

第七章　少年期及青年期に於ける宗教的信仰の發達

以上四章に於て、範例を掲げて、世界の各人類史上に現れたる宗教的信仰の發達を攻究した。これからは注意を個人、特に現代の個人に向け、其の宗教的信仰の發生の狀態と發展の方向とを論じ、何故に兒童は神を信ずるか、何故に青年は其の信仰を繼續するか、と云ふ問題を研究しやうと思ふ。それで本章に於いて論ずるところは、專ら少年及び青年、卽ち大體二十五歲位までの人々の信仰に就いて考察し、成熟したる大人の信仰の研究は、之を次章に讓つて置く。

一

抑、兒童は何故に神の信仰を起すか。曰く兒童が神を信ずるのは、神を信ずることを敎えられたからであつて、この例外となるものは極めて稀である。假に

吾々が兒童として全然放任されたとするならば、或は自發的に何等か或種の宗教的信仰に到達したんだらうけれど、何人も全然放任され得るものではない、從つて兒童は信ずるやうに教えられたから、信ずると云ふことは、宗教心理學上の問題に關して述べられた說の中で、最も眞理に近いものであると思ふ。これよりも、もつと完全なる「朴素的信仰の宗教」の實例を見出すことは一寸出來難いだらう。兒童は其の話し聞かされたことは、總て之を信ぜずには居られない。彼にとりては、聞くはやがて信ずるのである、斷定の世界と眞理の世界とはまだ分離せず、其の見其の聞く一切の事物は、必然的に實在の色彩を帶びて居る。それで兒童は其の話さるることは出來得る限りすべて之を受け容るゝのである。兒童に就いて極めて該博なる知識を有つて居り、其の言は十分に典據となすに足るシーン Millicent W. Shinn 女史は下のやうに云ふて居る、「妾の經驗によれば、嬰兒の神學は古い教訓の多少誤譯されたものである。否な時に誤譯どころでなく、驚くべきほど奇怪な趣を呈するものがある。そは其の兩親たちの神學中に於て、既に在來の宗教的文句で彌縫した、何とも說明し難い生硬なものを、兒童自

身の粗笨な言葉に飜譯するからである」と。こは勿論明白なる事實であつて、苟くも兒童の觀察者たるものゝ宜しく注意すべき點である。之を要するに兒童は一般に其の教えられた事柄を總べて自己の言語に飜譯するのである。

然し斯樣な飜譯は、兒童の心意が與へられたる材料に對して反應作用をなすと云ふことを示して居る。蓋し兒童は成年の人から話し聞かされた事柄は、之をその理會し得るやうな形に改造しなくては、之に順應し、適合し、之をとり込んで我が所有となし得ないからである。卽ち兒童は兒童流に考へんければならない、さうでなければまるで考へない。それから提示されたる觀念は、兒童にとつては、現に實在して居るやうに具體的で、朴素的で、且つ普通目に見ることの出來得るやうなものとなされんければならない。兒童は其の兩親から話された事柄を理會し、そを受け納れんと全力を盡すけれど、概して彼等は其話された事柄に、吾等には取留めもない奇怪な空想と思はるゝものを夥しく附け加へる。スタンリー、ホール Stanley Hall 博士が曰ふて居る、「多數の兒童は神は大きな靑い人であつて、大桶から雨を灑ぎ、雷鳴を生ずるために雲をコツンと撞き、日と月と

を寢床に臥させ、死人や、鳥や、壞れた人形を取り除け、嬰兒を分配り、小供の守神たるサンタ・クロースと親密であると思ひ、電氣は神が迅速に死斯を放ち、或は澤山のマッチを一度に發火せしむるのだと思ひ(これが最も普通である)、又た神は兒童が道を歩き、若くは教會に行くことの出來るやうに、星に火を點けると考へる」と。又例外と云ふべきほどではないが、もつと空想的なのは、余の一友人からの左の通信である。「余は三歳から七歳迄の間、神は天空にある鐵槌と思ひ、耶蘇は余が所持して居た玩具の樣に間に鈴がついて居る二つの輪の形をした砂糖菓子と思ひ、そして其耶蘇は非常に高い雲の中で、神の傍を轉げて居ると思ふた。余は神や耶蘇が目を持つて居ると考へたかどうかは今は全く記憶しないけれど人であると考へたことは確に記憶する。又神は嚴格に見え、耶蘇は溫厚だと思はれた。余は右の耶蘇に關する觀念を說明することは出來ないけれど、釘を打つ折の鐵槌の音が God 於ける G の音によく似て居たから、神と鐵槌との聯想を生じたと思ふ。そは余は屢、此種類の聯想をするからしてである。余は又た神に對して恐怖の念を抱いて居たけれど、右に述べたやうな標號を拜むやうな

ことはしなかつた。又た是等の標號を活物とも考へなかつた。余は基督をどう考へて居たかは、今記憶しないが、耶蘇と同一では無かつたと思ふ。」

神の屬性中で兒童が最も不思議に感じ、且つ最も力を込めて描寫する點は、神の全知と云ふことである。多數の兒童はヂョーン、フイスク John Fiske が小供の折に述べたのと殆ど同樣なことを、神に就いて言つて居る、——「神は慈のやうな顏をした丈の高い痩せた人で、目に眼鏡をかけ、手に筆を持ち、人間の一切の行爲を大きな臺帳に記入しながら、空中の机に倚つて居る。」又たバーンズ Earl Barnes の報告する一兒童が曰ふ「神は人間の爲し、人間の云ふことは、一々見ることが出來る、假令人が家の內に居らうとも同樣だ」と。又た他の一兒童が曰ふ「余は神はどんな物でも視透すことが出來ると考へ、又たさう話された。神を隔つるものが鐵であらうと、鋼鐵であらうと、將た何物であらうとも構はない」と。次に多數の兒童は神が彼等を監視して居ると感じ、或兒童は「神がそれを逐一書きつけて居る」といふて居る。之が實例の殆ど標本的とも成つて居るものは、シーン女史の報告する少女の場合である。其少女は神が常に彼女を見張つて居たと話さ

れた時に、「そんなにしつこく後をつけてはいやだ」と叫んだ。

次に神は永遠である、無始であると云ふことを、世の兩親たちは其の子女に教ゆるが、兒童は稍〻疑を抱いて聞いて居り、全くは之を信じない。神が年寄りであること、非常に年寄りであることは實に信じられるが、併し神の年齢を假令多いとするも、少くとも限りあるものとなさうとする。九歳か十歳になる一兒童が次のやうに言ふて居る、「神は非常に年寄りである、――殆ど百になるに違ひない」と。併し神が存在しなかつた時代はなかつた、神は永遠より存在したと云ふとは、理會の速い鋭敏な小供には、寧ろ信じにくいやうだ。それで大抵の兒童は皆「神は誰が作つたか」との疑問を發する。サリーSullyが或る兒童に就いての報告によれば、其の母が、世界の存在する以前には唯、造物者たる神のみが存在したと話し聞かせた時に、兒童は「神が存在する前には何があつたか」と反問した。そこで母が「何にも存在しなかつた」と答へたところが、小供は「いや、神の居る場所(卽ち空間)が神に先つてあつたに相違ない」と云つて、母の答を修正した。斯樣に兒童の心は「以前」から「以前」へと溯つて行き、何か或物を、或は單に用意された場處でも

見出さうとするやうになつて居る。

次に兒童の神學に於て神の特質の最も著しい點は、神の力である。神は萬物を造る、――これ神の最も卓越せる點である。サリーの報告によれば、三年十ヶ月になつた兒童が偶々一日の業務を終つて歸路に就く職工の一群を目擊し、其母に「お母さん、あの人達は神樣ですか」と問ふたから、母は喫驚して直に問ひ反した、「どうして神樣なの」。そこで兒童は進んで曰ふ「なぜなればあの人達はお寺やお家を造つて神樣が月や人間や犬を造るのと同じだからと。」又バーンズの報告によれば、キャリフォルニア州の十一歳になる少女が「神は鍵眼を通ることも出來、又た留針ほどに小さくなることも出來る」と云ひ、又た他の兒童が「神は何時でも地震を起すことが出來る」と云ふたと。併しバーンズが附言して曰ふには「神の活動力の事を云ふ兒童は甚だ稀で、神が宇宙を支配し萬物を成長せしめ吾等の物質的需要に就いて注意を拂ふと云ふたものは、全兒童の五分にも滿たない。十歳になる一兒童が極めて眞面目になつて「神は世界を監督して居る」と云ふが、併し世界の實際上の仕事は之が處分を、一般に天使に一任してあると考へて居

る。

右に述べた通り、數多の小供らしい空想が、是等兒童期の神學上の觀念と混合して居るが、どの場合でも、其の信念は畢竟或種のオーソリティに基いて居ることは明白である。固より兩親から、若くは日曜學校に於て敎はつたことが、兒童の信念の基礎をなすは最も普通であるが、併し是等は兒童にとつての唯一の神學上のオーソリティでは無い。交友の意見、又た特に敎えられたでもなく、或は熟考の上論證されたでもなく、寧ろ單に日常住んで居る社會から、無論のことゝ默認されて居る觀念が、兒童の心意に格段の影響を及ぼすものである。實に兒童が見聞接觸するものであつて、どういふかの點で宗敎上の問題と關係あるものは、兒童にとつては一種のオーソリティである。バーンズが曰ふ、ブンチとジャッヂの見世物、蕃椒漬けの火腿の黴が宗敎的觀念を生ずる點に於ては雇女と同一であると。蓋し兒童は其の見聞し經驗する事柄を殆と總て眞と認める、絶對的信認は兒童の特性である。そして其の信ずることは兒童にとつては自然的で又た必然的で、疑惑と云ふことはまだ兒童は殆と全く知らない。之

を要するにスタンリー、ホール總長に倣つて「兒童が妄信性に富み、父母師長の言葉を容易に妄信することは、催眠術に掛けられた人が施術者の誘暾（サグヂスチヨン）に感じ易いことよりも尙甚しい」と云ひ得るのである。

右のやうにオーソリティに賴ると云ふことは勿論兒童期を以て終るものではなく、寧ろそは必ず後年に至つて、一種異つた有樣に再現する。漸次成長發達して行く人々は、オーソリティに矛盾撞着の存すること、從つて其等總てのオーソリティに信賴する譯にはゆかぬことを看取するに至る。是に於てか多數の人々は各種のオーソリティの信賴性に對して、疑惑の念を挾むやうになる。又た他方には、多數の人々は、大に社會的抑壓や、或は其の敬重する人々から暗々裡に受くる無意識的感化によつてオーソリティの一源泉、例へば聖書をば其の據り所として選び、聖書以外の觀念の源泉を以て、多少誤りがちであるとするやうになるのである。

二

固より幾歲（いくつ）になれば、右に記載したる幼稚な妄信期が終るかは斷言し難く、兒

童によつて夫々差異がある。バーンズは普通十歳を以て轉換期となして居るが、此の說は先づ正當に近いやうである。尤も兒童が其の話されたことを朴素的に受け納れ、そを信仰することを防止する疑惑の心は、多數の兒童に於ては此年齡よりも、もつと早く發現する。マサチユーセッツのウオースタ州立師範學校のブラウン H. W. Brown 氏は該學校と緣故ある兒童の語彙を作つたが、そは甚だ貴重なもので、其中現に研究中の論點に直接關係あるもの二三を擧げて見やう。嘗て三歳の一兒童が、神はどんな事でもすることが出來ると敎えられた時、其父に向ひ、「余が二階に上つても、神は余を上らなかつたものとすることが出來まするか」と反問した。又た五歳十一ヶ月の一兒童が其の兄の丁度氷上に滑り倒れた時、家に驅け込んで云ふた。「神は善い人なんでしやうか。どうもさうは思へない。こんな氷を造つて、そして兄さんを轉ばし、兄さんを殺さうとしたからには。」尙七八歳の一兒童は、祈禱の必要なるや否やの問題に就いて考へたやうである。祖母が其の孫の前夜祈禱を怠つたのを叱つて、「若し汝が祈禱を怠れば神は汝を護つて下さらない」と云ふたところが、小供はこれに答へて、「ふゝむ、神は

今まで護つて下さつたね」と云ふた。この最後の場合は、兒童の腦裡に疑惑の念を惹起するに至る主なる原因に二個あるものゝ、其一の說明となるのである。兒童はオーソリティが自己の經驗と矛盾することに氣が附き始めると、其オーソリティは兒童に對して次第に勢力を失ふやうになる。兒童の推論の進み工合は右の最後の例に於て最も明白である。オーソリティと經驗との矛盾することは、何時も氣附かれると云ふ譯では無いけれど、そが一旦氣附かれた場合には其の勢力を失ひ始むるのである。又た兒童が疑惑を起すに至る他の重要な一原因は、嘗て神に就いて話され、神に就いて聞いた事柄と、兒童の腦裡に萠芽發生する正義及び善と云ふ觀念とが矛盾衝突し、神が往々不正不善なる行爲をなす場合である。或日十歳なる一兒童が云ふた、「お母さん、神は禁ぜられた菓物を、アダムとエヴとが食ふことを知つて居たに違いない。若し神がそれを食はせるやうに謀つたとすると、彼等は餘儀なく食つたのであるのに、なぜ神はあの人達を咎めたでしやうか」と。

バーンズ氏の研究によれば、批評的精神は多數の兒童に於ては、十二歳から十

四歳までの間に於て其の頂點に達する。そして此斷定はキャリフォルニア學校の六歳から二十歳までの幼少年の千九十一個の作文の研究に基いて居る、彼が曰ふ、十一歳十二歳に於ては、作文の中に「余は考ふ」「余は話された」「余の考は斯樣だ」「聖書に曰く」、「余は日曜學校で敎はつた」「或は噂に聞く」と云ふやうな文句が現れ始じめ、十三歳十四歳に至つて是等の文句が「吾々は想像する」「余は平生信ずるに至つた」「余は疑ふ」等の語となると。十三歳の少女が次のやうに書いて居る、「妾は天に誰が居るかを精確に云ふことは出來ないけれど、其の天上に居ます方に奉事る人々は、恐らくは皆其處に行くだらうと想像する。」又十二歳の少女が其逝ぶる事柄に對して責任の意味を含めやうとして居る、「妾が聞く通りに若し「天國が常に幸福な所であるならば、妾は其處は極めて美しいに違いないと考へる。場所を美しくする事の出來る最も可愛らしものゝ一は花である、それで其處には可愛らしい花が咲くだらうとは妾の意見である。其處に行く人々は天使であつて、羽翼と白衣とを着けて居るとの噂だ。勿論妾はまだ彼等を見たことはないからして、彼等が何んな容貌をして居るかは精確には知らない。」

兒童に最も普通なる批評的態度は神學を兒童自身の經驗に調和せしめやうとする努力である。一兒童が曰ふ、「余は從來空中には吾等に危害を加へる惡靈が充滿してゐると信じた。併し今は之を信じない、何せなれば余は今までまだ危害を加へられないからである。」十五歳の少女が曰ふ、「妾はどうして人間が祈禱を唱へ讃美歌を歌ふ外、何にもしないで永久に天上に留り得られるかを理會することが出來ぬ。併し人間は天上では、此の世に居た時よりも異つてるだらう。」又たバーンズの報告によれば、或兒童等は未開人や嬰兒が地獄に行くことを信ぜず、又た世の母達が死後に其の子の惡人の間に生き殘つて居るのを見る時、其身獨り天國にて極めて幸福であり得るとは信じない」と。

バーンズ氏の研究によれば、宗教問題に關する右の懷疑的時期(十二歳から十五歳に至る)に亞いで、批評的態度の稍減却したる時期が來る。彼曰く「十五歳を經過したる兒童は、單に抽象的に過ぎぬもの、名目に過ぎぬものを受け納れたことと、及び彼等を惱ました疑問を少くとも一時は放棄したことを感ぜざるを得ない。」確に十五歳より十八歳に至る間には、十二歳より十五歳に至る間に於ける

如くに、神學上の事項に關し批評的判斷を頑固に下さうとすることは無い」と。

この事あるは毫も怪しむに足らない。蓋し反省作用が初めて發生する時は、小供らしい思想觀念は、其反省心に出會つて直に調査訂正される。然るに此の調査訂正が終つてからは、兒童の勢力（エナージ）は更に客觀的實際的方面に向ふて行き、其の懷疑的精神は年齒を重さね、新しい經驗を積んで、眞の哲學的思考をなすの機會に接するまでは、稍、鎭靜して表はれて來なくなる。

併し研究を疑惑の第二期に進むるに先ち、青年期に於ける理性の建設作用を一瞥する必要がある。何せなれば兒童が自己の經驗を反省するの知的作用は、既に述べたやうに、兒童をして屢〻懷疑的態度に陷らしむるに至るものであるけれど、併し全體から見ると、其の宗教的信仰を益、强固ならしむるに與つて力あるものであるからである。蓋し兒童は神の存在に關する宇宙論的證明を屢、用ひ、かくて其初めて兩親のオーソリティから得たところの信念は、極めて著しく强固となる。誰が萬物を造つたかとは、實に兒童の絶えず發する疑問である。

クリスマン Christman 氏が五歲の少女より漏れ聞いた祈禱は、多數の兒童の心意狀

態の標本である。「おゝ神よ、誰が汝（あなた）を作つたか、知つて居ますか、神よ」と。兒童に斯樣な祈禱を發せしむる精神は、プラトーンが哲學の起源であると云ふた驚異である。して兒童が神を以て終局として居ると否とに係らず、兎に角爾餘一切の事物が神へ歸向して居ることを發見する。兒童にとつては神は先づ第一に造物者であり、且つ普に善いものの施與者としてのみでなく、又最も困難なる問題に根本的解決を下して與れるものとして有用である。シーン女史が曰ふ「兒童は小宗教家ならずば小哲學者である、何せなれば彼は一般に極めて若年の頃に事物の原因に就いて知りたいと云ふ燃ゆるが如き心を生じ、「何故」「何故」と云ふ連鎖を辿つて、終に已むを得ず、答ふるに「第一原因」を以てせんければならないほどに、疑問を提出して已まないからである」と。

兒童の理性が其の信念に幾何の影響を及ぼすかは甚だ決定し難く、又た各兒童に由て大に異なるところあるは言を俟たないけれど、理性が屢、眞に其の信念を强固ならしむることあるは疑を容れない。且又兒童の理性が全く其向ふまゝに放任されたならば、其の思想は——眞正なる宗教的信念の基礎とはなり得な

いかも知れないけれど――兎に角或場合には其の神學思想の獨立したる源泉となり、自然に能く、神の觀念に到達することを得るだらう。今ベルゲン Fannie D. Bergen 氏が、或る兩親の其子を何等の宗教的教訓に觸れしめないで育てゝ行かうと企てた興味ある記事を掲げて居るのを見るに、兒童の精神が第一原因を知らうとする要求の先天的なることが分る。即ち右の兒童が七八歳の頃、一日沼の邊を過ぎ、其父に「一番最初の蛙は何處から來たか」と尋ね、父は勿論「卵から來た」と答へた。そこで兒童は「いや余の尋ねたいのは一番最初の蛙、即ちまだ卵を生むものが居ない以前の蛙のことです」と反問した。又た彼は他日臥んだ「何處から一番最初の砂が生じて來たかを知ることが出來たらば」と。この兒童は無宗教、否な、科學的思想の空氣中に育てられ、屢、其の父兄の談話を洩れ聞き、多くの觀念を拾ひ集めたやうに思はれる。彼はその十五歳の頃、母との眞面目な談話中に、生命及び全物質界の背後に、或一大威力が存在すると信ずと云ひ、そして假令其一大威力を人格的に見ることには反對したけれど(恐くは其の兩親から聞いたところによつて)、猶下のやうに附け加へて云つた「此大威力に關する余の觀念

を述べよと云はれると、そは甚だ六ヶ敷い。蓋し余は其大威力を人格化することを信じないからである。余が其大威力のことを考へやうとすると、余の目前には朧ろに非常に仁慈な、高尚な人があるやうに思はれる。余は之を信じない、信じないのは甚だ不幸である。けれども余は如何ともし難い。そして非常に愚かであるけれど、如何ともし難い此觀念を逃れんとすれば、我身は大に窮する」と。

斯樣に、兒童が第一原因に論じつめて行く傾向は、確に生來的であつて、そは自ら何等のオーソリティの助なく、若くは外からの暗示を受けないで、唯理性丈で神の信仰を生ずるに足るだらうか、どうだらうか、全然孤立して育つた兒童が、或初發の原始的の宗教的信仰を有するやうになるだらうか、若くは斯樣な觀念なしに居るだらうか、どうだらうかとの問題を生ずる。一體多數の兒童は自然に物體や原因を人格化するものであるが、此の人格化する傾向は、かの第一原因に溯究し行く傾向と相連合して、宗教的觀念が自發的に發生し得ると云ふことを證明する。幸にもこゝに此の問題に聯關して餘程詳細にして信用するに足る

二つの(一はポータア Samuel Porter 氏から、他の一はヂェイムズ氏からの)報告がある。そは兒童の折に、人類社會に於て、出來得る丈け他人の宗教的觀念に觸れない二人の聾啞バルラアド Ballard 及びデェストレルラ D'Estrella に關する話である。バルラアドは既に九歳の頃自ら「世界は如何して生じて來たか」と云ふ疑問を起し、絶えず之が解決に思を焦した、又た天體の秩序正しき運行と顯著なる氣象學上の現象は、初めて彼に一種の神學的見解を暗示した。彼が曰ふ「余は太陽と月とは光を發する二つの平圓板であると思ひ、そして是等太陽と月との發光體が、地球に光と熱とを與ふる力をもつてゐると云ふ理由からして、之に對し一種敬虔の心を抱き、又其等が秩序正しく大空を通過し上下することからして、彼等の進行を支配する力を有つて居るものが存在するに相違ないと考へた。或日原野に草を刈つて居た折、激しい雷鳴がしたから、兄へ其は何處から來たかと尋ねたところが、兄は空を指し、手眞似で電光を表示する雁木形の運動を畫いた。余は「青空の何處かに偉い人があつて、大聲を上げて噪ぐと思ふた。それで余は雷鳴を感ずる毎に驚いて、そして其人が嚇し文句で話して居ると氣遣つて

空を眺めた」と。其後數年して聾啞學校教師から神の存在の教を聞いた折の感情狀態を自記して曰ふやう「余は宇宙の起源を發見せんとて、遙遠にして茫漠たる時代に溯り徒に摸索して居た、不確な、心を惑はすのみなる沈思から光明界に移され、こゝに件の大問題に關して余の心に安心を與へ、余は自ら再生の思ひがした。この眞理の啓示は萬の物に新な威嚴を添へ、……世界を一層高尚にして尊敬すべき位置に上すやうに思はれた」と。

デェストレルラは極めて若年の頃、月は活物であるとの思想に達した。太陽は火の球であつて、それを「大きな強い人が兎に角丘陵の後に隱れ」ながら、毎朝拋げ上げ、毎晩捕ふるを樂しみとしてゐると思ふた。「余は斯樣な有力な神が恐くは存在するだらうと信じ始めてから後は、神は丁度吾々が街路に瓦斯燈を點けると同じやうに、自己の爲めに星に火を點けると思ふた。風吹けば、それは神の忿怒を示し、冷風は其の怒であつて、涼風は其の和氣であると考へた。そは人々が怒りて爭ひ或は罵り合ふ際には、其の口から氣息の爆發するのを時々感じたからである。空に雲のかゝるや、そは神の大煙管から出て來たと思ふた。蓋し余は屢、

燃ゆる煙管又は捲煙草から煙の渦巻き出づるのを、小供らしい驚異の念を以て見たからである。……霧が立つ時は、寒い朝に神が息をし給ひ、雨が降る時は、神が多量の水を含み、其の巨大なる口から吐き出し給ふのであると思ふた」と。

以上のやうな場合は甚顯著で恐らくは例外であらう。――蓋し一般に多數の聾唖者は其の教育を受くる前には、何等の神學的觀念をもたなかつたと云ふて居るからである。併し單に聾唖であつたばかりでなく、又た盲目であつたヘレン、ケラーHellen Kellerの場合は、バルラアド及びデェストレルラの證言より自然に生ずる結論を益、堅固ならしむる點がある。ケラー嬢の場合には、全然何等の神學的觀念に接せしめなかつたと云ふ譯ではない。そは蓋し嬢はまだ九歳に滿たない中にキングスレーの「希臘英雄譚」によつて、希臘の諸神を知つたからである。併し是等希臘の諸神から何等の神の觀念を得なかつたことは、彼が決して神てう語の意味を問はなかつたこと、其の九歳の誕生日の少し前に、或人が神に就いて話し聞かせた迄は、神に關し何とも云ふたことがなかつたことで分る。又この以前には嬢は神のことに就いて何事も學ばなかつたことは、嬢が神學中

の第一章、神に關する部分をば冗談と考へたとて愈、益、明白である。然るにこれより數ケ月前に「妾は何處から生れて來て、死んでは何處へ行くだらうか」との大疑問を發した。こゝに嬢は哲學と神學との源泉たる驚異の念を生じたのである。其の師マーシMacy氏が附言して曰ふ「嬢の諸の現象の觀察が益、擴大し、其の單語數が愈、豐富に、緻密になつて、自己の概念と觀念とを明瞭に發表し、又他人の思想及經驗を理會し得るやうになるや、嬢は人間の創造力の有限にして、到底萬有を造るに足らないと云ふことを知るに至り、人間力でない一大威力が存在して此の地球、太陽、乃至嬢が十分に知つて居る數多の自然物を造つたと認めた。或日終に嬢は其の存在すると考へた一大威力のために名を要求した。」丁度其の十歳の誕生日の前に、嬢は小札に下の疑問を記した。「妾は妾の理會し得ない事柄に就いて書かうと思ふ。誰が地球と海と其他萬有を造つたか。何物が太陽を熱くするか、妾が母の下に來る前には何處に居つたか、地球はあれ程に大きく重いのに、何故に墜落しないか。餘暇あらば多くの事柄を、この生徒に教示して下さい」と。

若是等の疑問に解決を與へるものがなかつたとするならば、そは解決を下さずに打捨て置かれただらうか、若しさうでないとするならば、全く積極的若くは理論的の解決を下しただらうか、この事も固より可能的(ポシブル)であるけれど尙一層蓋然的(プロバブル)なるは、嬢が造物者たる偉大なる人間を思ひ浮べ、之によりて、一切を解決することだらう。之を要するに、少くとも或場合には、理性と想像とが共儘に放任せられて、他から何等の輔助がなくとも、獨りで自然に能く或種類の神の信仰を生ずることが出來ると云ふことは毫も疑を容れない。

然し少年期に於ける理性の作用は、信念よりも寧ろ疑惑を生ずることが多いことを認めんければならない。實に兒童の疑惑は半ば戯謔的(プレーフル)なるに反し、青年の疑惑は恐ろしいほど眞面目で、且つ其疑惑の大部分は實際正常的であるやうに思はれる。スターバック Starbuck 氏の質問に答へたるもの丶三分の二以上は、既に懷疑の時期を經たもので、又たスタンリー、ホール氏は幼時より宗教的に育てられ、今現にプロテスタントの學校にある七百人以上の青年の解答によれば、宗教問題に關し嚴しく懷疑と戰はなかつた人は殆ど居ない位に少かつたと云

つて居る。

疑惑の最も强盛なる時期に關するスターバックの說(少くとも男子に就いてのは、十四五歳の頃に始めて疑惑が起るが、併し其後二三年間は比較的靜穩であるとのバーンズの說をいくらか證明する。確に多數の人にあつては、疑惑の最も絕頂に達するは殆ど十八歳頃であつて、女子にあつては二年ほど早い(三十歳以後には疑惑は殆ど起らない)。

青年が懷疑に入る大原因若くは機會に二つあるが、其の一は、遺傳的に、殆ど本能的に疑ふの傾向、あらゆる種類のオーソリティに對する反抗、青年の側からの獨立の宣言であり、其の二は更に重要なものであつて、初めて見聞したる新事實に對して、青年のうら若い理性が反應することである。青年は其の幼少の頃から注入されたる信仰、最も精確、最も堅固なる眞理として敎えられたる信仰が、畢竟極めて不精確なる基礎の上に立ち、極めて薄弱なる議論に支えられて居ることを知つて非常に驚くのである。それ故新に覺醒したる青年は、愈、是等の議論を精査し、攻撃し始める。人間の一生涯に於てはこの時ほど理性が論理的であ

り、又其の結論に顧慮せず、虚僞に堪へられない時はない。固より其の推論法は猶屢、生硬未熟である、哲學宗教上の事柄に關しては、特にさうである。けれども常に正直に、常に勇敢に、側目もふらず、又た常に自ら信ずること厚く、まだ其の遭遇する問題の極めて複雜であることを知らず、又た過去に於ける多くの誤謬過失の統計表によつて失望落膽せしめられたることがないからして、其の結論を下すに勇なる、此時期を除いては、其生涯中、復とありさうにも思へぬ位である。彼は自己の新に發見したる知力を喜ぶの餘り、唯この理性のみを基礎として其の宗教を打ち建てんとするやうになり、通例自然科學の提供した事實のみを其の議論の基礎とするのである。然し其の基礎は、其上に上部工事を施すには餘りに脆弱であることを認め、曾時の間は其の宗教上の思想が續々壞滅し去る結果となるのは勿論である。

右の狀態は多數の人に於ては青年期の終まで繼續する。或は其の一生涯を通じて何等確固たる宗教的信念なくして終るものもあるけれど、大多數の人は三十歳の頃に「改造期」に達し、最に一旦失はれた宗教は何等か他の基礎の上に再

び新に建設せらるゝを常とする。即ち(一)少數の人は終に或る形式の推論を以て、自己の信仰の滿足なる基礎とするに至るものもある。即ち神の存在に關する種々の證明法——通俗的若くは哲學的の——中の一で、其の疑惑を解決するに至る。然しこの場合の極めて稀なるはスターバック、リユーバ、コー Coe、ランキャスター Lancaster 諸氏の公にした解答中にかやうな場合の極めて僅少なるを見ても明白である。(二)又た更に多數の人は(恐くは是等の人々の疑惑は理性の推論によつて起つたと云ふよりも、寧ろ生れつきのものであつたからして)再び或る種のオーソリティに戻つて、之を基礎として其宗教を建設する。(三)又た或は是等の推論にもオーソリティにも賴ることが出來ず、而も疑惑と戰ひ、疑惑に凝りつめて困迷した揚句、其の心の平和を得るために、慰籍になる或宗教的教理を故意に選擇する。之に反し(四)最大多數の人々は其の疑惑が解決出來ないでも自ら鎮まり、宗教上の疑問は、自己身内に知らず〳〵温釀し成長しつゝあつた内的經驗に由て決着をつくるに至る。して其の所謂内的經驗は靜穩であり、控へ目であるけれど、確に是等の人々の信仰を支配し決定するのである。

三

右に所謂內的經驗——變に感情の宗教と稱したるものと同一の現象——は、少くとも粗笨の有樣にて早く靑年期に於て、或は兒童期に於てさへも多數の人々に起る。最近綿密に研究されたる一心發起(コンヴァレセンス)(或は發心(スポンタネアスエクスペリエンス))自發的覺醒(スポンタネアスエクスペリエンス)は、この內的經驗の外に發表したものである。是等の現象が初めて發生する平均年齡は、研究者によつて多少の相異はあるけれど、大體十三歲より十七歲までの間にあるやうである。けれども吾々は深く分析的研究をなさず、唯單に全體としての經驗の時期を記載するに止めてはならない。何せなれば件の內的經驗は人々によつて大に差異あるからして、吾々は吾々の研究を十分有効なるものと爲すには、更に深き分析的研究を要するからである。

前に印度及猶太に於ける感情の宗教に就いて論じた際に、大體宗教的感情に二種類あつたことを述べた。第一は社交的影響、若くは一定の方法によつて故意に誘起されたる猛烈なる、且つ屢、不正常的なる興奮である。第二は往々強くはあるけれど、比較的に靜穩なる感情狀態であつて、前者に於けるやうに、決して

病的とか、狂熱とか云ふ極端に馳することなく、又た大勢集合した際よりも、寧ろ孤獨寂寥の際に生じ、全く社交的抑壓を離れ、多少自發的に起るやうである。又た修養練習によりて發生せしめやうとするには靜慮沈思(コンテムプレーション)によらなければならぬ。そして是等二種の感情は、他の多くの事柄と同樣に、容易に感知し難い程の些細なる變化を次第に重ねて、相互に甲より乙へ移り行き、且つ同一人に於てさへ、例へば或る基督教的神秘論者に於けるやうに、二者が同時に俱在し得るのである。斯樣に二者の間には明確なる分界線を設くることは出來ないけれど、既に述べたやうに、二者は全く別種のものである。

是等二種の宗教的感情は、米國に於て——特に靑年期を經過中の人々に於て、——屢、現るゝ宗教的感情の現象によつて明に例證することが出來る。第一種の宗教的感情は復活會(リヴァイヴァル、ミーティング)に於て現はる。此集會にては宗教的興奮が一般に充ちわたり、燃ゆるが如き狂熱的感情に滿たされ、群集精神が、各個人の精神を支配し、各個人は無意識に摸倣し、自己の從來の意志、觀念を棄てゝ、外圍から迫り來る神秘(ミスティク)的社交力(ソーシアル、パーオス)に屈從する。かう云へばとて、必しも復活會を誹謗する譯では無い、又

た群集精神が各個人の精神を支配することが望ましいかどうかは其等兩精神の性質如何に依るのである。復活會は往々墮落して狂躁蠻野なる興奮場――例へば百年前のケンタッキーに於ける「急撞[jerks]」若くは現今の黑人の復活會のやうな――となるとあるは否むことは出來ないが、又他方には往々正義のためになり、眞正にして永續すべき善を齎らすことがあるとも疑ふことは出來ない。古語に「其の果實によつて其物を知る」と云へるやうに、ウィリアム、ティー、ステッド William T. Stead のやうな人が彼自身の生活及其の親しく交つて居る人々の生涯に、復活會によつて、完全にして永久なる革命を來したことを證言するところによつて見れば、そが適當の方法にて執行されさへすれば、非常に價値あるものであることは拒むことは出來ない。宗教心理學の研究者は先づ復活會の烈しき力によつて、其の生涯をして不德、恥辱、失望より永遠に救ひ出したる場合あることを看過してはならぬ。

然し又た復活會の他の方面を看過してはならない。多數の人々は「認問室(インクワイアリ、ルーム)」と「哀悼者(モーナス)の椅子(ベンチ)」との興奮によつて、後(のち)で恥つべきことを云ふたり、爲(し)たりするやう

になる。そして復活會の強い感情情態が愈、益、激烈となると、彼は「曾に惡い方へ後戻り」するばかりでなく、又一切の宗教に對して偏僻となり、猜疑的となり、嘲笑的となり、當人の最後の狀態は最初より餘程惡くなるのである。

實に復活會は、不思議な魔力を有する器械であるから、其の一度運轉し始むる時は、非常に危險であつて、容易に且屢、誤用され、安全なる軌道を逸する恐ある。それ故人々は其を運轉せしむる前に十分警戒しなければならない。固より時としては良結果を奏することもあるけれど、又た等しく屢、惡結果を生ずるものである。それ故一度之に耽溺すると、宗教を狂暴なる蠻民の躁宴のやうなものに墮落せしむるのみである。

右の宗教的感情のまだ純化しないものと、前述せる靜穩にして圓熟したものとの中間には、復活會や、大なる社交的抑壓等の影響を被らないで起る發心(或は改宗)の場合が澤山ある。是等の種々の場合の中、發心は十分正常的經驗であるやうである。然し此の發心に就いては、既に他の諸學者が十分研究したことであれば、余は敢てこゝに蛇足を添へず、寧(むし)ろ直に靜穩、穩健なる宗教的經驗に就い

て略述しやう。

既に述べたやうに此の靜溢穩健なる宗教的經驗は、社會的抑壓を離れ、模倣を離れ、屢、自發的に起る。卽ち人性の本能的生活的方面から發する。傳染若くは他人との接觸交際によつて得らるるではなく、寧ろ自ら突然之を發見する。より偉大なる生命と交通し接見すとの新感情が、其の人の心に滿ち亘り、其の全き意識界を着色する。此の感情は兒童の頃、若くは晩年になつても起るけれど、概して青年期の始めか、終り頃に於て初めて現はる。そして其の現はるゝ折には、常に大に其の生命を支配し、且つ一旦現はれた以上は殆ど常に留まつて去らない。そは狂熱のために燃えて忽ち消ゆる底の一時の情の發作ではなく、寧ろ靜穩な生活熱の盡きざる源であつて、人の全生命を照し、往々燃ぶるけれど、全然消滅し終ることは滅多にない。其の詳細に至つては章を改めて之が研究をなすべく、今は其の起源に就いて述べやう。

一體右の新感情は早く兒童期に起る、この靜穩な自發的な種類の宗教的感情と認むるを得る十五の解答の中、其の十二は十歳若くは十歳以下である。左に

掲ぐる解答は其の好適例である。「この經驗は極めて幼少の頃に始まつて居るが、吾が生涯中に神の面前に意識的に行つたと自ら信じた時が屢、あつた」。「余は神の現前と云ふことは、一體どう云ふことであるかを、知らなかつた時分は、生涯中の何時頃であつたかを記憶しない、神が常に吾々と共にあると云ふことは、多分敎えられただらう。併し貴問に係る經驗は決して敎えられなかつた。そは自發的に起り、呼吸のやうに自然であつたやうな心地がする。」余の友人で驚くべき程の記憶力を有し、其の三歳の中頃に起つた事件を覺えて居るものがあるが、彼は其の經驗は四歳の折に始まつたと記して居る。併し大抵の場合では、青年期の初頃まではまだ著しくならない。(スターバック氏は「自發的覺醒」の時期を女子は十三年七ヶ月、男子は十六年三ヶ月とし、ランキャスター氏は女子は十四年八ヶ月、男子は十六年として居る)、又た其の現はるゝや、屢、舊信仰に新生命を與へ神に對する新しい考を發見し、祈禱を唱へる際俄に愉快の情を生ずる等の形で現るゝ。ランキャスター氏は次の解答を送つた。「余は十四歳で基督敎信者となつた。どうして斯樣な變化を來したかに就いては、何等の理由をも擧ぐる

ことは出來ない。余は從前話し聞かされた一切の眞理を其折初めて眞實と思ふた。」「余は年一年、一層高い力に賴ることの益、大なるを感ずる。宗教的感情は十六歳の折に深くなり且つ變化し始めた。」「余は十二歳以後は祈禱を捧げたいとの強い願望を有し、倦まず祈禱を唱へ、此祈禱は余を神に接近冥合せしむる。」神なくては何事をもなし得ない。」又た左の報告はスターバック氏が集めたものゝ中から隨意に拔萃したものである。「余は兩親の單純にして强く、且つ純粹なる信仰に養はれたが、十五歳の折に慰籍を求むるために神に向ひ、我が生涯に於て、わが力によりて神に就て猶深く考へ始めた。」「余は終日岩の上に——潮水に歸路を絶たれて——立ち、過き行く時刻をば少しも念頭に置かず、終日寄せては退す波の去來を凝視し、そして眼前見る力と其の顯現とに、一種恐怖の念を惹き起し、遂に之を意匠し、之を支配する神が存せずしては、どうして斯樣に一切の事物が秩序正しく運行することが出來やうかと考ふるに至つた。こゝに於てか我身は渺たる滄海の一粟であるとの感情が溯然として起り、宇宙の洪大なること、神が存在し、存在しない所がないと云ふことを感ずるに至り、其處に跪坐し、我が靈

は我れ以上の高大なる或者と交通するやうに思はれた。斯くて潮は退き、余は將に日の沒しやうとする頃歸路についた。生命は新しくなつたやうな心地がし、欣然として喜び、眼界は更に大となり、人類に對する愛を覺え、他人の爲め重荷を擔ふの決心を生じた。」

余の得たる解答の一で、左に掲ぐるものは、余程參考になるものであるから、少し詳細に拔萃するの價値がある。「余が丁度十三歳の折、一夜暫時の間、非常に平和(ピース)若くは平安(レスト)を感じたからして、それを繼續せしめやうとして、殆ど息をもつかずに居たけれど、件の感情は消え失せ、唯其は記憶のみに殘ることゝなつた。そして其記憶は余が將來に於て實現したいと思ふ理想となつた。余がそを平和と稱するのは、其折の經驗を最もよく描(うつ)し出してゐるものは、イザヤ第二十六章第三節の詩句(なんぢは平和(やすき)にやすきをもて、志固きものをまもり給ふ。彼はなんぢに依賴(たのな)めばなり)に如くものはないからである。余は件の詩句の書き添へてある當年の古い記錄を發見したが、是が發見は恐くは余の研究の端緒となつたと思ふ。……余はヘヴァーガル Havergal 女史の「神の悅樂は永久である」と云ふ語

によつて斯様な平和の感情は電光のやうに來るではなく、寧ろ不變ならねばならぬことを確信するに至つた。併し件の感情は最初には電光のやうにして來り、而かも常にそを生せしむる原因を發見し得なかつたが、其は或る法則によつて支配せらるゝに違いなく、其の法則を發見することが出來さへすれば、其を自由に再現し得ると感じたと記憶する。……或日、或る古い註解中に、自己の經驗を記してあるを發見し、之に由て、其原因は神に絶對的に從順に服從するにあることを悟つた。余は既に神の言葉を研究することと、祈禱を捧げることとは、平和を齎らすに與つて力あることを感じた。……毎日或時間、獨居することに依つて、件の經驗は次第に長くなつたが、其の強さは稍弱くなつたやうである。其狀態を云ひ表すには「平和」と云ふ言葉が最も適して居る。そして余が正當であると思ふた場合には、直ちにそれに着手し、出來るだけ時間を省いて靜に神の言葉を研究するやうにすれば、常に件の感情を有つことが出來ることを悟つた。どのやうに日常生活の貧苦が其を妨ぐるとも、平和は失せないけれど、不注意であれば常に消え行くことを悟つた。」

誰でも右に述ぶる所と、多數の基督教的神秘論者の所述とは著しく類似していることを認むるだらう。この經驗は最初には求めないで而も石火のやうに突然發現する。この經驗は既に自分が有つて居る宗教的觀念に依て說明せられ、其後は有意的に求めらるる。この經驗を再びする方法は、種々の人の經驗の記錄中に見出すことを得る——右述べた場合には、古き註解中に見出され、多くの神秘論者の場合には、昔の神秘論者の祈禱錄に見出さるる。此の狀態は一定の方法を踏んで修養せられ得べく、そして今右に掲げたものは、確に大多數の宗教信者中の標本的なのである。

以上總ての源泉を調べて見ると、此の靜穩なる宗教的經驗に屬するものは、初めは自發的であるけれど、後には修養せられ得ると云ふことを認める。こは男子に於てよりも、女子に於て特にさうである。一般の兒童は、余り客觀世界と、自己の活動とに親しみ過ぎ、內的感情生活の發展する機會を與へない。又た疑惑の期間中は、宗教的感情は寧ろ鎭靜休止する傾向がある、この事は大學生に於て特に著しい。又た悲しむべきことには、往々兒童に現はるゝ怒つた神の像が感

じ易い兒童にとつては、宗教的信賴と兒童の權利たる歡喜の情を壓し潰し、或は數年の間遲れしむることがある。例へば非常に深い宗教的經驗をやつたる一女子の解答に曰ふ、「妾の神に對する最初の感情は、恐怖の感情であつた、――妾に出來得ないことを要求し、妾が愛しなかつたからとて、怒りの眼で妾を見て居たる爭ひ難い力と云ふ恐怖であつた。妾は神は限なく我儘なもの、殘酷なものと考へた。」假令この女の宗教的感情は、之を自然の發達に任せて置いたらば、非常に深い宗教的感情の源となるべき性質のものであつたけれど、その嚴格なる神學的觀念に育てられたが爲めに、二十歳を過ぎるまで宗教的經驗のどんなものであるかを知ることが出來ず――漸く其の愛兄の死に及んで自覺するに至つたのである。

かやうに疑惑若くは峻嚴なる信條は、往々宗教的感情の發達を沮礙するけれど、若し一旦是等の障碍が除かれ、宗教的感情が發動し始めると、自然の勢ひ、大に信仰を助長するものである。この事は各人種の宗教史上にて反覆絮說し、又た青年期に於ける人々の經歷に於ても之を見、又た晩近宗教心理學に關する研究

の結果は殆ど總て、この事に就いては一致して居る。冷灰なる半死の狀態にある知的信仰は、感情背景の生活力と接觸して活氣を生ずる、斯くて生氣を與へられ吾が生命の最も深き流と合致したらば、其後は疑惑に壓し潰され、議論によつて攻め破らるゝやうなことは殆ど無い。リユーバの報告によれば、或る神學生が推論によつて四福音書のオーソリテイ、及び之と聯關して基督教の信仰に對して疑惑を生ずるに至つた所の經驗を叙して曰ふ、「余は高き嚮導者であると考へた者に全身を委ね、……萬の物と吾れとが一なるを感じ、平和に充ちて居た。……奇怪な言ひやうではあるが、一切の論證は自分の思想中には這入らぬやうに思はれ、論證をなすの能力も資格もなく、論證は全く余を遠ざかつて居た。余は論理的立場を採れば、全然余を說き伏せつゝあつたことを知ることを得た、けれど、余の內部の信仰の平和は毫も攪亂せられなかつた。」卽ち青年期全體に亘つて、理性は信仰の滿足なる基礎を得んとの青年の計畫を失敗に終らしめ、生活背景の本能力が、斯る基礎のために唯一の確實なる材料を供給するのである。

青年期の煩悶擾亂を經過すれば、各個人は一般に確固なる滿足なる信仰に落

ち付くやうになる。スターバック氏の説によれば、かく疑惑を脱し、或種の信仰に復歸することは、推論によるものは極めて少く、寧ろ心理的なると同時に生理的なる有機體全部の本能力、生活力に基くのである。宗教的信仰は最早青年期に於けるやうに、推論作用を加へたり、論證をなすべき命題と見られず、寧ろ「内部より」見らるゝのである。スターバック氏は其の典例として左の解答を擧げて居る。

「余は宗教なるものは生命に附け加へられたものでないことを知つた。余は外的儀式の遵奉からして主觀的生活に入り「神靈」と冥合するに至つた。」「余は神を知ることは、知力の關することではなく寧ろ生きて居ると云ふことが神を知ることであることを悟るに至つた。」

右の「改造期」及び一般に成年(次章に詳論する通り)の宗教的感情は、殆ど常に靜穩永續的のものであることを記するは最も興味あることである。復活會や、狂熱的模倣的發心やの興奮は、二十五歳以後には殆ど起らない。二十五歳以後に起るものは、殆ど常に自發的で、自然的で、又全く正常的の現象であり、且つ斯樣な現象を生ずるに最も適當な條件は心身の健全である、加之(のみならず)スターバック氏の統計

によれば、それは青年期の末頃に、新たな動力を得、それから多年の間は引き續いて發展するに反し、知的概念を中心としてゐる宗教は確に衰頽する。この知的宗教はスターバック氏の材料によれば、主に二十歳から二十四歳までの青年に起り、年齢の加はるに從つて次第に其の影を收むる。併し女子に於ては殆ど全く知的宗教は缺けて居る。之に反して「内的生活としての宗教の信仰」は、青年には比較的少いけれど、其信仰が一旦崩したならば、確に且つ速に發達し、四十歳後には宗教的生活の最も重要なる要素となるのである。

以上述ぶるところを以て、少年期及び青年期に於ける宗教信仰の發生と發展との研究を終り、之から大人期の研究に移る。如何にして信仰が兒童に發生し、如何に、組成期(フォルマティヴ、ピリオド)に於て發展するかは極めて重要なる問題であるが、之と等しく、又た重要なる問題は、十分完全なる能力を具備する大人は其の青年期に得た信仰を何故に持續するかと云ふことであつて、こは當に次章に於て研究すべき事項である。

第八章　大人期の宗教的信仰

米國の中流社會に於ける宗教信仰の狀態を精密に觀察すると、其の實際の勢力の驚くべきほど強く、且つ殆ど總ての人が宗教を信じてゐることを認むるだらう。余は屢〻「此頃はどうしてこんなに懷疑者が多いだらうか」との疑問の繰返へさるゝのを聞くが、其度毎に「どうしてこんなに宗教信者が多いだらうか」と答ふるやうな感じがする。そは蓋し余の知友隣人が其の受けた教育、其の有する知力の程度にこそ差異があるが、悉く神を以て最も確實なる實在となし、毫も疑を容るゝの餘地なきものとして居るからである。青年や未成年者にこの事があるとも、敢て怪しむを要しないけれど、かの大人に至りては、其の少年期の觀念を著しく變更して居るのに、猶老年に至るまでも所謂神なるものを依然信仰して居るのは何故だらうか。余が此疑問を提出する所以は、由て以て其の信仰の正當であることを證明すべき理由の如何を問はんが爲めでは無い、寧ろ其の信仰の築き上げられて居る根柢は如何、眞の基礎は如何と云ふことを問はんが爲

めである。宗教心理學ではこの事が最も根本的の問題であつて、又た宗教的生活の理論的實際的問題と最も直接の關係を有して居るのである。

余は此問題を解決する資料を得んが爲めに、附錄に掲げて置いた質問書を發送したが、其の主なる目的は、出來得べくば、論證(argument)と、推論を交へない經驗(unreasoned experience)とが、一般の民間信仰とどう云ふ關係を有つてゐるかを發見し、特に實際經驗をした人が、所謂神の直接認識と稱へる現實(リアル)な活きた經驗(リアル・アンド・ヴァイタル・エキスピリエンス)が、どれほど有力であるかを知らんがためである。語を換へて云へばヂェイムズ教授の所謂「神秘的胚種 mystic germ」がどれ程宗教界に廣がつて居るかを、あらまし闡べんがためである。宗教社會に於ては、「神の現前の經驗」と云ふことが屢〻言はるゝが、余は其經驗とは普通どう云ふ意味のものであるか、そは單に或る少數の範圍に限られて居るか、或は可なり廣く一般に通有するか、どうかを知りたいのである。

質問的研究法なるものゝ危險を感ずるは、之を試みたる人に如くはない。蓋し其の幸に集め得た解答の數は、是等を集め來つた社會の廣さと比較して見る

と殆ど比較にならぬ位に瑣々たるものであり、且つ其社會に於ても、是等の解答をなすことに趣味を感ずるものは、唯僅に一二の少數者に限られてゐるからである。それで是等の解答の價値と云ふものは、十分に模範的のものであるかどうか、卽ち論理學者の所謂「公正なる標本」であるかどうかによつて定まるのである。して此質問法によつて公正なる標本を集めることは、種々の事情のために甚だ困難である。第一に自然淘汰によつて、解答は唯一二の種類の人々から來る傾がある、卽ちどうしても極端なる人か、若くは常ならぬ人が其の意見を述べる機會に飛んで出さうであり、之に反して實際其の社會の模範的人物であつて、斯樣な人々の解答こそ特に千鈞の價値があるけれど、斯樣な人には何等記すべきほどの非常な事、若くは殊更興味ある事がないからして、從々そを答ふるだけの價値がないと考へる。實に解答に興味があると云ふことと、價値があると云ふこととは往々逆比をなすのである。よし又第二に、眞の模範的人物が解答を送るとしても、其の述ぶるところは、其の書く折に偶然最高潮になつた心持を往々書き表してあるばかりであるか、若くは其の特別の場合に偶然心中に現れた

る或觀念に基いて居るのである。第三に質問が提出されて居ると云ふ單なる事實が、其の當人を理論的になし、平日と異つた心的狀態となし、從て其の解答に著しい影響を及ぼす傾向がある。固より是等の事は事實には相違ないが、併し善く注意さへすれば、質問的研究法の價値を全然滅却し去るべしとは思はれない。第一の危險——卽ち自然淘汰によつて、解答が主に極端なる人々から集り來る傾向——は自然淘汰をして質問法と成るべく關係を絕ち、手を斷らせるやうにして避けることが出來る。余は質問の大部分を眞に模範的宗教信者と云はるべき人々(誰が見ても模範的宗教信者と判斷し得らるゝ範圍內の人々)に配布するに努め、そして其解答の大部分は宗教社會の代表者(どう見ても)と認むべき人々から來た上、明に宗教的畸形者から來た解答は注意して之を放棄した。勿論如上の第二、第三の困難は十分に避ける譯にはゆかないけれど、解答を處理する際に、其の表面に表はれたる僅には採らず、寧ろ各解答を全體として解釋して、其惡影響を避け得たと信ずる。或問題、例へば第一、第七、第八、第十の如きは、全く此見地からして提出した、之に反して殆ど其他の問題は總て明に一般的問題に關係

して居る。又余は幾度も解答者を訪ひ、其の解答に就いて親しく談論し、又親しく談論する都合にゆかない時は、幾度も特殊の點に就いて文通し、其の眞意を明にした。余は五百五十通を發送して、八十三通の解答を得たが、其の解答は大體分つて二種となすことが出來る。第一は模範的な「教會在籍者(チャーチ、ビーリング)」から集まつたもの、第二は知(インテレクチュアル、ピープル)の人、卽ち教授、大學卒業生及び二三の心靈研究會(サイキカル、レサーチ)會員から集つた稍、雜種のものである。右の第二のものが、米國の知的社會の公正なる標本を實際示すかどうかは未だ俄に保證し難い。かくて集め得た八十三通の解答中、五十七通は第一種の人々から來、二十六通は第二類の人々から來た。是等の中で三通はどんな種類の神をも一切信じないと云ひ、二通は明に宗教的畸形者であり、又一通は確かな解釋がつかなかつた。それで實際役に立つたのは僅に七十七通の解答に過ぎない。

斯樣な少數の事例からして、一定の統計表らしいものを作つたところで、其の價値のないことは勿論であるけれど、飜つて是等の事例を宗教的意識の標範として、又た現今米國の東部地方の新教徒社會に存する神の信仰はどう云ふ性質

のものであるか、其の力はどうであるかを概示するものとして研究する場合には、大に價値あるものと思ふ。宗教的信仰の基礎と云ふ問題と關係して、右のやうに見て來る時は、是等の事例は、これから詳論する通りに、三種類に分るゝのである。

一

第一種はオーソリティ(第一の意味に於ける)若くは習慣惰性を根據として神を信ずると云はれる人々であつて、其人々の信仰は殆ど朴素的信仰の中に繰り込まれ得べく、朴素的信仰の色彩を帶ぶることが實に強い。彼等の神を信ずるや、其の小供の折に神を信ずるやうに教へ込まれたからであつて、一旦斯樣な心的習慣を作つてからは、之を變化せしめんことは中々六ケ敷く、又た甚だ不愉快である。この惰性と云ふことは、あらゆる種類の信仰に於て大切なるものであつて、多數の人々は一度或方向に向ふて發足した以上は立ち止まつたり、方向を變換したりすることは極めて難く、まして思索に慣れず、獨立の思想を有たない人々は特にさうである。「小枝が曲つて居るからして、木が屈んで居る」やうに、兒

童の時教はつたことは、後々まで吾等の總てに對して或影響を有ち、大多數の人々にとつて、甚だ大切である。世の中には事理に通じた知慮ある人々でありながら、尙其の平生信じ慣れたと云ふので信ずる人が甚だ多い、又中には今まで信じて來たことを信じた方が氣樂で、安氣であるからして其の信仰を續けて行く、——懷疑說や無神論は多忙な人に對しては、余りに多くの時間や勞力を要することである。次に掲ぐるものは其の代表的のものである。「全く躾の爲である。一體余は長老派（プレスビテイリアン）の教會にて育てられた。——常に教會に行き、日曜學校に出たけれど大學生の間は無神論者たるを以て誇りとした。然るに一度世の中へ出ると、此問題は他の問題のために背後に擠し込められ、其後解決されずに殘つて居たが、兎に角左の結論に達した。「神が居なくとも、神は居るべき筈である。余は之に依て行動し云爲しやう」と。此人はかやうに理論的懷疑說を抱きながら、第五問に對して次のやうに答へた。「神は眞に實在せる人格であると云ひ得ると考へる」と。彼は科學的研究に一生を委ぬる困しさに、其の宗教上の問題を終局まで考察することを中止し、遂に「余の宗教は一束の矛盾であつて、之が調和を計る

ことは餘程永い以前から止めて仕舞つた」と云つて、容易に且つ自然に其の兒童期の習慣に後戻りをした。これぞ疑ひもなく普通一般の經驗である。實に世間大多數の人は深く考へないで、神の存立を勿論のこととして臆斷する。卽ち彼等が信ずるのは、疑を起さないからである。之と同一の慣習の影響は所謂「教會在籍者中」に一般に多い。其の代表的なのは左に掲ぐるものである。「余が神の信仰は、聖書のオーソリティと、少年の頃から我兩親より受けたる教育習慣に基いて居る」、「余は人間の靈魂の不滅を信ずる、そは然か教へられたからである。」又他の人が云ふて居る、「余が幼少の頃より、兩親と公衆から教はつたやうに、神は其意志目的を遂行するに無限の力を有する聖靈である。……かやうに人から教はつた神に關する知識は、余自ら「神の言葉」を研究して掻き集めた知識と相合して、次第に信仰となつたが、どうして然るかは自分にも分らない。」

此の部類に屬するものは、概ね思考を廻らさない——舊教徒と新教徒との區別なく——で、恰も丸藥を丸呑みするやうに、其の信仰條條を鵜呑みにする者であつて、其オーソリティ——は教會であれ聖書であれ——の効力如何に就いて論究する

人々は此の部類に屬しないで、寧ろ次の部類に屬する。併し世の大多數の人は、恐らく少年時代に唯僅か許り煩悶苦闘した後、其の選擇したるオーソリティの教ふるところを其儘信ずるに至るのである。

此點に關しては、聖書のオーソリティと關係を有する第九問に對する解答を考察すると實に面白い。此問題に對する七十三の解答は殆ど同數に分れ、三十四は聖書のオーソリティを承認し、三十九は之を否認して居る。誰でも當然豫期する通り、聖書のオーソリティを非認する人々は、「教會在籍者」ではなく、寧ろ「知的」の人の殆ど全部であつて、二十三人の中、僅に二人だけが之を認めて居るに過ぎない。又「教會在籍者」から集まつた五十の解答中、其の三十二は聖書のオーソリティを認め、十八は之を否定し、是等兩者に通じ、其の二十二は、其の宗教的信仰と宗教的生活は聖書を根柢として居ると云ふて居る。卽ち余の質問に答へた「模範的宗教家」の殆ど正半數は其の信仰、其の宗教が古い聖書觀に基いて居ると感じ、爾餘の半數は、其の宗教的生活が聖書のオーソリティと無關係であると感じ、或は全く其オーソリティ(古き意味に於ける)を否定して居る。「聖書のオーソ

リティを信ぜざるに至らば、神に對する信仰及び神と世人とに對する關係は幾何の影響を蒙るや」との問に對する解答は、極めて僅少であつて、先づ次のやうなものである。「神を信ずるに至つた根柢を取り去るのである」。「聖書のオーソリティを信じないやうに、直に神其者を信仰しないやうになるだらう。」「余は哀れむべき狀態に陷り、何等の善行も成し得ないやうになるだらう。」併し大抵の場合には斯程に、重大な結果を生ずとは想はれない。左に其の模範的なのを掲ぐれば「神に對する信仰には、さほど影響はあるまいけれど、大いに余の慰籍を減ずる。」「余は依然自己の信仰を續けることが出來ると信ずる。」「神に對する信仰には影響はあるまい。」次に最早聖書のオーソリティを承認しない人々の境遇は左の例にてよく分る。「聖書の教訓には大に余に裨益する所があるけれど、そは余が自ら經驗して感じた事柄を述べた記錄の氣がする。」若し是等の解答を以て公正なる標本であるとするならば、第九問の結果は、社會の多數の人々は猶聖書のオーソリティを認めるけれど、知識を增し、研究を進むるに從つて、漸次に之を認めないやうになり、且其の宗教的信仰をひどく傷けないで、全く之を否認し

得らるゝことを示すやうである。

此の第一類の信仰は、既に述べたやうに、非常に朴素的信仰の色彩を帶ぶることを以て、其の特徴として居るけれど、兒童期の單純なる信仰、卽ち殆ど催眠術に於ける誘唆の如きものとは大に違つて居ることは言ふまでもない。又た習慣の力からして依然オーソリティを承認して居る朴素的な大人も、どのオーソリティでも之を承認して居ると云ふ譯ではなく、且つ其のオーソリティの選定は通常偶然に出づるけれど、猶其信仰には、かの兒童期に發見さるべくもない新な半合理的の要素が存在して居り、此の半合理的要素によつて第一類の信仰から、感知し難い程の移り行きで、第二類の信仰に這入るのである。

二

第二類の宗教的信仰は、明に或種の論證——其論證には善いのもあり、惡いのもあり、或は善いとも惡いとも云ひ難いのもある——に基いて居る。此論證には色々あるが、其の最も廣いものは、第二の意味に於けるオーソリティを基礎とした信仰である。科學の專門家の所說が採用されたると丁度同じ方法でオーソ

リティが採用される、——單に習慣からして其オーソリティを信ずるでなく、爲にそを信じた方が善い賢いと思はるゝからである。大學卒業生で舊教徒たる余の知友が左の如く云ふて居る。「余若し病に罹らば、醫者の處へ行かう、そは藥や身體の知識を有するは、醫者の役目であるからである。又羅甸語を學ばうと思はば羅甸語の教師を訪はう、そは蓋し羅甸語の教師は羅甸語を學び、之を知るからである。同じく神に就いて知りたければ、或牧師に代表されたる教會に行かう、——そは余に自ら是等の事柄を研究すべき餘暇がなく、牧師が其時を有つて居り、且つ教會は宗教上の事柄に關してはオーソリティたること、丁度醫師や教師が夫々自己の專門に於てはオーソリティたるが如くである」と。こは實に新舊兩派の人々の大多數の態度である。吾々は吾々の「事實」の十分の九と云ふものは、信仰を土臺として受け納れるのである。——然るに何故に宗教上の事實は、等しく信仰を土臺として受け納れ得られないか、特に多數の人々が多年の間之を受け納れて斯くも好結果を奏したるに於てをやと。こは決して推論を交へず、推論によらない信仰ではないとは明である。而も推論の根據となる特殊の事實の

選擇法が、明白なる論證的の信仰とは異つて居る。勿論斯樣な議論は往々循環論法に陷るけれど、然し其れが例へば次のやうな場合に於ては、目に見えずにゐる「われは神なり、我の他に神なし、われは神なり、我のごとき者なし(イザヤ第四章第十七節、第二十節)」と云ふやうに、自ら神と明言する聖書の句のオーソリティに據りて「余は神を信ずる」と。併し直に斯樣な推論の矛盾を看破し得る思慮ある人々で、猶且つオーソリティに――其オーソリティの意味は異うけれど――しがみ付いて居るものが多い、彼等は聖書の文字の儘の神の託宣(インスピレーション)說は既に放棄したかも知れないけれど、尙或預言者等、殊に基督のオーソリティを確信して居る。一婦人の解答に曰ふ「妾の信仰は基督の強い推論によらない敎訓を基礎として居る。併し基督の敎訓は孤立した事實ではない、寧ろ神の啓示と稱し得べきものが、人間を通して現はれ出たものであると思ふ。」又他の一人は「余に存する或物が嘆賞する宗敎家の傳說」をオーソリティとすると云ひ、又他の人は其の兒童期の信仰は兩親、師長、聖書等のオーソリティに基くと云ひ、更に語を續けて「けれども此頃神に對する信仰に基礎を與へるために、論證は確に重要なるものとなつ

た。余の心は兩親のであれ、聖書のであれ、基督のであれ、若くは宗敎史上の偉人物のであれ、兎に角オーソリティの根柢を、例へば彼等に告げるべき權利があつたか、彼等の生涯は、其の話す言葉の眞實であるとの證(あかし)を與へたかどうかと云ふ風に、多少探つて居た。實にこの論證は余の現今の信仰を打ち立つるに當り、最も有力なる證據となつたと思ふ。不完全ながらも彼等の信仰と言葉とによつて表はさるる或る實在者があつたと假定するでなければ「神に屬する人々」の事業も、又少くとも敎會に屬する人々の事業すらも、滿足に說明し得なかつたし、今も猶說明し得ない。」

この第二類の人で、非常に合理的な人は、其の信仰を主として推論に打ち立て、往々一切の宗敎的感情と、この宗敎的感情に賴ることを非常に蔑しむる。一解答に曰ふ「余は神を知的道德的必然として信ずる。余の神に對して有し得べき感情は、この必然を作る實在者を認めてからして生ずる。神は余にとつては合理的存在者としての實在である。余の從來遭遇したと思はれる經驗には何れにでも、上のやうに解釋した「感情」が伴うた。そしてこは、他人に斯樣な現象の存

する際に、其を説明するに當り合理的基礎となると思ふ」と。其の擧ぐる理由に色々ある、或は自然界に於ける秩序、意匠を擧げ、或は人類の進歩を擧ぐる。一解答者曰ふ、「余は神を信ずる、何せなれば吾々の住する世界は、或る「人格」から作られ、且つ支配さるゝものとしての外は考へられないからである。」他の解答者曰ふ、「輓近に至り證明されたる他心通(テレパシィ)と云ふことは大に余の考を助けた」と。自己の信仰は合理的基礎の上に立つて居ると考へて居るものの變に扭ぢけたものの例は、左の解答に於て見ることが出來る。「余が神を信ずる理由は、(一)余の信仰の證明は、神からの恩寵として有すると云ふことである。」(こは第一類に算へ入るべきものでは無い、尤も此解答は全紙其人の信仰の眞基礎は、オーソリティにあることを示して居るけれど、自らはそを推論だと考へて居るからである。)之と著しく反對せるものは、左の解答である、「余は第二問に對する答解として、神を超自然的實在となし、そしてこの神を信ずる理由は左の通りである。第一、余は日常の經驗に於て、幾多の衝動、態度、評價が余及他の人々から生ぜらるゝを認むるが、其等の衝動、態度、評價は、吾が周圍の世界に於ける事物と事件の進行とに就いて

吾々が有する經驗によれば、全く正當であるとは許し難いやうに思はれる。其の最も主なる實例は、合理的の人々は理性の命令に從へば、除儀なく全く利己的の目的によつて行動しなければならないやうに思はれるにも係らず、尚愛他的の行動をする場合である。第二、更に親しく、余は或動作若くは心狀態が——固より是等が余の爲めになると、將た何人の爲めになると其等は全く別として——善なることを強く感ずることが度々ある。そして是等の善と云ふ感情は非常に効力があり、全く疑ふことを容さぬほどに確なものと思はれる」と。第一原因に關する古き證明を書き載せたものは一通もなかつた。余の集めた七十七の解答中、二十二はこの第二類に屬して居る。

三

第三類の宗教的信仰は、曩に第二章に於て「感情的信仰」と稱したものであつて、そはかの要求(ディマンド)若くは願望(ウィシュ)若くは多少漠然たる直覺的感情的經驗(インチュイティーヴ、アフェクティーヴ、エキスピリエンス)から發する信仰を含むのである。今之を二小分して、明白なる要求若くは願望を本として居るものと、神秘説らしいものを本として居るものとなすことが出來る。

右二者の中、前者は「信ぜんとするの意志 will to believe」を以て、其の特徴とする。一解答者が曰ふ、「余が神を信ずるのは神の現前を經驗したからではなく、寧ろ余にとつて神の信仰が甚だ必要であつて、そは眞ならざるを得ないからしてである。」又他の一人が曰ふ、神を信ずるのは「神は宇宙の唯一の希望である、希望ある人生を造り出す源であるからである。若し神を信仰せざらんか、吾人の生存は希望なきに至るだらう。」「余は特に道德上の理由からして神を信ずる。若し神が存在せぬとしたら、事物は無感覺であつて、死物のやうに思はれるし、又若し余が信じ得ぬにしても、神は行く〳〵余を助けて呉れる」と。就中最も明白なのは左に記するものである、「余の神を信ずるのは、余自ら神を信じたいからである。……祈禱することが好きだからして祈禱する、……靈魂の不滅を信ずることが好きだからして靈魂の不滅を信ずる。」大多數の人々は自らは意識しないで多く此部類に屬する。彼等は其の信仰が聖書のオーソリティ又は或論證を基礎として居ると考ふるけれど、然し其實は彼等が其の信仰を守つて居るのは、其の信仰のなくなつた折に生ずる恐怖と失望とを心裡に畫くからである。正統

派の教義を辯護するを以て目的として居る多くの說教に於て採用せらるゝ論證法を分析しても亦同一の結果に達する。即ち論證さるゝ問題は、「何が眞なりや」と云ふことでなく、寧ろ「何が信ずるに心持善いか」と云ふことであるやうである。即ち常に實用主義風の要求が存在し、在來の古き教義は幸福を齎らすからして人々は縋り付いて離れないのである。一解答にいふ、「數年の間懷疑と論證に耽り、絕えず神經を惱ました後、遂に年少時代に注入されたる平易で、而かも丈夫な觀念に立ち戻り、そして宗教上の問題に就いて心の平和を得た。斯くて實際世界を見ると、或る人々は基督信者として死に、又た他の人々は不信者として死んでをる。そして余は年少時代の夢から醒まされた。」

併し第三類の信者の大多數は、神秘論者風の信仰を有する者であつて、其には種々の階段があり、稍紋切り形の文句に云ひ表されたる漠然とした場合から次第に上進し、終に極めて強い程度の經驗に及んで居るが、是等は總てかの「神秘的胚種」——或は花或は菓實——なるものを含み、其の神に對する信仰は、所謂神の直接認識として說明さるゝ經驗を基礎として居るのである。左に掲ぐるものは其

の模範的の述べ方である。「余は神を信ずる、何せなれば神を知つて居るからである。神の存在に關する證明は、一として人を混惑せしめないものはない。斯樣な證明の餘人に及ぼす影響如何を見れば、益、自己の考を確める許りである。」「余の神を信ずる所以は神の現前當來を明瞭に經驗したからである。時として余の信仰が弱くなることがあれば、斯樣な神の現前當來の經驗を回想して、蓋に復る。」「オーソリティと論證とは、余の信仰を決定するには實際上さまで重要でない。神は常に現前する實在であるとの直接經驗が、余が神の存在を信ずる主なる基礎である。」「神に對する信仰は遠く主に少年期の經驗を根柢として居ると思ふ。……余は今日に至るまで決して眞面目に神の存在を疑つたことがない。若し假にそんな場合があつたとするならば、疑ふことの出來なかつた證據として、余のこれ迄の生涯の或時期に經驗した余自らの神の意識に立ち返り、之に賴つたことだらうと思ふ。」

是等一種の神秘論者見たやうな信仰形式は、其の範圍甚だ廣く、解答者の七十七人中、四十人は之に屬し、其他十六人は其の信仰の重要な根柢とはなし難いけ

れど、尙以上の如き經驗を經たと云ふて居る。七十七人中、五十六人が神人の直接交通を固く信ずることは驚くべき顯著な事實である。且又こは特に卓越したる宗教的經驗であつて、宗教の眞髓は此に存するのである。然し出來得るならば、是等の人々の所謂「神人の直接交通」と云ふことは、どう云ふ意味のものであるかを發見するは、宗教心理學上最も重要なる問題である。抑も「神人の同交」、「見神の實驗」とは、どんな經驗であるか。どうして神を感ずるか。余の企てた質疑法は悉く此問題と關係ある事實を蒐むるを以て、直接將た間接の目的としたけれど、特に之が爲めに書いたのは第五問である。そしてこの現象は極めて重要であるからして、茲に記載した形式の信仰の場合よりも尙精細に解答書の攻究をなす必要がある。

「神の現前を意識」した人と、まだしない人との間には、嚴密なる分界線はない。其の差異は強度の差であつて、強度の強いものから弱いものへと漸次に下降して、遂に其の經驗がなくなる。そして人々の之に下す所の說明解釋と云ふものも、主に其人々の有する宗教的觀念の如何に依つて異說がある。固より世の中

には右のやうな神人同交の經驗を全く有しない人々も居るけれど、又反對に少くとも、いくらかの神秘的經驗を有つて居る人の數は、一般に信ぜられてゐるよりも多數である。「神人の同交」と云ふことは、どう云ふことであるかを全く知らない人々も、猶超自然的のものに對して朧げなる、推論によらない、敬はらない感情を有つて居り、此感情からして模範的の宗教的經驗に知らず識らず接近し行くのである。例へば余がまだ見神の實驗をしないものゝ中に算へた一解答者が神に關する總ての精密なる定義を嫌ひ、どうしても祈禱せんとする氣にならなかつたに係らず、其の意識の背後には朧げに神を感じて居たと云ふて居る。其神の本性の漠然として把捉し難いこと、恰も心の奥に進み行く音調のやうであつて、そは常に存在するけれど、捕捉し、定義し、分析し難いのである。彼の見神の感じは甚た弱く、把捉し難いけれど、若しそれが無くなつたらば、其の生命に大なる空虛を生じ、一種の物足らぬ感じがする。特に道德上、或る危機に陷らうとする場合には不可知的の者が、彼を支えるやうな感じがする。彼は實に強く、且つ明白なる意味の神の意識は有しなかつたに係らず、彼は次のやうに附言して

居る。「あの方面からの他の人々の發する言葉を聞く折には、余の中に何物かがあつて之に應答した。余はより深い聲を認めた。或る何ものかゝ眞理はあそこにある」と告げたと。

最も漠然たる形の經驗の一で、其經驗を經た人々が、神の現前當來の意識となして居るものは、自然界の美景に依て惹き起されたる美的感情と殆ど區別し難く、且つ既に從來から有つて居た神の觀念と連合して居るものである。一解答に曰ふ、「余は神の現前を自然と人性との奥底に於て發見する。余は際涯もなき見通し難き大森林の中、或は海上に、海岸に、或は夜間屋外に、閃く星の下に居た折のやうに、敬虔なる感じを起したことはまだない。」又他の解答に曰ふ、「然り、或意味に於て神は實在である、日光が森の木の葉の中を洩れて輝き、且つ余以外の人々には見えない羊齒や花を照すのを見るときは、神が近くに在るを感ずる。そして此の感じはどんな說教を聞く折にもまだ感じなかつたものである。」此場合には其人が偶、信仰を有つて居り、若しこの信仰がなかつたらば、單なる美的快感に過ぎないものをば、其の有つて居る信仰によつて、宗教的經驗として解釋され

るやうに變じたことは勿論である。併し此際實際感せらるゝ情緒は宗教的情緒であつて、かの自然に對して生ずる單なる審美的快感とは明に異つて居ることと、それから其の原因が何であらうとも、各個人の生活と信仰とに對して多大の意味を有し、オーソリティを有することは注意すべきことである。

次に漠然たる宇宙的情緒（コスミック・イモーション）と稱し得べきものが又之に屬する。――例へば「余は「神の力」に就いて語る場合には、男性代名詞を用ふるを欲しない、從つて余は「彼」の現前を經驗しない。けれども「高い生活」と云ふ思想が起る度毎に、名狀し難い喜悅と愉快とを感じた。……余は或る何物か偉大なる心的刺戟として、精神的向上として余に現はれ來ることを附言する。」又他の答者がいふ、「或る日、何とも名狀し難い事情の下に、然し要するに自己にとつても、自己以外の人にとつても平和であり、そして自然界の或方面に向ひあつて居た折に、突然自然に對し不思議な同情の念が湧いて來た。余が黃昏、窓外を眺望し、或は芝生の上に横はつて、樹梢を煽ぐ風の音を聞き、日光を嘆美し、山色を觀想（コンテムプレート）する際に此感が起つた。是に於て萬（ものゝ）の物は皆自己の言葉を有し、平和なる喜悅を告ぐるやうに思はれる、……

其時靈魂は躍り出た、――何處にと問はれても分らない、どんなにと問はれても云ふことは出來ない。然し吾々は自己を超越した新しい世界に入れられたやうな感じがし、最早暫くの間でもこの詰まらない地上には歸りたくないやうに感じた。是等の經驗は一二分間以上續かない、こは神の現前の感とは稱し難い、何せなれば、其際には全く祈禱がないからである。又そは神人の同交の感とも稱し難い、寧ろ恰も壯大なる世界の洞觀（インサイト）とも云ふべきものである。」

多數の人々が神の現前を最も明瞭に經驗する場合は、非常なる難儀に陷つた折である。此折には、情緒的生活に於て既に熱烈に、損亡（ロス）と失望との感は其人を殆ど壓し潰さんばかりに強く、意志は援けを求めてまだ之を得ない。かやうな場合には、既に其の信ずるやうに敎え込まれたる「救ひ主たる神」と云ふ觀念が、其の意識の背景より突如として現れ出で、其の思想を支配し、遂にはこの觀念が一の中心となつて、種々の情緒的要素を之に聚注せしめ、全身は非常に興奮し、意識は小意識（サブコンシャス）的方面、或は無意識的方面からの些細の影響にも非常に動かされ易く見え、平日は半睡の狀態にあつた全人格の非常に深い生活的要求が強烈となり、

そして特にかやうな場合には目に見えないものが現前すとの感を生じ易いのである。一婦人の解答に曰ふ、「妾が父としての神は實に實在である。妾は神の現前を經驗したかと云ふに、一度ならず經驗した。就中最も活き〳〵として今に忘れられないものは、妾の小さな長子の發足を見守つて居た際に生じた力（ストレングス）と平和（ピース）と靜穩（クワイエットネス）とであつた。」「妾は幾度も非常に明瞭に神の現前を經驗したと感ずる。……大病に惱める小供等の助かるやうにと祈つた折に、子供等を取り去ることを、我が欲するならばどうする」と云ふ聲を聞いた。それから妾は神の力によりて「御意の儘に」と斷言するを得た。其後神は子供等を取り去つたけれど、神は妾をして此重荷に堪へしめたのみでなく、又神が鮮やかにあり〳〵と妾に現はれた。」又他の一婦人が外國で其の夫を看病せる際の經驗を書いて居る。其の夫は急病に罹り、病甚だ危篤であるのに、妾は話相手にする人一人も近くには居らなかつた。「其の苦悶は折々絶え入らん許りであつたけれども、神は吾が身のごく近くにあると思はれ、自分一人とは感せられなかつた。妾は夫を救はんために全力を盡した。併し神は妾の生命（いのち）の力であると云ふことが一番妾には

確實であつて、「なやめる時のいとちかき助なり（詩篇第四十六章一）」と幾度も繰り返した。恰も世界には、唯神と妾とのみのやうに思はれた」と。又他の一人が書いて居る、「妾が一夜、丘上の見知らぬ人の家で唯獨り妾の愛兒を看護して居り、其看護中に、其の生命を取り留めんとしても最早手の盡し方なきを悟つた折の神が妾と倶に在るとの感情は、今に忘れられない。妾は「なんぢ水の中（なかの）を過るときは、我ともにあらん（イザヤ第四十三章二）」と云ふ言葉を殆ど聞くことが出來た。かくて恐しいほどの淋しさと心配と悲みとの中にも、尙不思議なほどの平和の感情と、神が確に當來したとの感情が生じた。」

右の經驗の、稀有と云ふ譯ではないが、一寸著しいものは、突然信仰を變更する場合であつて、之に就ては、リユーバ、スターバック、ヂェイムズ氏等が多數の實例を擧げて居る。數年の間繼續して來た習慣を數分間にして放擲し、啻に事物の評價や、世界觀のみでなく、又た其人の身體の衝動や慾望は全く變更して、自己と認め得ないほどになり、必然的に斯樣な重大なる變化を以て、自己でない力の作用に歸するやうになる。現に東部紐育の市收師の職にある人の解答に、「余が死なん

許りに醉どれて神の前にやつて來た折に、神は悔悟を勸めた。余が神を呼んだところが、神は直に余を救ひ給ふた。余はそれ以來飲みたくもなく習ひもせず、一厘をも盗んだことがない。」

これ程に著しくはないけれど、尙其と同性質のものは左の答者である。彼は常に尊敬すべき道德的生活を送り、屢、其夫人のために敎會にも行つたけれど、まだ宗敎に就いて何等の興味をも有たず、宗敎的經驗とはどう云ふことであるかと云ふことをも知らなかつた。或日其の夫人が日曜學校で子供の級に敎えて呉れと賴んだが、彼は勿論之に應じなかつた。次の日曜日に彼は日曜學校の始業前に郵便局に行つて居たが、突然敎會へ行つて敎えたいとの制へ難い衝動を感じた。彼は其折の樣子をかう云つて居る。「余の腰に繩をくゝり付け、二十人の人が其端をとつて敎會の方へ曳いても、其力はあのときの衝動力には如かない」と。彼は六ヶ月間が程敎授したけれど、少しも特別の宗敎的興味を感じなかつた。處が丁度此六ヶ月目の末頃に、其の夫人は一夜「豫備講演」に行かうと其の夫を誘ふたとき、彼は單に其の妻女を喜ばすために同行し、講演者の言ふた事には毫も

注意しなかつた。然るに彼は其の開會中に今こゝで其の生活に一と變化をなさねばならぬことを感じ、此集會の終らぬ中に起つて其趣意を宣べんければ、其場で死んで仕舞ふだらうと感じ始め、遂に彼は起ち上つて、そを遂げた、そして其折から彼に新經驗が始まつた。それから彼は「われ獨りなるにあらず」といふことを絕えず感じ、且つ自己の力ならぬ力に導かれた。其力がどんなものであつたかは彼は知らない、唯「聖靈」とのみ解釋してゐる。そして其經驗の確なる、彼は何物も彼の信仰を搖かし得やうとは考へ得ないほどである。又其經驗は起伏して生ずるではなく、寧ろ不變である、喜悅と平和の感情に滿ちて居る、併し最も適切に其狀態を云ひ表すものは「われ獨りなるに非ず」と云ふことである。實に此經驗の、一種特別なることが、其の重なる特徵のやうに思はれる。

右の場合には、まだ意識されて居なかつたもの、即ち小意識の範圍にあつたものの感化影響が明に表はれて居る。子供の級に敎授すると云ふ思想、及び之と關聯したる義務の感情は、彼が全く氣にとめて居らなかつたことだけれど、尙一週間が間、小意識方面に於て働いて居り、そして日曜學校に出勤すべき時刻にな

つたことが暗示された時に、既往一週間が間、小意識的範圍にありて知らず識らず温醸され、強められてゐた子供の級と云ふ思想と義務の感情とが制し難い程の勢力を以て彼に迫つて來、どことなく外的勢力を暗示するに至つた。又同じく小意識作用は明に彼の最後の發心に影響を及ぼした。それから又た是等の總ての經驗が彼の信仰に必ず影響を與へたことは明白である。

かやうに擧げて來た多數の記事も稍、明確を缺いて居て、現に研究中の經驗の本性を定むる譯には行かない。常人に於ては、自己を心理學的態度に置き、或は其態度がどうであるかを考へることより困難なるはなく、殆ど總ての人が「神人の同交」を以て誰にでも起る普遍的經驗であるかのやうに思ひ做し、細かな說明を要せぬかのやうに書いて居る。然し余は二三の明確なる記事と、それから寧ろ不明確ではあるけれど、猶所謂「神人の同交」と云ふことはどう云ふ意味であるかを見出す便となるべき數個の記事を擧げた。けれども余は彼の自ら經驗した人々が、皆揃ひも揃つて記述し難い、說明し難いと云ふて居る經驗を茲に取扱つて居るのである。そして聖者テレサのやうに內省に長けて居るものでさへ

此經驗の本性を言葉に言ひ表すことをおもひあきらめねばならなかつたとするならば、吾人も亦余の集めた解答に餘り過分の望を抱いてはいけない。

余の「神人同交の經驗の生理的影響は如何、即ち身心の上に如何なる影響ありや」との質問は、多數の人から等閑に附せられ、偶、之に就いて解答したものもあるけれど、概ね心身上に何等の影響も無いと云ふて居る。勿論斯樣に答へる重もな理由は、內省する能力がないからである。固より少くとも一名だけはあるやうだけれど、左の如き稍、朴素的な言葉でほのめかして居るに過ぎない。「余は斯樣な經驗を言語に云ひ表はさうとすると、其言葉は感覺的の言葉になるが、感覺的であつてはならない。」

左の解答は少くとも生理的狀態が、所謂神人の同交の經驗に及ぼした影響を記載して居る。「余は色々の生理的心理的狀態に於て神を意識した。固より余の身體の狀態が何の點に於ても正常的であつたときが、一番强く神を意識したことは言ふまでもない。余が心持善く感じ、思考が明瞭である折に、一番よく靈的生活を確信する。頭痛若くは他の頑固な苦痛の爲めに、特に心身の虛弱を悟

るか、若くは何かの故で道德上の矛盾に陷つた時には、神を意識することが最も少ない。」尙この他に、二個の明確な解答があるが、こは少くとも此兩人の場合にどう云ふ風に神が觸れ來るかを知る方便となる。「余が神の現前を經驗する際には……生理上進擊的であるが、落ち付いて居り、又た氣は引き立つが、衝動的ではない、胸は張り、呼吸は深いけれど、而も靜かに、活動の道は開かれ、之を成し遂ぐべき力が與へられたやうな心地がする。」「余に生理的影響の始まるや、通常橫隔膜がぶる〳〵震ふて而かも眠れず、さうしてこの橫隔膜は感覺の波を胸部を經て喉頭に送りやり、そこで欠伸となつて出る。次に涙腺が興奮して眼は往々涙に濕ふことがある。すべて是等は生理的感覺は、單にそれ丈では穩かな愉快である、其感覺が去つた後には非常に爽快なるを覺ゆる。」

其の「心的影響」は豫期した通り尙一層一般的に記載してあつた。其記事は感覺的の言葉よりも、寧ろ概念的の言葉で書かれて居ると云ふ方が恐らくは其實を得て居るやうに思はれる。何物かゞ確に目に見えるやうに現はるゝと云ふやうに、神が現前すと云ふ感念が主として此經驗に於て說かれてゐる。「神の現

前を經驗せる余には、神は實在である。余は神と語り、神は余と語る。神は余の伴侶である、吾々の親交が妨げられずば、神は余の思想と身體とを支配する。」「まことに妾は神の現前を實驗したけれど、今は少女の時ほどに活潑とは實驗しない。妾は、少女の折には、他の人々からの待遇が惡くなきときにも、往々氣むづかしくなることがあつた。其折には何時も寢床に連れ行かれたが、恰も神の腕に抱かれたやうな感じがし、「天の父」が妾を慰め給ふのを感ずるために喜んで祈禱を捧げたことを明瞭に記憶する。妾が一人前になつてからは、匡正し、敎へ導き、慰めてくれる何物かゞ妾と倶にあるのを感ずるのみである。」「七歲の小供であつた折、一夜澄み渡つた空に夕星の輝くのを見て、或る感情に滿たされたことを記憶する。そは無限と純潔との强い感情であつて、恐くはこれが、自ら神を知り、神の大意思に協ひたいとの强い願望を生ずるに至つた端緒であつて、其後も度々同種の感情が起り、宇宙のやうに廣大なる、純潔無垢なる神の現前を感じた。そして之が余に與へた影響は唯靜穩とか平和とか云ひ得るのみで、生理的には何等の影響もなかつた。」「神の現前」と云ふことは記述し得らるべきものではな

く、寧ろ單に感せらるゝのみである。神は幸福の感、愛の感のやうに、余にとりては實在である。余は友人のそばに、其顔の表情を全く見ないで座つて居る折に、友人の靈魂と余の靈魂とが交ることによつてその吾が友人たることを屢、知る。この通りに神は余には實在である。余は人が教會で往々神恩を感ずるやうに神の現前を經驗したと感ずる。其經驗は觸知し得られない、而かもさう漠然でも、將た明白でもない。余はそを感じ、余の感情を信ずる。」「余は光や空氣を經驗するやうに神の現前を經驗し、其經驗と余との密接なることは、恰も其經驗は余の眞の、永遠我の一部をなすほどである。神の現前の經驗は、之を言葉に言ひ表はさんは中々に六ヶ敷い。そは丁度愛と生命とを知つて居るやうである。余は神なくては、生活といふことを考へることが出來ない。神は余の生命である。……是等の經驗は余には精神上にも身體上にも、何等の影響するところは無いが、併し心靈上には殆ど常に影響を與へて居る。單に基督と云ふ名だけでも幸福を與へる。住々基督に就いて考へるときに、自他の間に存する障壁を潛りぬけ、一歩にても其傍近く進み寄り……基督のある處にて十全ならんために

死にたいと思ふ。さればとて、こは毫も聖者テレサの云ふやうなエクスタシー(忘我)ではない。聊かにても愛が私慾に打ち勝つ折には、余は平日何時でも、このエクスタシー(忘我)に接近するのである、其折には往々高く天上にあつて神に冥合歸一することを感ずる。そは純然たる休息である、否寧ろ靜かなエクスタシー(忘我)である。そこで余は生きながらへて居て、死に得なかつた。若しこれをしも神秘的であると云ふならば、余は神秘論者である。余も亦然るを知る。常に余の斯樣な狀態になる有樣は以上の如くである。」

前に掲げた或る解答中に述べられたのと同じ神の現前の感であるが、聖者テレサの語法に似た明瞭な言葉で形容してあるのがある。卽ち「神の現前の經驗は丁度外物に觸つて感ずる感覺のやうに明瞭である。併し件の現前の感は言はゝ寧ろ內から來るので、外から來るのではない。且件の神の人格も自己の人格とは明に違つて居り、—自己の一部若くは根柢とも異つて居る。この離れた働を說明すれば、明瞭に發言して、而かも音を發せずに、他の人格が余に話しかけることが出來たと云ふのである。この默語法は、余をして神の新たな顯現を確

信せしむる力がある。

神の現前の經驗はこの他、色々に描かれて居り、其中の或ものは寧ろ明確の點に於ては缺けて居るが、非常に語勢を強めて其性質の熱烈なることを述べて居る。例へば「神は余にとつては爾餘一切のものよりも實在である、—余は度々神の愛に逼く滿たされた。」「實に神は吾が現世の友よりも實在である、神の現前を經驗する折の感情は常よりも深く、靜に、大である。其際には爾餘一切のものが匹敵し得ないほどの休息と恒常とがある。」「我が心の中に神が現前すれば、心身昂揚して爽快である。恰も茶、珈琲を飲んだあとのやうに明瞭である。」

外界の有樣が往々變化する。こは一般に發心若くは愛のやうに情緒が不意に擾亂した場合に起る現象である。「神が余に明に顯現した、噫、草や木さへも美しく見ゆる」と。

歡喜（アロイ）と熱烈（インテンス）に見ゆる愛とは、神の現前の經驗に伴ふ一般特性であつて、かの神の偉大とか威嚴とか云ふ思想は、此折には滅多に起らない。「神は伴侶（ともびと）である、吾が靈魂（ソール）を愛するものである。」—要するに重要なる點は宇宙的方面に關する概念

よりも、寧ろ人格的方面に關する概念である。然し宇宙的方面に關する概念も亦左の場合に於けるやうに、時としては著しい勢力を有つて居る。「假令余は神を以て偉大で善で、居ますゝる所なきこと、及び余が神に接見せんと思ふ折には實際接見し得ると常に信ずるけれど、かやうな狀態に這入るときの眞實相を實感することは、時より有ることは有るが、それも極めて稀である。又た其折の感情は余の言ひ表し得る限りに於ては恐怖と高揚の感情であつて、余が此種類の最も活潑鮮明なる經驗をしたことを想ひ起し得る際には、それを取り除けて欲しいと思ふほどに熱烈で、殆ど壓し潰されん許りであつた。」

更に明晰なる知見と強き道德的意思とが屢、此經驗の影響の中に加へられてゐる。左に掲ぐる二個の解答は、多く他の事柄を說いて居るけれど、又此によく當て嵌まる點がある。「神は余にとつては實在である。余は神が常に余に現前することを感ずる。併し特に明瞭と思はるゝ經驗に出會すのは、唯時偶（ときたま）で、その普通余の發展にとつて危機と思はるゝ時、卽ち或影響があれば、余の生活の針路を一極端から他の極端へ轉ずるを得る時である。斯樣な危機に際しては、正理

の方へ衝き進み行かんとの余の決心をして益、強からしむる力と意志とが增大するのを意識する。余は聲も聞かねば、光も人をも見ない、―唯余を至善の方向へ曳きづり行くのを感ずるのみである、卽ち精神上には勇氣を得、明瞭なる知見と意志の力は加はり、純潔なる思想は愈、純潔となる。生理上には、勇氣の結果として苦痛や心痛やを氣にしないこととなり、若しこのやうにならなかつたら、確に到達することの出來なかつた目的に到達することを得た。是等の危機に臨んでは、かの神の現前の經驗は極めて確實で明瞭である。」

「神は折々余にとつて極めて眞實である。其場合には、神は何人よりも近く且つ眞實と思はれる。他の折にも神は眞實であるけれど多少隔たつて居るやうに思はれる。余はこれまで意識的に神の現前を經驗したと信じた場合が度々あつて、そは早く兒童の頃に始まつて居る。特に非常なる悲しみに沈み、恐怖に陷つた折に多く起つた。然し時には、何等特別の理由もなくして神の現前を感じた、―卽ち或は獨り戸外にあり、或は書を讀み其の美と眞とに感動された折には、神が近くにあり「呼吸よりも、手足よりも近い」と云ふことを感じた。斯樣な經

驗が繼續して居る間は、余は本然の我(ツルーセルフ)に歸つたことを感じ、斯樣な經驗のために人生を一層善意に解するやうに思はれる。そして其經驗には少しも情緒的興奮を伴はず、唯深き平和と悅樂とが伴ふのみである。余は未だ曾て誰にも、此經驗に就いて語つたことは無い、是等の經驗は余にとつては常習と云ふ譯ではない、卽ち非常に度々起るではない。實にかの經驗は余の神に對る信仰に强固なる根柢を與へるのである。」

ここらで、第五章と第七章とに於て、二種の宗教的感情――非正常的興奮と靜穩なる自發的情緒との間に設けた差別に立ち戻る方がよからう。若し此差別を心に留めて、解答者の送つた宗教的感情に關する記述を調べるならば、其の二三を除く外は、第二の卽ち靜穩なる種類に屬することを認むるだらう。成熟した教育ある人々の宗教的經驗は、復活會の興奮とは正反對をなして居る。そは度の差異と云はんよりは、寧ろ種類の差別と云ふべきである。そは前者もそれ相應に熱烈であり、且つ强き確信の感を生ずるの點に於ては、かの宗教的興奮の餘程ひどい種類のものに讓らないからである。そは人々の信仰を一切の論證を

超越したる處に据えて居る。一度そを經驗したものは終生之を忘るゝことは出來ない。少くとも他の新世界を瞥見したやうな感じがする。そは言語の說明し得るころではなく、唯單に實驗さるべきのみである。この事は此事を經驗したと稱する人々が、少くとも殆ど皆斷言するところである。彼等はブラウニング Browning のアブト、フォーグラと共に云ふ——

「神のその耳に囁き給ふものは、たゞ吾等二三のもののみ、
あだし人は論ひ歎び迎へん、—知るものは吾等樂人(うたびと)、」

一解答者が書いて居る「余は他の人々も等しく經驗を有し、其によりて余の經驗をば說明なしで理會することを知つた。吾々は嗜好や、敎育や、氣質の點に於ては、大に異がう所があるけれど、皆等しく或る本能的理會を有つて居るのである。言葉に發し得られず、唯生命によつて學ばるべき靈魂の共通語があるやうに思はれる」と。

本章に述べたところを見ると、こゝに集めた事實が兎に角信ずるに足るとするならば、信仰の基礎としては情緒的經驗が論證やオーソリティに大に優つて

居ることが分る。リユーバ、スターバックの研究も此點に關して同一の結論に歸着して居る。かの所謂「敎會在籍者」のみを專ら考察しても其の五十五人中、三十二人は神秘的のタイプに屬し、五十五人中、唯僅に八人を除く外は神の現前を經驗したと云ふのを見れば、余に解答した人々の宗敎的信仰に於て、情緒的生活が如何に重要であるかが分る。若し集つた解答が實際公正なる標本であるならば(余はさう信ずる)、宗敎社會の大部分にとつては現今に於ける神に對する信仰は論證にも、オーソリティにも基かず、寧ろ吾人が屢に感情團塊と稱へ、且つ吾人の生活及生活の意義と密接に結びついて居る彼の意識の大背景から生ずる各個人の主觀的經驗に基くと云はなければならない。

第九章　宗敎信仰の價値

以上大略種族及び個人に現れたる宗敎的信仰を叙べ終つた。是に於てか當然起り來る問題は、神の價値卽ち宗敎信仰の價値如何、若し神を信じないやうになるならば、そは眞の損害となるだらうか。神は人類にとつて何の役に立つだ

らうかと云ふことである。

宗教的信仰は、普く社會公衆に對して、如何なる價値を有するかと云ふことは、從來屢、詳論されたる問題であるからして、余は此點に關しては更に論辯を重ぬることを欲しない。然し余の提出したる質問に對する諸種の解答は、又た自ら各個人が神の價値をどう考へて居るかを稍、明にして居ると思ふからして、本章に於てはこの神の價値に就いて略述しやうと思ふ。

一

抑、世人は神を如何なるものと考へて居るか、此質問(第二問)は、全體に於て甚だ成功とは云へなかつた。固より余は最初より斯る結果を豫期して居た、そは此質問は爾餘の質問よりも一層解答者の心を、不自然的の狀態に置くべき性質のものであるからである。而も此問題の大體の結果は餘程重要であつて、十分に信ずる價値があると思ふ。卽ち七十四人の解答者の中、七十一人は何等かの形式の下に神を信じ、この七十一人中、僅に三人だけが神の人格的なることを信じ、そして所謂人格的とは一般に知情意を有するものとの義であつて、それから更

に一歩を進めて神を人と同一の形體を有するものと考ふるものは殆ど無かつた。勿論解答の半數以上は、其の語調が、全く世間並の紋切形であつて、毫も自己獨得の思考を凝したものゝやうには見えなかつた。之を要するに答案の大體の結果は、神が何であるかと云ふこと、卽ち神の屬性如何と云ふことは、宗教信者からは餘り重要視せられず、寧ろ神の吾々人間に對する關係はどうであるかと云ふことが、實際重要視せられて居たことである。換言すれば一般世人の關心する點は、神は如何なるものであるかと云ふことよりも、寧ろ神は何をなし得るか、何の役に立つかと云ふことである。質疑解答者の三分の二は、神を「父」とか、「親友」とか、「伴侶」とか、「理想上の盟者」とか見、若くは之に類似したもののやうに見て居るに反し、神を全能と見る價値があるとするものは僅に十二人、造物者と稱するもの九人、三位一體說を信ずるもの三人、「最大なる第一原因」と見て居るものは唯一人だけであつた。固より神は是等の終に記したやうなもの、卽ち全能者であり、造物者であり、三位一體者であり、「最大なる第一原因者」であるかと反問するならば、質疑解答者の十中八九は然りと答へるだらう。併しこゝに注意すべきこ

とは、彼等が神の概念の定義を問はるゝ場合に、是等の屬性は殆ど其の心に浮ばないほどに、彼等の神の概念に於て輕いものであると云ふことである。リユーバ教授が神は理會さるると云ふよりも、寧ろ利用さるゝものであると云ふたことと、卽ち吾人の宗教意識と云ふものは、神は如何なるものであるかと云ふことには餘り頓着せず、却て種々の目的に神を利用せんとするものであると云ふことは、大體に於て正當であると思ふ。

斯樣に神の概念は、或意味に於ては確にプラグマチック卽ち實用主義、實際的需要に基いて居るに相違ないけれど、宗教的意識が神を利用せんと欲するのは、主に普通一般の功利的の目的、例へば保護者「御用達」と云ふやうな、物質的助力を仰がうとするにありと思ふならば、それは誤解である。質疑解答者が並外れた人々であるならばいざ知らぬ、若しさうでない以上は、其の神を求むる主なる理由は物質的必要上よりも、寧ろ社會的必要上より來てをることは明白である。神は他の目的を遂ぐるに當つての手段として求めらるゝよりも、寧ろ神其者が目的として求めらるる。世人は概ね親友を求むるのと同一の理由の下に神を求め、

神と彼等との關係は、其の非常に相愛し相親しみ、互に同情相哀れむ親友との關係に等しく、其關係は明に朴素的であるけれど、全く單純であつて深い意味は無いのである。卽ち質疑解答者の七十三人中、五十三人は神を以て、現在彼等のこの世に於ける親友と同樣に眞實實在すると信じて居る。固より五十三人中には或は全く世間通都の精神で答へたものがあることは確かであるけれど、其は單に一小部分の人に過ぎないことは、爾餘の問題に對する解答の一般調子によつて明瞭である。實に一般の世人が求め、一般の世人が信じて居る神は、非常に眞實在で、同情を寄する親友である。其多くの親友と等しく、神は實に目的、其者、であるばかりでなく、又た他の諸の目的を遂ぐるの手段である。神は誰にでも、其の求むる諸種の物を得さするのである。けれども其等諸種の物は、一般に物質的の助力や恩惠ではない、して今其等諸種の物は、之を分つて主に三種とすることが出來る。卽ち第一、困難に陷つた場合に神が慰藉と助力を與ふること、第二、未來の希望を生せしむること、第三、正義の實行に勇往邁進せしむること等である。

二

宗教信者は信神の價値を如何に考へて居るかと云ふこと、及び神は是等の信者のために、何事をなすかと云ふことは、左の質問の第四に對する二三の解答を引用する方が一番明瞭である。そして其質問はかうである、「若し神無しと確信するに至らば、其場合には人生の實際、例へば人生の幸福、道德或は其他の點に於て何等かの變動あるにや。」この質問を提出した所以は、斯樣に信仰の失くなつた結果はどうであるかと云ふことを知らんが爲めではなく、一何せなれば固より誰れも其結果を知らないし、又た解答者の多くは實際に於ける結果を非常に見積り過ぎることは疑ないから、一寧ろ信神者が其の信仰にどれだけの價値を認めて居るかを知らんが爲めであつた。

さて、右の質問に對し明確なる解答をしたもの五十人の中、信仰がなくなれば、人生の幸福が減少するだらうと答へたもの四十人、道德心を破壞し若くは薄弱ならしむるだらうと答へたもの二十五人、そして其の生涯に何等の變動を生じやうとは思はないと答へたもの僅に六人であつた。余は勿論是等解答者の言

葉其者に特に重を置きはしない。寧ろ解答者の精神と一般調子とに重を置く、そすれば自ら答解が分るのである。今此にその最も標本的なもの二三を擧げやう、「神の存在しないことが證明されても、萬事が意の如くいつてる間は、余の道德にも、暮し方にも、將た幸福の點に於ても何等の變動もないだらうけれども、若し一朝災難が起るとすると、變動があるだらう。」「德行の點に於ては何等の變動も生じないだらう。余は從來幾度も、神を信仰して居ないならば嘸かし不仕合せであらうと思はれた場合があつて、其折には神の助力を求めた。……余が神を求むる時には、神は眞實在であり、さうでない折には眞實在ではない。」以上の場合に於ては、神は單に不慮の事變に陷つた場合にこれから全く外的方法にて救ひ出すものとして必要である、即ち神は手段であつて目的ではない。それから左の場合は思想の點に於て之に比べて稍、深遠であるけれど、其の調子に於ては之と稍、類似して居る。「善は善で、迷妄(イリュジョン)でないと云ふこと、兎に角吾々人間は或目的に到達せんがために努力して居ること、及び進歩と云ふものは或る確實なものであるといふことを考ふることが出來るならば、神を信仰しないやうにな

つても、余の生涯に何等の大變動をも生じやうとは思はれぬ、然し若し吾々が明日にも亡くなり、思想も功績も殘らぬと云ふことに定まつて居るならば、假令神が存在し給ふとも、余は勵まうとも思はない。……吾々は樂しんで吾々が亡くなる其日を待ち得やうか、そは一の疑問である。然し神がないならば、どうして樂んで其の日を待ち得やう。」

右に掲げた場合のやうに、神を單に若くは主として、或る何物かを吾々に保證する方便として求めると云ふとは、眞正の宗教信者の常例と云はうよりは寧ろ例外と云ふべきものである。右の場合よりももつと普通なのは左の場合である。「余の精神的存在に神の必要なるは、猶生命を保存し、健康を維持する爲に、純潔なる空氣の、わが肉體に必要なるが如くである。」「若し神を信じないとすれば、寂寞の感に堪へられないやうになるだらう。」「太陽を世界から取り去るのと同一だらう。」「暗黑と失望に陷るだらう、然し余は我身に神の心證を有するからして、何人も未だ曾て余をして無神論を信ぜしめ得ない。」「若し余が神なしと信ずるやうになるならば、……余が主として、將來に於て望を屬して居た幸福の點

に於ても道德の點に於ても共に、余の生涯に大變動を生ずるだらう。烈しく「食ひ飲み樂んで生き」非常に放縱なる生活に耽るやうになるだらう。」「余は氣が狂ひ、……余なるものなく、何物も無いと考ふるやうになるだらう。」「神は余にとりては生命の生命である。萬物に於て一小物—花のやうな—の生活意義(ヴァイタル、ミーニング)をすら凡て美ならしむるものである。神は余の力の中、隱れたる力である、余の虛弱を支ゆる柱である、—余を解し、そして要めつゝ、責めつゝ、而かも愛しつゝ常に余の傍にあるものである。」「若し神なしと信ずるやうなるならば、人生も亦生存の價値が無くなるだらう。又た總ての觀念も理想も全く變更し、快樂の甘味なく、苦痛を忍ぶ勇氣なく、生涯に何等の目的もないやうになり、死を恐れながら、而も生活てう道化を演じ了るために死を希ふやうになるだらう。」「神の觀念なくては、如何で自若として生死の巷に出入し得やう。如何で他人の見ない事柄にも十分完全でありたいとの念を崩し得やう。如何で生を樂しみ、全力を盡して試めし見るの心を生じ得やう。……之に反し、神と性を共にし、業を共にすると云ふ感情を常に心に抱いて生活することは、それ丈で敎訓的で、遂行力をもつて居

る。此の感情があれば少くとも余丈には色々の不足な事があつても、未來に望を屬し、愉快に暮らすことが出來る。又この爲めに萬の物に威嚴と喜悅とを賦與するのである。」

既に述べたように信仰の心がなくなつたとて、幸福の點に於ても道德の點に於ても、解答者が想像するほどには重大な變動を生じないだらうと云ふことは恐らくは誤なからう。暫くたてば事柄はどうか云ふ風にまた相集りて形成せらるゝだらう。さうではあるけれど、人格を有し、同情ある神の信仰は、道德的生活を送る上に大に助となるに相違ない。蓋し吾々は年長けたる兒童に過ぎない。吾々の、か弱い道德心を支ゆるためには、かの誘惑に陷つた兒童に對して其の母の注意の必要であるやうに、吾々にも、吾々に注意を拂つてくれる理想上の神なる親友の注意が必要である。少しも無上命法（カテゴリカル、イムペラチーヴ）に注意しない多くの人々も、「神の爲めには」必ず諸種の誘惑を撥付（はねつ）けるのである。「こゝに若し神が存在しなければ、吾人は之を發明すべきである」とのヴルテール Voltaire の言葉は誠に意味深重であると思ふ。

宗教信仰によつて得らるゝ幸福と云ふものは、唯神だけが與へることが出來ると考へられて居る物を、與へらるゝと云ふ思想から幾分か生ずるのは勿論である。特に靈魂の不滅と云ふこと、冥界に於て亡友に再會すると云ふ希望は、神の御蔭であると考へられて居る。そこで神の信仰が亡くなれば、多くの宗教信者の最も貴んで居る希望が失くなることになる。加之神は人が危難に陷つた折に、色々の力と助力とを與へて與れるからして、有用である。然し是等のことが總て眞理であると假定しても、猶余は前に下した斷定、即ち宗教意識は神をば無二の親友であり伴侶であると見て居るとの斷定を繰返さんければならない。即ち神を要求するのは社交的要求からである。若し宗教信者が神の信仰を失くするならば、丁度其の親友の死を歎き悲しむやうに、其の神を惜しみ歎くだらう。固より其の親友の死を惜しみ歎くの情に打ち勝つやうに、或る意味に於て、前に信仰して居た神を惜しみ歎くの情に打勝つだらうけれど、世界は之が爲めに益、詰らなくなり、人生も亦生存の價値を減じ、一益、寂寞を感ずるやうになるだらう。一體神の意識は其の最も淺薄で、習俗的な世間並なものでさへ、猶往

々吾人が寂寞孤獨の感に襲はれんとするのを防ぎ止むるのである。余と余の親友との間にはどうしても取り除き難い障壁がある、―彼は余の感情を解し、あるが儘の余の眞相を知ることが出來ない。然るに神は直覺する―神は余と經驗を共にする―と云ふ觀念は、右の如き感情を防ぎ止むることが出來る。そこで神は呼吸よりも密接に、手足よりも接近して居ると信ずるものは、決して見棄てられて仕舞つたとか、心細いとか感ずる譯がない。そは何處に行くとも、其の無二の親友が彼に伴ふと信ずるからである。それから又た宗教意識が神を要求するのは單に愛の目的物卽ちこちらから愛すべきものとしてのみではなく、尙又こちらからの愛に對する返報として、こちらを愛して呉れるものとして要求すると云ふとは注意すべきことである。コー教授は云ふて居る、「スピノーザは嘗て神に對して或種の愛を表したが、そは神からして何等の同情ある報酬を要求しない性質のものである。それでスピノーザの神に對して表した愛は、人間の要求に合はなかつたし、又合ふことの出來ないやうなものであつた。」

信神の他の社交的價値は、神は吾等の動作、吾等の動機に對して絕對的に公平

にして謬のない無上判官たる點に存する。吾等は最後の手段として、自己の正當なることを辯明し、自己の正しく判斷されんことを神に向つて訴へるのである。して又た其所謂辯明は單に表向だけの辯明ではない、世人の手前を繕はんが爲めではない、否世人は擧つて吾等を見誤るとも、猶一人の、吾人の眞の動機を認め、眞に吾人を理會して呉れるものがあると信ずる。世界の何處かで吾等を公平に判斷し、吾等の本當のところを明瞭に認めて呉れるものがあるのを信ずる。一解答者が宗教に就いてかう云ふて居る、「宗教は余の主張がどうかされて居る場合(余の眞實と信ずることが否認さるゝ場合)に神の確認を求め、神の慰籍を希ふものである。」又他の一解答者は、「神は肉眼には見得られないけれど、眞に實在して居り、よく物事を理會するものである」と云ふて居る。かのイスラエルの善人ヨブが非常なる難儀に陷つた折の唯一の慰籍は、その靈魂の不滅に對する希望ではなく、寧ろ世人は自己をどう考へて居らうとも、それには關係せず、無上の判官があつて自己の正廉忠直を認めて呉れると云ふ深い確信であつた。「余に關しては、余の正しきを證するものゝあるを信ずる。」ヂェイムズ教授は其の

「心理學原理」中に「社會的自我」を論じて曰ふ、「斯樣に吾等が要求する理想的社會的自我は……極めて遠く隔たつて居るかも知れない、單に可能的であると云ふべきかも知れない、吾等の生存中に其の實現を見得ないかも知れない、又知己を後世に待つとしても、その吾人を知つたならば、必ず吾等を贊稱するだらうが、吾等が既に死に失せて居ないために、或は吾等に就いて何事も知らぬと云ふことになるかも知れない。而かも之を追求せざるを得ないやうに吾人を勸むるものは、理想的社會的自我である、可能的なる最高無上の判官としての伴侶(若し斯樣な伴侶ありとするならば)から少くとも嘉納的承認を受くるに値する自我である。この自我は眞正、最親、究竟的、永久的の自我である。この判官は、絶對的心意、大伴侶、即ち神である。……社會的自我の進步とは、我の審判官として下級判官に代ゆるに上級判官を以てするの謂であり、そして最高等なる判官は、この理想的判官である。どんな人でも、其程度に於てこそ差異あれ、絶えず若くは偶に、多少其の胸憶中、此の理想的判官に接しないものはない。如何ほど卑賤な流浪者と雖も、この高等判官の承認によりて眞實在と感じ、正當と感じて自ら慰籍する

所があるだらう。この慰籍があればこそ、吾等はこの社會的生活に於て失敗するとも、尙此世界に止住するを得るのである。若し斯樣な心の中に賴りとすべきものがないとせんか、一度吾等が失敗したらば、此世界は恐怖の深淵となるだらう。」

三

次に又祈禱の研究によつて、宗教意識が如何に信神の價値を考へて居るかと云ふことを一層明瞭にすることが出來る。蓋しサバティエ Sabatier が曾て云ふたやうに「祈禱は實行上に現はれたる宗教である、一換言せば祈禱は眞正の宗教である。宗教的現象と之れに類似し、若くは之れに接近せる現象、例へば道德的情操とか美的感情とかと區別するものは、正にこの祈禱の有無による」からである。

これ余が質問の第六を次の通りに發した所以である。「神に對して祈禱せらるゝや如何、若し祈禱せらるゝとせば、其の理由如何、そは單に自己の習慣、及び社會的慣習と云ふに止まるにや、或は又た祈禱を捧げる際に神が眞に其祈禱の聲

を聞くと信ぜらるゝや如何、祈禱は單に我れより神に對して捧げるのみである
や、或は神からも何ものか與へらるゝやうな感じがあるや如何、卽ち祈禱により
て何物か―例へば力とか神の靈とか―が自己の内に降り來るとの感應ありや、
祈禱によつて神人の同交が實現せらるるや如何。」

此質問に對する解答によれば、祈禱は其起源を、殆ど總ての場合に於て、兒童の
折、父母師長に敎え込まれた習慣から發して居るけれど、そが今日まで永く持續
さるゝのは、主として―殆ど全く―他の理由に基いて居る。右の質疑に對する
七十二人の解答者の中、六十八人は皆神に祈禱を捧げ、唯其中の十三人だけが幾
らか習慣が關係して居ると云ふ。併し、猶其中一二の人を除けば他は總て習慣
を其祈禱に於ては第二次的要素としてをる。余は是等の言葉其者には餘り重
を置かないことは今改めて言ふまでもなく、唯解答者が此點に關し、習慣にどれ
だけ重を置いてをるかを概示すれば、それで足るのである。左の解答は多くの
宗敎信者の祈禱に於て、習慣がどれ位の勢力を占めて居るか、其の眞の地位を示
して居るやうである。「祈禱は確に年少の頃からの訓練の結果、著しく習慣とな

つた。斯樣に訓練とは云ふものゝ、そは單に余が祈禱を始めた起源端緒に外な
らない。何せなれば余が敎え込まれ、躾けられたる他の事柄は其必要がなくな
れば之を放棄して仕舞ふけれど、祈禱をなす習慣は年を經るに從ひ益々强くな
るからである。」

何故に祈禱を捧ぐるかと云ふことの眞理由は、右と同一人の解答によく表は
れ居る、「祈禱せずには居られないから祈禱するのであつて、そは殆ど本能とも云
ふべきである。假令今迄の訓練を受けたとした所が、余は今になつては考へずに居ることは出來るけれど、祈禱せずには居られない。」又他の一
解答に曰ふ、「余が祈禱する所以は、特に喜ばしく感ぜらるゝ折には神に感謝の意
を表せんければならないからである。」更にヂェイムズ敎授の言葉を引用せんに
「現今のやうな科學的解釋の盛なる時期に於て、祈禱の効驗如何に就いて種々の
議論がある。一方に何故に祈禱してはならないかの理由を多く擧ぐる論者が
あるし、又他方には何故に祈禱せねばならぬかの理由を擧ぐる論者がある。そ
れにも係らず、何故に現に祈禱をするかの理由に就いては殆ど之を言ふものな

く、單に祈禱せずには居られないから祈禱すると云ふに過ぎない。如何に科學が力を盡して、その反對を唱へても、人類の精神の性質が、今吾人の知るところでは、考へることの出來ない樣な風に變ることでもない中は、吾々は未來永劫に亘つて祈禱を持續するだらうと思はれる。一體人類の有する經驗的自我中にて、最も深奥なものは、社會的種類の自我であるけれど、この自我の共に交るべき唯一眞正の大伴侶は、たゞ理想的世界にありと云ふ事實からして生ずる必然的結果が卽ち祈禱の衝動である。」

質疑解答者の大部分が送つた解答は、「祈禱を捧ぐれば神は實際その祈禱を聞く」と云ふことに一致して居る。殆ど總ての人は祈禱には兩面的卽ち自動的方面と受動的方面とあることを確信し、單に我れから祈禱の聲を發すると云ふに止まらないで、祈禱によつて神から何物かが與へらるゝやうな感じがあると主張して居る。又二三の人々は其の欲する或一定の事物を得るために、祈禱をして神を利用する。或一婦人は祈禱を捧げた直接の應報として其の亡兒を甦らした。又他の一婦人が車窓より其の眼鏡を落した折に、神は之を見出し、車掌の

手を經てそを返した。

併の右のやうな場合は甚だ稀にあることで、一般の人々は其の小供や眼鏡を發見するためにまで神を利用はしない。神が兎に角プラグマチカルに實際的急需に應ずる施與者と見らるゝ限りでは、神の與ふるものは、力であり、洞見であり、慰藉である。是等が祈禱によつて得らるゝと云ふことは、理論上では全く懷疑的態度を取れる人々からも、猶承認されたる經驗的事實である。余の親友なる一科學者は、殆ど其の從來の宗教的信仰を失つたにも係らず、屢、祈禱を捧げ、且つ余に告げて曰ふ「今でさへ祈禱によつて慰安を得、萬事が一層都合よく運ぶ。恐らくは祈禱は余の萬事に對する態度に變化を生ずるだらう。」又た他の一科學者が云ふて居る「余は主に、習慣に支配せられて祈禱をやつて居る。それにも係らず、困難に遭遇した場合には全力を盡して奮鬪し、其の成否の責任を神に委ねて多大の慰安を感ずる。」又た左記の解答は余の親友の懷疑に陷り、殆ど祈禱を捧げることのないものから來たものである。「余は余が神と稱へて居るものは、終始一貫して、あらゆるものゝ唯一の本體であると考ふることは、一寸六ヶ敷

い。然し余に對して何かの作用を與へたと偶には思ふことがある。そは余が通例奮闘を中止し、助力に頼つた時に起るのである。例へば近頃連累になつて名譽を傷けられさうになつた吟味を受けに行くに先ちて「小羊のやうに」祈禱し、そして直に感應あるやうな心地がした。其の肉體的効果としては、直に余の神經を沈靜ならしめ、精神的効果として余に勇氣を與へた。」又た他の一友の解答に曰ふて居る、「余の捧ぐる祈禱を神がどれ程知るか余には分らない。併し余は大に恩寵を受くると確信する」と。更に他の一解答者がいふ、「余が祈禱を捧ぐるのは、神の法則たる彼の自然法に從ふべき力を得んがためである。……神の助力を求めんがために祈禱をしても、神から助力がないかも知れないけれども、尚そは自己に力の足らないことを忘れないからして力が生じてくる。」「余の祈禱する所以は、祈禱によつて、余の道德的生活が向上すると感ずるからである。即ち消極的には、余が正道を逸せぬやうに誘惑を斥け、積極的には善良なる行をなすべき力が生ずと感ずる。余が祈禱を中心から喜んでやる、やらぬと云ふ念の多少は、余の全活動を測定する一種の計量器である。余が祈禱しなかつたり、祈

禱し得なかつたりするならば、隨分墮落することと思ふ。」

余は宗教上の疑惑でさへも祈禱の効驗を減殺し得ないことを示さんがために、以上の事實を細々と引證した。右の人々が思索を廻らして居る際に神を如何なるものと考へやうとも、又その經驗をどう説明しやうとも、彼等は其一朝事あるに際しては、丁度其他の人々が神を利用するやうに、其の神を利用して、神に助を求め、神に祈つて少くとも精神上の實際的恩惠を享受することを確信して居るからである。若し右のやうに疑惑を抱ける人々であつて、尚實際助力を受くるとするならば、何等疑惑によつて、攪き亂さるゝことのない確固たる信念を抱ける人々は、更に一層強き理由によつて神の助力を受くべき譯である。一婦人の解答に曰ふ、「祈禱により神から與へらるゝ助力は、非常に實際的の助力である。妾は全く教師としての任務に當り若くは危險を犯すには力足らず、唯知識と力とが與へらるゝと云ふ希望のみを頼りとして幾度も教壇に上つたことがある。かやうな場合には妾は最善の力を居して十分好結果を奏した。」又た他の一婦人の答書に曰ふ、「貴問に係る他の事項に就いてよりも、此の事項に就いて

は妾ば妾自らの心證を述ぶる。重大な事件のために困つて居る場合には、祈禱を捧げた結果、妾の判斷が精錬され、妾の決斷が自ら生ずること、丁度思慮周密なる親友との協議によつて影響されたと思ふ場合と同じ有樣である。……妾は今に尙、自ら決斷するやうに打ち任せらるると感ずる、けれども亦同時に妾の精神が全心の力を以て働いて居ると感ずる。……妾は祈禱は、泰然として重荷に堪へしめ、心配と悲歎とあるに係らず、日々の仕事を熱心に成さしむると信ずる。祈禱は、精神に一新境を開かしめ、屑々たることや憤怒を超脫せしめ、他人に對して愛情を濃かならしめ、私慾に打ち克たしむる。是等のことは哲學の研究も、推論作用も毫も生じ得ないところのものであると思ふ。」

併し之を要する宗教意識が祈禱を重んずる所以は、神が返報として恩惠を與へると信ぜらるゝためではなく、寧ろ祈禱によつて神と直接に社交的關係を結ぶに至ると確信するからである。イリングワース博士は「基督教徒の特性」と題する近著に於て、祈禱に就いて述べて曰ふ、「祈禱を人事上のことに比較し見るに、そは物の哀求にあらず、寧ろ友人との親交と見るべきである。元來人類はかやうな親交其者を目的として求めて居る。そは蓋し吾が親友は吾が親友であり、そして其の親友とうちとけ語らうと云ふ事實が、即ち吾々の親交を表彰し充足せしむるからである、」と。かの質疑解答者の過半數は、祈禱は彼等にとつては眞に神人の感應同交であると述べて居る。固より彼等の總てが、其の斯樣に感應し同交する力を、全く擬人的に寫象し、吾々人類と同一に見て居ると云ふ譯にはゆかない。そは或祈禱はいと大なる生命、力の源泉(これ以上には定義を下し難い)に道を開くからである。併し詮りはこの大生命も吾々自らの生命と等しく、人の之に對する關係上、全く社交的に考へなければならない。祈禱によりて神を呼び神を求むるのは、施與者としてではなく、寧ろ伴侶としてである。一解答者が曰ふて居る、「余が祈禱する所以は、人間との交通によつて得らるゝよりも、もつと高尙なる交通感應を得んがためである。」「祈禱の精神生活に於けるは、丁度呼吸の肉體の生活に於けるが如くである。」「余の祈禱する所以は、余が祈禱することを欲し、祈禱することを好み、神がその祈禱を解し給ふと感じ、余が神の同情を好むからである。」「祈禱は自然であつて、單に我から神に對して捧げるもののみで

はない。余は、余とかの肉眼に見えはしないけれど、必ず存在すると感ぜらるる實在との間に、其の何であるかは分らないけれども、何物かの感應同交があると感ずる。」「余は祈禱する—さればとてお定りの祈禱の文句でではなく—否な寧ろ時と所を選ばず、何時でも、何處ででも多少神に振り向く、そして眞の神人の感應同交が屢、疲勞したる神經や、猥雜なる感情や、罪惡によつて妨げられ若くは鈍ぶらされたことを感じたけれど、尙折々右の神人の感應同交を經驗した。且つ又全く感應とか同交とまでは行かなくとも、猶うけ答へのあつたやうな非常に朧ろな感じ、—充分把捉することは出來ないけれども、感ずることは出來る或何物かを絶えず經驗した。」

之を要するに余が信神の價値を目的として發したる種々の質問結果は、すべて一點に歸着すると思ふ。卽ち神の信仰は事物の說明として、或は理會を助くるものとして、卽ち知識上からして要求さるるのでない、寧ろ實際的生活、情緒的生活上直接に助力を與へるものと云ふやうに、專ら實際上からして要求さるゝのである。神は理會さるゝよりも寧ろ利用さるゝと云ふ方が眞である、然し又

同時に、信心深い人々からして憧憬され、哀求さるゝものは、神の恩寵と云はんより、寧ろ神其者であるのである。リユーバ教授のやうに、宗教信者は、神は誰であるか、神は何であるか、否一體神が存在するかどうかと云ふことには餘り心を勞しない」と想ふならばそは全く誤謬である。此事は質疑解答の調子によつて十分明白である。固より彼等は神の形而上學的屬性には殆ど注意しないけれど、神が實在であること、人類に對する神の社會的人格的關係に就いては極めて熱心に注意する。リユーバ教授が曰ふ、畢竟するに宗教の目的は「神にあらず、寧ろ生命である、より以上の生命である、更に大なる、豐富なる、更に滿足を與へる生命である」と。若し神と云ふことを、かのスコラ哲學者から唱導され、在來の古き神學によつて維持されたる抽象的屬性の集合と云ふ意味に解するならば、リユーバ教授の言或は眞であらう。然し之を他の意味に解せんか、リユーバ教授の言は全然誤謬である。「より大なる、より豐富なる生命」は、實に宗教の目的だらうが、宗教は此大なる生命を至るところ、其の神と解して居るものと同一物と見て居るのである。宗教意識は、此大生命が自己に接近し、自己を取捲いて居ること、人類

はこの限りなき源泉からして、自己の必要に應じて、新たな力を吸み出し得ることを自己の經驗によつて確信する。宗教意識は、此大生命が自己の生命と其の根柢に於ては全然異つて居ないことを認識し、そしてその大生命を神と稱するのである。宗教意識はこの神をば、神は何であるかと云ふことに於て要求して居る。決して「御用達」として要求しては居ない、寧ろ「大なる、豐富なる滿足を與ふる生命」として要求して居る。そして小なる自己の生命が其と感應同交し得ることを、自己の生活經驗によつて確信するのである。

第十章　結論

卷首二章の研究が終えてからは、所論は專ら種族と個人とに現はれたる宗教信仰の歷史的方面の巨細なる研究に馳せ、其の結果往々讀者をして其の大綱を攫み、要點を捕へ得ざらしめたかも知れない。併し苟くも問題を皮相的ならぬやうに論ぜんとするには、事實に就いて幾分か詳細なる研究をする必要がある。然るに今や注意を是等細目枝葉の爲めに煩さるゝことなく、眼を全局に注ぎ、以

上論究し來つた所を總括して結論に入るべき時期に達した。

一

右述ぶるやうな回顧的總合的研究をする目的は、既に述べたる三種の宗教的信仰の相互關係と輕重とを決定せんとするにあるのである。先づ朴素的信仰の宗教は幼稚な種族、幼稚な個人—人心の自然的生得的反應作用に依つて彼の直接目に映じたもの、教えられたことを、映じた教えられたと云ふて、其儘に信ずると云ふ朴素的な單純な人々の間に信ぜられて居る。次に疑惑の可能卽ち疑惑を挾み得ると云ふことが既に認められてから後でさへも、猶宗教的信仰は、論證された信仰、經驗に基く信仰と云ふ意味のオーソリティでは、なく、寧ろ人類の自然的朴素的信仰と云ふ意味のオーソリティの上に立つて居る。斯樣に他人の出來合いの神學を少しも批判に訴へないで採用すると云ふことは、永らくの間適當な唯一のやり方と殆ど一般に考へられた。右の傾向は廣く人心に傳播して居り、到底之を抑ゆることが出來ないほどであつた。

けれども、現今の事態は最早さうでない。オーソリティの上に立つ信仰は、今

日は決して行はれて居ない。此事は單に宗教上のことのみに限らぬ。全思想界に通じて、傳說の上に立つオーソリティを批判を下さないで承認すると云ふことには、一般に反對されて居る。一般科學と哲學と就いては姑く措いて論せず、夥多の事例中より單に其の一例を擧げんに、吾々米國民が祖先より繼承した る政治的觀念の現狀に批評的傾向の現はれて居ることは明白である。例へば五十年前に於てはかの獨立の宣言書のインスパイアされた調子を、とやかく云ふなどとは何人も夢想するものがなかつた。然るに今日の政治的高等批評家は、この宣言書を以て一點の謬りもなき完全なるインスピレーションとする主張をば遠慮なく攻擊し、又た往々之を嘲笑さへもする。加之、又た「モンロー主義」の得策たることも屢、否認さるるやうになり、そして、「獨立戰爭」は心得違いではなかつたかどうか、國民的獨立には何等かの眞正なる價値があるか、どうかと云ふことが眞面目に討議さるゝのを聞かんために、何人も遠く足を運ぶ必要はない。是等の新研究は何等の新資料にも、將た現代に於て發達したる新推理力にも基かない、寧ろ時代の心理學的風潮に基くのである。吾人が敎えられたこと、吾人

の祖先が信じたことを批判を下さないで其儘信仰し、承認すると云ふことは、最早何等の價値も無いのである。固よりかう云へばとて、今日を以て疑惑と懷疑の時代となすのではなく、寧ろ自由討究、獨立思考の時代となすのである。現代は專門家をオーソリティとして多くの事柄を採用するけれど、傳說のオーソリティを基礎としたり、若くは然るべき理由なくしては何事をも採用しないのである。

宗教上に於ても亦さうである。論證された信仰と云ふ意味のオーソリティを基礎とせる信仰は、猶現今に於ても重要であり、且つ永久重要に違いない。併し朴素的信仰の意味のオーソリティの上に打ち立てられた信仰は年々日々非常なる勢を以て衰滅に傾きつゝあるのである。純正統派（オルソドックス）の多數の人々と雖も、彼等が從來信じて居つたと思ふた事を今は實際信じないと云ふ事實、及び其の單に早くから敎え込まれたからと云ふ理由で以て、今日まで信じて居た多くの在來の古き敎義（ドグマ）が速に全然死滅するに違いないとの事實を悟り始めて居る。

余の知友であつてプレスビティリアン派の長老が數年前に「余が自分で眞と信ず

るものを信せねばならぬ時代が到來しつゝあることを明に認め得る」と云つたが、この言葉は實に如上の人々の態度を表白したものであると思ふ。

かやうに宗教上に新に獨立の精神が起りかけて居ることは、世界中至るところの勞働社會が教會に對して冷淡な態度、若くは往々反對の態度さへも取らうとして居ることでも分る。朴素的信仰の宗教が往時非常に多くの信者を得たのは、主にこの勞働社會からであつたのに、今や彼等が斯樣に朴素的信仰の宗教に對して叛逆的態度(他に適當の言葉がないから)に出づるやうになつたことは、這種朴素的信仰の宗教にとつては實に重大なる打擊であつて、吾人にとつては實に看過すべからざる重要な事實である。若し朴素的信仰の宗教が、無學者無識者を支配し得ないとすれば、そは世界の宗教的生活に於ては第二位の要素に下らんければならない。固より朴素的信仰の宗教の信者の中には、宗教的感化を受けつつ育つた一切の兒童をも常に包含しやうけれど、是等の兒童が成長して獨立の思考を廻らすべき成人の年齢に達する時には、是等の(前に兒童であつた)大多數の信者を失ふこととなるだらう。固より朴素的信仰の宗教が吾々人

類の生活に從屬的な下等な役目をも、少しも演じない時期が到來すると云ふことは實際ありさうにも思はれないけれども、歲月の推移するに從つて、從屬的な下等な役目が益、從屬的となり、下等となり、そして本書に論じた他の種類の宗教的信仰と列を同うすることが出來ないやうになるだらう。從來の舊世界は今や成長して遂に其幼年期を經過した、從つて小供らしい事物は之を逐ひ斥けなくてはならない。それ故に、吾人はこの朴素的信仰に就いては深く研究する要なく、直に理智の宗教と感情の宗教とに就いて最終の攷察と評價とを試みやう。

二

余は以上章を重ねて論究し來つた所の全體に亘つて、心意の知的要素と感情的要素とが、宗教信仰上重要なること、並びに余の見解によれば、以上の兩要素中、感情的要素の方が余程根本的のものであると云ふことの歷史的心理的の理由を示さうとした。さればとて、宗教上理智に何等の價値を認めないものと解すべきではない。理智なくては、所謂神てうものに對する一切の信仰は漠然として論及し難く、ましてそを他人に傳達し宣布することは尙更出來ない、從つてそ

は遂に何等の社會的價値をも有しないやうになるだらう。此に於てか此處彼處に散在する神秘説がないならば、信仰は未來永劫消滅に歸して仕舞ふだらう。それ故信仰は永く其の生命を保ち存在を維持するためには、明瞭に發表されんければならない。之が爲めには、理智は宗教上極めて大切である。

次にオーソリティガ非常に重要なること、非常に價値あることは、決して看逃してはならぬ。そして玆に所謂オーソリティは、論證の一種であつて、知的の意味のオーソリティである。斯樣な理智の意味のオーソリティは青年期の生活全體に亘つて、信仰を持續して行く上に確に—且十分正しく—大勢力を有つに違ひない。バルフォーア Balfour が其著「信仰の基礎」中に述べた通り、吾人の信仰は多くオーソリティの上に立つて居る。そしてこのオーソリティが他の信念に對して勢力を有し、影響を及ぼすやうに、宗教的信仰に對しても亦勢力を有し、影響を及ぼすべきは當然である。然し聖書及教會信條の批評的研究の傳播するに從つて宗教上のオーソリティは絶對的、獨裁的性質を失うべく、聖書が第一の意味に於けるオーソリティ、—絶對的に無謬正確なるオーソリティとして信奉せら

るゝの時期は決して再來しないだらう。即ち最早何等絶對的オーソリティなるものは存在しないやうになるのである。之に反して聖書が第二の意味に於けるオーソリティ、最も有力なるオーソリティたり得ない時期も亦た決してなからう。聖書の記者、及び聖書中にある宗教的偉人の洞觀は深邃にして、今に至るまでオーソリティの地位を失つたことなく、其の言ふ所は靈的光明に滿ち、其の源泉も亦深く人生の深奥に根ざして居るからして、人生は幾度か交代し變遷するとも其の無勢力となることはないだらう。聖書は實に宗教的人道的の書であるから、その人心を支配する勢力は、人類が眞に宗教的であり、人道的である間は決して失くならないだらう。然し宗教上の事に關するオーソリティは最早聖書とか其他何等かの書籍とか、教會とか、明白な信條とかに限らなくなり、寧ろ實際聖書中にあるものと、聖書以外にあるものとを問はず、兎に角深遠にして有力なる心靈的生活を經た大人物の經驗を基礎としたる論證となりつゝあるのである。加之右のやうなオーソリティを基礎とせる論證は、其勢力を畢竟するに感情的經驗より得來ると云ふことは、序でに注意して置くべきことである。

又宗教は他の理由、卽ち純粹に知的であるものゝ攻擊を防ぐために常に理智の助を要するのである。蓋し世には一種の反宗教的信仰があつて、こは特に一般民衆の想像に強く根ざして居り、且つ批判的思想とよく相黨し相合することが出來る、其の適例は勿論唯物論であつて、唯物論の攻擊を防禦するためには理智は宗教のために非常に重大なる任務を盡した。卽ち理智が唯物論の宗教に對する論難を駁擊したが爲めに、唯物論は最早完全に宇宙を說明し、宇宙を解釋すると云ふ重大な企を拋棄するに至つた。唯ヘッケル Haeckel がゐて獨り唯物論を唱へてをるが、其の勇氣は丁度かの乘組員は悉く逃げ去つて仕舞つて、自己獨り燃え立つ甲板上に立ち止まつた靑年の勇氣に類すと云ふべきである。

然し宗教が理智の助を要するのは、啻に外敵に備へ、之を防がんが爲めのみではない。又其の特に陷り易い自己固有の病疾、及び夙に無意味となり不用となつた彼の傳說的信條の惡影響を防がんければならないからである。世人は曰ふ、宗教は今日危機に頻して居ると。余も亦その事の眞實なるを信ずるばかりでなく、誰でも深く宗教史の研究を進むるならば、益〻明瞭に宗教が危機に頻して

居ることの事實を見て驚くだらう。一體人類の進步と云ふことは、宗教にとつては一大危險であつて、古來未だ曾て人類の進步を來した時代であつて、宗教にとつて危險でなかつたためしがない。そして、この事實の依つて生ずる原因を愼重に攷察するときは、人類の思想が健全なる發展を持續する間は、常に斯樣な現象を呈するのである。そは蓋し思想の發展は必然的に之に應じて宗教的觀念若くは宗教的想像の進步發展を促がすからである。して新時代の新思想に順應し、知識の發展に伴隨し得ない宗教、卽ち飽くまで傳說的信條に拘泥して毫も活氣なく、且つ死せる過去に永久囚はるる宗教は必ず死滅するに相違ない。例へばかの印度波羅門の形式的宗教、羅馬人の形式的信仰の如き、又希臘人の美的宗教の如き、皆斯樣な運命に陷つたのである。固より希臘の宗教は虛禮に拘み、教權的信條に囚はるることが餘程少かつたけれど其の本性上、根本的に希臘思想の發展と幷び進むことが出來なかつたのである。卽ち希臘の宗教は、深さと實質とを缺いて居り、全然根柢から變化しなくては、發展して後代の希臘人の心靈的要求、知的要求を滿足せしめ得る宗教となることが出來なかつたのである。

百三十六頁から百四十三頁までの間に記載したやうに、アモスの手によつてイスラエルの宗教が改造されたのも亦他の一例と云ふべく、希伯來人のヤーエーに對する概念が擴張され、そして希伯來人の新たな狀態に順應しなかつたならば、ヤーエーに對する信念は、地の表面(おもて)、人類の記憶より消え失せただらうし、ヤーエーは今日に於てはモアブ人種のケモシュ(Chemosh國民神)と同樣な運命に陷ることを免れなかつただらう。此事は實に一切の信仰に就いても亦言へることである。理智の働によつて思考を廻らす人類の間にあつては、宗教は必ず常に危機に臨んで居る。何ぜなれば進歩發展と云ふことは理智の生命であつて、危機と云ふことは宗教が生命を維持し行く上に必要缺くべからざるものであるからである。宗教は絶えず古き外皮を撤去し、更に新たな外皮を作つて居なければならない。外皮も固より重要であるけれど、其の生命と外皮とを同一視する宗教や、或は外皮が既に宗教の擁護者たることを止め、却て宗教の生命の成長發展を妨ぐるやうになつた場合にも、猶件の外皮を脱き棄て得ない宗教は誠に哀むべきである。若し基督教が基督教其者とトレミー Ptolemy の地球不動説とを同

一視したらんには、基督教は夙に死滅を免れることが出來なかつただらう。何ぜなればガリレオ Galileo が變説を迫られた際に、彼が小聲で私語いたと稱せられて居る通り、「地球は矢張動く」からである。誠に地球は矢張動き、人類の思想も亦さうである。然るに若し基督教が今日基督教其者と彼の聖書無謬説とを同一視し、若くは創世記に説かれてをる世界創造説とか、基督論(クリストロジ)の諸宗義(ドグマス)とかと同一視するならば、基督教は自ら衰頽を招くに至るだらう。基督教は科學と高等批評との結論は、總て之を受け納れるほどに寛容であり、度量がなければならない。又泰然として、全き眞理、全き將來に對向するほどに勇氣がなくてはならない。之を要するに宗教の生命其者は、其時代にとつて至要なるものと、至要ならぬものとして棄てゝもかまはないものとを識別し得るかどうかと云ふこと、及び其時代の進歩して已まない思想や知識に自ら順應し適合し得るかどうかと云ふことによつて定まるものである。そして宗教がこの事を成し遂ぐるには勿論理智の助を仰がんければならない。斯樣に人類の知識と反省作用との發達に伴ふて、宗教的觀念を作り、之を改造するに當つては、理智は宗教の爲めに極

めて有益なる働をなすのである。

固より少數の哲學者だけは、理智だけで十分に滿足な信仰を得、又恐らくは絶對的眞理に到達し得やう。余は敢て觀念論の確實性に就いて兎や角云ふではないが、一體觀念論を唱ふるものは、其數が餘り多くないばかりでなく、又同じく觀念論者であつても、其の多くは觀念論とは何ぞやと云ふことに就いては相互に意見の一致を缺いて居り、又彼等は概ね其の哲學的信條は、論理的必然の結果であるとなすと同時に、又觀念論的世界觀の審美的方面若くは神秘的方面に基くとなして居るのは確かな事實である。さればとて余は若干の哲學者は推論だけに依つて絶對的眞理に到達したかも知れないことを否定はしない。又其學徒の少ないと云ふことは、勿論彼等の說の謬れるの證據ともならない。眞理か誤謬かの問題を決定するに當り、頭數の多寡に依らうとするは不當である。

然し宗教の爲に堅固な基礎を求むるに當ては、頭數の多寡を算へると云ふことは敢て不當でない。どのやうに巧妙なる論證法にても、僅か二十人許の非常に卓越せる哲學者だけに稱讃され承認され得るやうなものでは、決して一般人類

の信仰の基礎とはなり得ない。又一般民衆的で容易に理會され得る論證法が援へさるゝ場合には(第六章に示したやうに)、理智は宗教的信仰の源泉となり基礎となり得ないやうになるのである。

勿論是に對して恐らくは、「人類」は「哲學」を仕込まれ得やうとの辯解があるかも知れない。然し一體「哲學」とは何であるか、ヘーゲルの謂であるか、將たヒューム、トーマス、アクイナス Thomas Aquinas 謂であるか又はトーマス、ハクスリ Thomas Huxley の謂であるか、試にどれか完備し居る公平なる哲學史、例へばキンデルバンドの哲學史を讀んで見よ。讀み了つた後、其得る印象は果してどうであらうか。實に哲學は大發展をなし、昔時の淺薄にして朴素的な觀念は今や愈、合理的となり、眞に斬新な創始的な概念が提唱され、古代の哲學者等が唱へ出した思想は論理的決論に達し、彼等の假定したことは發見せられ明示された。吾人は吾が祖先ほどに朴素的ではない、又た祖先よりも心意の本性、心意の問題に就いて餘程明瞭なる知識を有つて居る。之を要するに哲學に於ても、爾餘一切の事柄に於けるやうに、大なる進歩のあつたことは爭はれない事實である。併しそが

確實なる結果はどうである、問題は確に解決されたかどうか、面倒であつた問題は永久鎖まりがついたかどうかと云ふことになると、誰れでも幾分悲觀せざるを得ない。かの「哲學」が誇りとして居る著名なる哲學者の人名簿の裏大なるは、しつかり論證され、廣く承認されたる哲學上の眞理のさらでだに少い高をば、極度にまで少く思はせる。どれほど吾人は確定したる決論に接近し、どれ丈け希臘人よりも確固にして十分滿足なる決論に達しつゝあるか、蓋思ひ半ばに過ぎるだらう。懷疑的傾向は詭辯學者の時代の通りに強い。たゞ其の度合の增さないだけである。有神論も無神論も、其の論點を夫々他の一方の人々を滿足せしむるやうには證明し得ないのである。觀念論も實在論も猶其の爭點を論じつゞけて居る。吾人は實在の何たるやを知らないこと、從來と異なるところは無い。形而上學は何を確定したか、そは特に代表するものがあるか、若し或人が基督敎に改宗したと告ぐることがあるならば、余は大體さう云ふ人の趣意を領會するけれど、若し哲學に改宗したと告ぐる人があつても、一體さう云ふ人は何事を言つてるだらうか領會に困しむのである。

三

理智を以て宗敎の十分なる基礎となし得ると云ふ說に關する議論はこれだけに止め、これから感情、推論によらない本能的要求、及び直覺の方面に就いて論じやう。思ふに宗敎は其の立場をここに据えて以て戰はなければならない、この方面から其の須要の糧食を得なければならない。さもなければ必ず餓死し征服せらるるに相違ない。然らばこの方面はこの要求に應ずるを得るだらうかどうだらか。

既に第八章第九章に於て、今日の宗敎を信ずるものは、概ね感情的生活の經驗を以て、信仰の眞正の基礎として居ることを示した。併し如何にしてこの事が可能であるか。人或は問ふだらう、「抑、信仰といふことは究竟するに、知的承認ではないか、果してさうであるならば感情なるものは、恐らくは論證をなすに當つての與件としての外は全く無關係ではないか」と。

此の疑問に對しては、既に第二章に於て其の解答を與へて置いた。若し余の信仰の本性の分析法に誤がないならば、所謂知的承認と云ふことは、單に信仰の

一種に過ぎない、何せなればかの情緒的確信若しくは實在感情も等しく亦信仰の最も普通、最も重要なる一種であるからである。前者――命題の眞理であると云ふことの認識――は單に知力に關する事柄である。情緒とか、願望とか、衝動とか、興味とかさう云ふ種類のものの、所謂肉體を離れた純粹思考の精神は這種の信仰を有つが這種以外の信仰は有つことは出來ない。例へば數學上の眞理はその適例であつて、吾々は三角形の內角の和は二直角に等しいと云ふことを信じ、此の數學上の命題の眞理であることを承認する。「信仰」と云ふ言葉の示してゐる今一つの心理的狀態卽ち宗教的信仰と云ふものは、單に知力に關するではなく、寧ろ精神物理的なる有機體全體に關係するものである。卽ち宗教上の信仰は知的と云はんより、寧ろ意的である。認識と云はんより、寧ろ要求である。「純粹思考」を以て其生命として居る假設的な、肉體を離れた精神は、這種の信仰を生じ得ない、又かやうな人には這種の信仰の本性を說き明かし難い。這種の信仰は、純粹思考に耽る人の信仰とは、其の範圍を異にして居り、そは承認ではなくして態度であり、論證の上に立たないで要求の上に立つて居る。

吾人の實際的信仰は概ね斯る性質のものである。吾人が數學とか論理學とかの研究に從事して居る際には、純粹理性の世界にあるを得るけれど、若し數學とか論理學とかの研究を止むるや、吾人は直に非常に混雜せる理性の世界に這入り込み、この世界に於て意志態度は純粹承認に代るのである。吾人は天性、純粹思考をなすことは甚だ稀なもので、彼の一切の信仰、一切の動作を理性のみによつて支配せんことを望み、常に感情的、衝動的要素を禁ずる人々は、一般に變人と見られ、且つ斯く見らるるも亦至當である。

感情若しくは要求の上に立つ信仰には、この信仰の根柢をなして居る感情若しくは要求の强さと性質とによつて、種々の强弱がある。信仰は下は所謂願望は思考の父である」と云ふ比較的淺薄な信仰からして、上は本能的生得的衝動の交代名辭たる先天的信仰に及んで居る。既に第二章に述べた通り、吾々の本能的要求は出來得る限り自己を否定するを拒ばみ、其の要求を滿足せしめ得べきものゝ實在することを飽くまで信ずるのである。「信せんとするの意志」は深く吾々の有機體全部に其の根柢を占めて居り、そして吾々人類が、その爲めに造ら

れたと思はるるものが、何處にも存在しないかも知れぬと云ふことを、若し何時か認めることがあるとするならば、其の斯く認むるやうになるのは、餘程長い年月の間知的訓練を受けてから後ちに初めて起ることである。斯樣な先天的衝動の最も深遠なるものは「自己保存の本能」であつて此の自己保存の本能に伴隨して、自己は眞に絶滅し終ると云ふことは有り得べからざることであると云ふ信仰が生ずる。正常的な健全な兒童は自分が死ぬると云ふことを信ずることは出來ない。餘人は死ぬかも知れないけれど、自分は死なない。これ其の生きんことを欲するが故である。その全身の力は、生命、不朽の生命を呼び出すのである。次第に其の年齢も長じ、懷疑的傾向も進むも、其有する右の最初の本能的信仰は決して死滅しない。唯單に他の形式の信仰、卽ち肉體は必ず死滅するに相違ないけれど、其の靈魂は依然生存を持續すると云ふ信仰に變るだけである。何せなれば彼は生くるに相違なく、又生きんことを欲するからである。人或は謂ふかもしれぬ「この新信仰は、最初の信仰と等しく朴素的である」と。而もこの新信仰は最初の信仰ほどに強く、最初の信仰ほどに本能的であり、且つ最初の信

仰よりも一層永續し、容易に絶滅し難いのである。

この生きんとの本能的衝動、及び之と關聯して、生くると云ふ信仰と最も密接なる關係を有するものは、吾人が宗教的本能、宗教的信仰と稱するものである。吾人の有する生命其者は死滅してはならない、死滅すべきでないと信じ、又た吾々の有する此生命が新たな勢力を得來るべき源たる一大生命が何處かに、どうにかして存在するに相違ない、存在すべきであると信ずる。「一層大なる生命、豐富なる生命」は、吾々に存する小生命が常に求め、常に要求し、從て其の存在を信ずるものである。固より斯樣な信仰は元來朴素的であつて、長い間の推論と多年の冷靜なる知的研究とによつて、抑壓せられ、其の要求の聲を收めしめることが出來やうけれど、さうすることは人爲的制限とか影響とかの結果であつて、かの從來の古き朴素的の衝動と信仰とは永久各兒童の發生する每に、之に伴ふて再生し復現し來るに相違ない。

此に於てか余は繰返して言ふ。感情の宗教に於ける神の信仰は、理論的と云はんより、寧ろ生理的、生活力的である、呼吸と等しく、吾々の有機體全體の必要、要

求の結果であつて、理性の産物ではない。深く其根柢を吾々の生活感情に有し、其根柢は吾々の實際的信仰の多くが根ざして居る根柢よりも猶深いのである。即ちそは宇宙（ユニヴァース）に對するの態度である。宇宙（コスモス）の刺戟に對す人類の反應である。この反應は一個人の暫時の推論作用によつて決定せらるべきものではなく、寧ろ上は祖先より遺傳し來つた宗教意識及其人一個人の意識的、小意識的人格の全體の結果である。バースチアン Burstian が云ふたやうに、思惟するものは個人ではなく、寧ろ種族がその個人の中にあつて思惟するのである。更に之れをうまく言ひ換へると、種族が個人の中にありて感じ且つ意志するのである。即ち之を要するに其の信仰を決定するものは感情背景であつて、宗教的信仰とは、種族の理性と經驗とが、有機的生理的となつたものであると言はれ得るかも知れない。この意味に於て宗教的信仰は、其の偶然的發展と純粹なる知的の發展とを除けば、概念的よりも、寧ろ生物學的である。命題の承認ではなくして、寧ろ本能である。かく本能と云ふけれど嚴密なる專門語（テクニカルターム）の意味に於ける本能の謂ではない。けれども其根柢は專門語の意味に於ける本能と同一の範圍に有り、且

つ種々の點に於て之と比較され得るのである。そこで茲に云ふ本能は有機體に根據を有して居る信仰、即ち有機的信仰と云はれ得るかも知れない。そは推論によつて得らるべきでなく、寧ろ單にそれの存在が承認され、それに從はれんければならない。若鳥は其初めて南方に向つて移り住まうとし、若くは其初めて孵化期に入るに當つては、先づ南方に向つて出發し若くは巣を營まうとの盲目的衝動を感ずるに相違なく、而も若鳥は何故に然るかを告げ得ない。唯天性其期に臨んで其衝動を感ずるからして單に之に從ふのみである。既に其中に幾分か神秘的胚種が發生して居る所の宗教的意識も亦若鳥が南方に飛び、巣を營まうとする際と同樣な境遇にあるのである。宗教意識は推理丈にては宇宙の性質を全く明にし得ないかもしれない。鳥が南方の土地を見ないと同樣にそは神を見るとは出來ない。そは唯單に其見出すものを承認するまでである、——同じ理屈で鳥は南方に飛ばうと思ふて居る、其故さうしなくてはならないのだ。「主よ、爾（きみ）は爾の爲に吾等を造り給ひぬ、されば吾等の心は爾の中に休むまでは安んぜず。」このアウグスチヌスの語が總ての時、總ての種類の宗教信者の中

に大にもてはやされて居るとによりても、心理的描寫として、この語の眞理であるとが分る。

右のやうな信仰は其根本に於ては全く論證と沒交渉である。論證は斯樣な信仰には適合しない。斯樣な信仰を明瞭に言語に言ひ表はすために生じた特殊の信條は、或は誤謬であると論駁さるゝことがあるかも知れないけれど、其信仰の根本となつて居るところの宗教的要求と態度とは決して誤謬であると論駁さるべきものではない。何せなれば、此信仰は情緒的經驗を基礎として論證された結果ではなく、寧ろ信仰の直接經驗であるからである。それは有機體生物體に根柢を有して居るのである、それで此信仰は此信仰を有して居るものが之に對して毫も疑惑を生ずることのない程に強く且つ正確である。この絶對的正確と云ふことは時代の如何を問はず、如何なる信條のものたるを論せず、所謂感情の宗教と稱せらるゝものゝ特色である。之が適例は第六章に掲げた神秘論者、第八章に說いた神秘的タイプの中に列した人々であつて、彼等は異口同音に、彼等の信仰は神の直接經驗であつて、是に就いて論證し、疑惑を挾み、疑問を容る

べき底のものではないと信じて居る。

右に所謂信仰の直接經驗に伴ふところの特殊の心的狀態は勿論人々に依つて違うけれど、其直接經驗、其神の直觀の絶對的に正確であると云ふ感念は、誰でも必ず感ずるところである。どのやうな推理推論も斯る正確と云ふ感情を生じ得ないのである。

若き昔はその道の　聖を訪ふていとたかき
教受けしも幾度ぞ、さはれ心かたくなに
入りしその儘出で去りぬ。

*　*　*

被衣の下にいそしめる　吾の中の爾に、闇黑照す
光求めんと手を擧ぐれば　外よりのごと聲は聞えぬ、
「爾の中の吾は盲！」

吾れの中の爾(Thee in Me)が盲目であるならば、答の來ることはない。併し神秘論者は吾の中の爾は少くとも朧ろにも先方に光を見ることが出來ると主張する。彼等は種々の矛盾した形容詞で、この光を裝ふて言ふけれど、光がそこにあ

ると云ふことを斷乎として確信する點に於ては一致するのである。

靜穩な、高雅な、正常的な感情の宗教と、其の極端なるもの、不自然なものとは決して混同してはならない。古來幾多の病的な神秘論者の存在したことは、事實であつて、この事は何人も公平に承認せんければならない。そしてクラフト、エッビング Kraft-Ebbing、ミュリジーヤ Murisier、リユーバ及び其他の研究家は巧みに以上の不自然な墮落した方の神秘論者を研究し分析した。併し極端な神秘論者を標範的な神秘論者と思ひ做し、神秘說を以つて中世紀に於ける少數の非常的なる僧侶と同一に視るはこれ誤謬である。固より最初から神秘說を病的な宗教的情操、非常的狀態と解して其の研究を始めるならば、神秘說の非常的で病的であることは確である。こは單に術語上の問題に過ぎないし、何人にても勝手に自己の思ふやうな定義を下し、其の欲する通りに研究の題目を制限し得るのである。併し余は斷言する、斯樣な定義は余の神秘說に就いて解するところとは違つて居る。余は斯樣な定義の表すところとは全く異つた現象を研究して居る。余の神秘說に就いて解するところは、彼等の解するところとは全く異つ

た外延、卽ち自己の生命を取り捲いて居る大生命を直覺すると信ずる人々を云ふのである。して是等の人々には知育の程度にこそ差異あれ、上はエマルソン、ウァルヅワース Wordsworth のやうな人々から、下は「神の現前」「見神」と云ふことは、どう云ふことであるかを知ると信ずるところの一般の下等な人々に至るまでを包容して居る。而も彼等の大多數の精神は全く正常的である、全く正氣である、健全である。余の所謂摸範的神秘論者とは是等の人々の謂である。かの非常的な印度の瑜伽派、中世紀の幻想的見神家、及び「信神家となり」「第二の祝福」を得ると稱する近世の復活改宗者の右の模範的神秘論者に對する關係は、丁度病的な場合の正常的な場合に對せる關係と同樣である。余が從來屢、宗教的感情の二種類間に設けた所の差別は、決して見逃してはならぬ。病的現象が、神秘的意識と同一の外緣範圍にあると云ふ事實によつて、神秘的意識を無効たらしめんとすることは決して許すべきでない。蓋し感覺思考の範圍にも亦病的現象は存在するものである。「惡魔の憑移り」てうことがあるからといつて、一切の宗教的感情を疑ふことを許さないことは、丁度二重像若くは色盲があるからといつ

て、一切の知覺を疑ふことを許さない、誤れる論證があるからといつて、一切の推論を疑ふことを許さないのと同一である。黑色人が「力」を得る復活會、病的な人の陷るやうな情熱的恍惚、人爲的に摸倣と傳染の兩作用によつて誘起されたる發心改宗の非常に過激極端の場合、等は餘程朴素的な狀態、宗教感情の低度のものであることは、丁度魔術に對する信仰が知力の淺薄なものに屬すると等しいのである。實に文明社會に固有な唯一の宗教的感情は屢、述べた通りに、靜穩な自發的のものであつて、其の常態は近頃吾人のよく用ゐる文句の「實生活として の宗教 religion as a life」と云ふ語によつて一番善く云ひ表はされて居る。卽ちこは多數の快活なる、健全なる人々、時としては平凡な人々に存し、そして是等の人々は、大抵の點に於ては餘人と同じきに係らず、一旦彼等がその問題を解釋し、その世界を觀察するときには、彼等がそのオーソリティを決して疑はない所の內的經驗に照すのである。斯の如き彼等の神の信仰は、彼等の生活の方向を決定し、「人々は斯る神の信仰によつて生きて居る」のである。思ふに信仰の性質と價値とは、其の築き上げられて居る根柢の如何によつて大に決定せらるゝからで

ある。ポープ Pope の「人間論」中の名句

たゞ不信心の者のみ信仰の樣式を爭へ
その送る生活さへ正しくば

いかで誤あらん、その信仰に、

と云ふとは烈しく攻擊されたが、又たそれだけ氣强く防禦された。卽ち或一派の人は信仰は生活上重大なる事柄であると主張し、他の一派の人は信仰は毫も實際上意味がない、重要でないと主張した。併し兩者共に恐らくは正當であらう、と云ふのは、彼等は共に異つたものに就いて說をなして居るからである。蓋しどのやうな抽象的な、純粹に知的な信仰を有しやうとも、そは吾人の生活には毫も變動を生じない。スコラ派の哲學者の唱へたやうな神の形而上學的屬性を承認しても、積分學を學んだ、學ばないと云ふ事實と等しく、吾々の生活に何等の影響をも與へないだらう。併し吾人の骨髓となり、吾人の生活衝動及び需要と合體するやうな信仰に於てはさうでは無いのである。

四

以上感情の宗教の信仰――熱心なる宗教信者の特性となつて居る信仰に就いて説いた。併し、魔術棒を携ふるものは多いけれど、バッコス神の來格に逢へるものは少く、余が説くところの經驗を知るものは單に宗教社會の一部分に過ぎない。一般に宗教信者と認められて居る人々の半數――恐らくは過半數――は斯樣な經驗は、どう云ふものであるか、自ら經驗したことはない。それから教會に出入しないものゝ間に於ける割合は更に大である。この後者に屬する人が左の通りにアウトルック誌上に寄書して居るが、こは其の階級の大多數を代表して居ると思ふ。「余は靈格（スピリチユアリチー）と云ふことは、どう云ふことであるかを、知識か或は經驗かによつて十分に理會して居るかどうか、甚だ疑はしい。若し靈格と云ふことが所謂神人の同交と云ふこと、及余が見ることの出來る人に對する愛と等しく、余の見ることの出來ない神に對する愛と云ふやうな心的態度の謂であるならば――吾々が神は神の定則に外づれないことを認める際に、神に祈禱を捧げて非常に愉快を感ずと云ふやうな心的態度の謂であるならば、余は毫も斯樣な態度を經驗しない。」右の寄書家のやうな人の多數は、其の有する信仰は、幾分か習慣、

幾分か在來の古き論證、幾分か聖書のオーソリティ、又幾分か社會の神秘論者のオーソリティを本として居るのである。從來の古き論證、古きオーソリティの瓦解によつて惱まさるゝもの――今後、益惱まさるべきもの――は右のやうな人々である。吾々は宗教的大危機の眞中にあること――或は危機が始まりかけて居る位に過ぎないかも知れない――の事實に目をふさぐことは出來ない。古き支柱が社會の神秘的ならぬ方面の一角から全く打ち毀された曉には、其結果はどうなるだらうか。

一と通り見ただけでも結果は十分明白である。歐洲特に獨逸では、宗教に對する激しい憎惡の念が現に社會の大部に蔓延して居る。又米國に於ては公然と宗教を憎惡する傾向は一寸見えないけれど、表向きの禮拜や儀式の如き諸の形式に對して少くとも冷淡になりつゝある。日曜日に殆ど何の教會に這入つて見ても何處に人々は居るか。殆どの祈禱會に行つて見ても、何處に人々は居るか。けれども熟々考ふれば、教會に行くものが減じたからとて、そは必しも宗教信仰の衰へたと云ふ徵候とはならない。或は其の宗教信者であるからし

て、缺席するものもあらう。若し人々が教會内に於けるやうに、教會外に於ても宗教信者たり得ることを知ることが出來たらば、そは信仰の衰微と云はうよりは、寧ろ進歩の徴候である。して又た宗教上の事柄に對する興味は猶非常に强く、歐洲と米國の新聞雜誌は絶えず神學上の片々たる雜談をも注意して居る。ハルナック Harnack の「基督教の本質」は其原本、譯本に於て六萬部以上に及び、デリッツ Delitzsch の「バビロンと聖書」は十萬部に上り、之に對する幾多の駁論書が著はされた。又心理學界が今日のやうに宗教問題に對して興味を有することは年來ないことである。

然し斯樣に宗教に對して興味の感せらるゝやうになつたことは、宗教的信仰の進歩であると同時に、又その衰微であることは忘れてはならない。ニューク、サーンが千九百四年六月四日の紙上に於て左の通りに述べて居るが、そは正當な考であると思ふ。「何故に人々が教會に行かないかの理由は明瞭である。彼等は宗教に興味を有しないからして、從つて教會にも興味を有しないのである。彼等は外に發表されれば教會禮拜となる深い且つ生活的な宗教的信仰を

有つて居ない。彼等自らは信ずると思ふかも知れないけれど、彼等が信ずると自白する宗教を實際は信じて居ないのである。」

五

宗教の將來如何と云ふことに就ては、何人も明言し得ないことであるが、かう云ふことは確かだらうと思はれる。將來の宗教的信仰は余が感情の宗教と稱したものと其の興廢を共にするだらう。個人の內的經驗、宇宙に對して推論によらない(決して不合理的ではないけれど)宗教的態度は、現今の自然說(ナチュラリズム)(宗教上の)不可知論、冷淡と敵視の時代に於て、宗教が依て以て其の生命を維持し行くべき唯一の源泉である。此處だけには諸の批評も科學的發見も哲學的思考も喙を容れ得ないものがある。此處から丈は、否定することの出來ない、毫も疑惑を容るることの出來ない宗教的信仰が生ずる。エマルソンが云ふて居る「人々の一生の各時間毎に、其オーソリティも又このオーソリティから生ずる結果も違ふ。吾人の信仰は瞬間的に現れ來り、吾人の惡德(ヴイス)は習慣的である。而も其等の短い瞬間に一種の深さがあつて、其深さは吾人をして爾餘の一切の經驗よりも一層

其瞬間の方を眞實と思ひ實在すと思はしむるのである」と。これ則ち屢繰り返した通りに、宗教的意識に對する普遍的の證明である。して又右の內的經驗、心靈的直觀が宗教的信仰の唯一の確固たる基礎であると認めらるゝ時期が到來しつゝあり、且つその到來する時も遠からずと信ずる。

斯樣な宗教の內容は如何、既に上述したやうに、宗教的信仰は理智によつて形式を具へ、明瞭に發表されんければならぬ。卽ちそは永久に形式と記號(シンボル)とに表現せんければならない。そして是等の形式と記號とは、人種により、時代によつて相違し變化するだらう、そして彼等は過去に於ける通りに、將來に於ても一與一仆互に繼承し代謝するだらう。神の觀念も亦人を異にすると共に、絕えず相違し變化するだらう。而も總べて是等の變化し矛盾した現象の下に、內的宗教的經驗の一生命が斷えず滾々として流れて居る。余は斷言する、「この內的經驗は眞に一である」と。總ての神秘論者は皆一語を話し、一信仰を自白する。蓋し或者は梵と、或者は自己よりも大なる、純粹なる自我と、或者は道と、或者は基督若くは聖母マリアと、或者は靜寂なる曠野若くは無創造の深淵、若くは超心靈と冥

合交通するけれど、是等は悉く彼等の小生命が、それと全く同一ではないけれど、本質上全く同一性質を有する「一の大生命」に進むと云ふ確信——若くは彼等が云ふて居る如く直接經驗——を證明するからである。これ以上、彼等が古の經驗に就いて述ぶる所は各違つて居るけれど、其の多くは皆吾人には知り得べからざることであると主張して居る。彼等は總てプロティノス Plotinos と同じく「神は吾人の認識を避くるも、吾人を避くることはしない」と云ふ意見である。總ての神秘論者が吾人を超越して而かも吾人の生命に類似し、吾人の生命が交通し得る所の彼の生命の大本源に對してなせる證言は、實に「感情の宗教」の唯一の教義、唯一の信條である。「理智の宗教」の多くの教義信條は、「朴素的信仰の宗教」の多くの教義信條の後を追ふて博物館や歷史書——死滅せる幾多の信仰の亡魂界——に這入る通りに、若し宗教が眞に持續すべきものであるならば、如上の一信條は眞の人類(リリジヤン、クラブ、ユーニヤン)教の一教理と認めらるゝだらう。そは如上の一信條は人類の生活其者を基礎として、其の上に築き上げられて居るからである。

宗教心理講話 終

附錄

原著者の發送せし質問條項

何卒詳細に左の質問に御答へ被下度候、哲學的概括を下さず、寧ろ貴下御自身の經驗を御記し被下度候。

一、貴下御自身には、宗教を如何なるものと、御考へに相成り居り候や、

(イ)宗教とは、何ものかゝ存在するとの信仰なりや、

(ロ)或は、そは感情上の一經驗を指すにや、

(ハ)或は又神若くは正義に對する意志の一般的態度を指すにや、

(ニ)その他、凡て何物を指して宗教と呼ばるゝにや、

宗教にして若し、以上諸種の要素より成るとせば、何れが最も重要のものなりや、

二、貴下の所謂神とは如何なるものに候や、

(イ)神は人格なりや、若し人格なりとせば、その所謂人格とは何を云ふにや、

(ロ)或は、又神は一種の勢力(フォース)の如きものに過ぎざるにや、

(ハ)抑、又神とは畢竟貴下に對する宇宙の一態度を指すに外ならざるにや、

神と人類全般及び貴下自身との關係如何、

以上の諸項に對する貴下の態度不定に候へば、その實狀を詳述せられ度候、

三、何が故に貴下は神を信ぜらるゝにや、

(イ)推理論證の結果、此に至られ候にや、

(ロ)但しは又、躬自ら神の現前を經驗せられしが爲めにや、

(ハ)或は又そは聖書に記載せらるるが故にとの理由に基かるゝか、但しは又預言者の親しく敎えしに由ると云はるゝにや、

(ニ)或は其他の理由に由られ候や、

四、貴下御自身は神の存在を信ずと云ふよりも、寧ろ神が存在すとする方が、人生に便利なるが故に之を利用せんとせらるるにや、貴下は神を以て實在とせず、唯そは貴下のそれに由つて以て生活すべき理想に過ぎずとせらるるにや、若し無神論を採用するに至らば、人生の實際例へば人生の幸福、道德及其他の點

に於て何等かの變動あるにや、

五、固より父母朋友とは違いはすれど、父母朋友の如くに神も亦實在せるにや、神の現前を經驗したと感ぜらるゝにや、若しこれありとせば、そはどう云ふことか、詳細に叙述有之度候、その見神の實驗の明確不明確の度如何。又見神の實驗は貴下心身の上に如何なる影響ありしや、若し又自己に、かゝる經驗なしとするも、他人の見神の實驗を承認せらるゝや如何、右詳細御回答相成度候、

六、今尙神に對して祈禱せらるゝや如何、若し祈禱せらるゝとせば、その理由如何、そは單に習慣及び社會的慣習と云ふに止まるにや、或は又實際神はその祈禱を聽くと信ぜらるゝや如何、祈禱は單に我より神に捧ぐるのみにして、神よりは何等の感應あるに非ずと考へらるゝにや、抑、又祈禱によりて、力とか、神の靈とかが、自己の內に降りて神人の同交を實現せられつゝあるや如何、

七、靈格とは如何なる意味なりや、又た靈的人物のタイプ如何、

八、個人的靈魂の不滅を御信じに相成候や、若し然りとせばその理由如何、

九、聖書は今尙貴下宗敎の敎權オーソリティなりや、貴下の宗敎的信仰、宗敎的生

活は、聖書の基礎の上に立たれ候や如何、若し然りとせば聖書のオーソリティを信ぜざるに至らば、貴下の神に對する信仰及び神と世人とに對する關係は、如何相成るべきにや、

十、貴下は「宗教的經驗」を如何なるものと御解釋なされ候や、

以　上

索　引

ア　行

アウグスチヌス (Augustinus) 171, 173, 353
アウトルック誌(Outlook).. 360
アヴェロエス (Averroes) ... 174
悪の問題 . 90, 151, 218, 219, 222, 223
アグニ (Agni)..... 79, 81, 89, 90
アッスシリア(Assyria)..... ..... 140, 141, 142, 144
アゼンス,アゼンス人... 54, 58
阿闍婆吠陀..... 87, 89, 107
アナクサゴーラス (Anaxagoras)..... 28, 54
アベラルドゥス(Abaelardus)173
アモス(Amos)..... ..... 136-143, 145, 160, 163, 312
アリストテレース..... ..... 6,62, 169, 174
アリヤマン(Aryaman).... 89
アルベルトス (Albertus).. 175
アンセルムス (Anselmus) 172, 173

イェルサレム (Jerusalem) 133, 143, 144, 148
イザヤ(Isaiah)..... 144, 161
第二イザヤ (Second Isaiah) 125, 148-150
意識 (Consciousness) 8, 12, 13, 14, 16, 17, 29, 30
意匠論, 意匠論的論證 (證明) (Design argument) 60, 203, 215-224
イスラエル(Israel) 47, 121-166, 342
一元論(Monism) 84-99, 102, 103, 104, 153
イリングワース(Illingworth). 177, 328
インドラ(Indra) 82, 83, 87, 89, 90, 98

ヴァータ(Vata)..... 79, 80
ヴァーユ (Vayu)..... 80
ウォータランド(Waterland) 207
ウシヤス (Ushas) .. 79, 109, 123
宇宙論的論證 (Cosmological argument) 202, 212-214, 242, 283
ウパニシヤド(Upanishad).... ..... 93-96, 101-103, 110-119
ウールストン(Woolston).. 208
ウィリアムスとカルヴェル (Williams and Calvert).. 69
ヴント (Wundt)..... 10

英國 (England).... 170, 200, 209
エゼキエル(Ezekiel) 161-162, 164
埃及(Egypt)..... 57

エックハルト (Eckhart) 182, 186, 193
エマルソン (Emerson) 190, 192, 357, 363
エレミヤ (Jeremiah) 145-148, 161-163
縁邊 (Fringe) (背景を見よ)
エープス (John Yepes) 199

オーソリテイ 教權, 證權 (Authority) 34, 35, 36, 37, 40, 48, 59, 78, 121, 122, 170-176, 204, 205, 208-212, 225, 229, 230, 236, 237, 253, 273-281, 333-339, 361
オッカム (Occam) 175
オルデンベルグ (Oldenberg) 106, 107
オルフェイス 170

カ 行

科學 55, 210, 224, 321, 343, 363
加特力教會, 舊教 (Roman Church, Catholics) 170-175, 275, 279
迦南人 (Cananites) 127, 130, 135, 155
神憑(がか)り (憑移りを見よ)
神の現前 (見神) の意識 (Consciousness of the presence of God) 64, 65, 66, 111, 112, 113, 160-166, 186-199, 258-264, 269, 285-307, 310-311, 315, 317-318, 329, 330, 353, 354, 357-359, 364, 365
感覺 (Sensation) 6, 7, 11, 12, 13, 14, 16, 17, 23, 25, 32, 33, 36, 49, 50, 51, 78-84, 123-126
カント (Kant) 95, 212, 213, 215, 216, 225
感情(Feeling), 情緒(Emotion) 8, 9, 10, 11, 12, 13, 22, 42, 65, 177, 299, 300
感情 (情緒) 的信仰 (Emotional belief) 30, 32, 41 44, 65, 70, 74-76, 113-114, 120, 157, 160, 187, 196-200, 258, 259, 260, 264, 283-307, 347-355, 358, 359, 363-365
感情の宗教 (Religion of Feeling) 45, 61-76, 100, 105-120, 155-168, 170, 177-200, 227, 254-267, 285, 307, 351-359, 363-365
感情背景, 感情團塊 (Feeling background, Feeling mass) 5-28, 41-44, 61, 65, 74, 120, 137, 156, 227, 267, 307, 347, 350, 351, 357
觀念作用, 觀念, 心像 (Ideation, idea, image) 5-7, 11-16, 17-19, 22
觀念論 (Idealism) 94, 101, 102, 103, 105, 344, 346

疑惑, 疑念 (Doubt) 35, 36, 38, 42, 48, 53, 54, 82, 83, 152, 196, 238-242, 250-253, 263, 264, 286, 354
祈禱, 祈念 (Prayer) 109, 165, 166, 187, 188, 238, 263, 291-292, 299, 321-330, 360
希臘, 希臘人 .. 57, 63, 169, 341, 346
基督 169, 186, 188, 207, 209, 232, 233, 280, 343, 364

基督への摸倣 (Imitation of Christ) 191
基督教 .. 47, 169-228, 343, 346, 362
ギュイヨン夫人 (Guyon, Madame) 180, 188
教權 (オーソリテイを見よ)
禁慾主義 (Asceticism) 67, 68, 106, 107, 114, 115, 116, 178, 179

クラーク (Clarke) 202, 207
クラフト, エッビング (Kraft-Ebbing) 356
クランツ (Cranz) 71, 75, 76
クリスマン (Chrisman) ... 242
グリンランド, グリンランド人 60, 71, 75, 76

ケラー, ヘレン (Keller, Hellen) 248, 249
原始民族 (Primitive people) 47-76, 77, 155, 168

コー (Coe) 253, 318
高等批評 (Higher criticism) 209-212, 224, 343, 363
コリンス (Collins) 207

サ 行

サウル (Saul) ... 132, 133, 155-158
サバティエ (Sabatier) 321
サヴィタル (Savitar) 80, 89
サムエル (Samuel) .. 155, 156, 158
サリー (Sully) 234, 235
僧佉哲學 (Samkya) 103

ジェイムズ (James) 18, 33, 38, 160, 269, 319-320, 323-324
思考, 論證, 推理, 推論, 理性, 理由 (Thought, Argument, Reason) .. 5, 6, 14, 15, 20, 22, 25, 26, 28-41, 54, 59, 60, 85, 86, 94, 97, 99, 101, 127, 128, 135, 139, 145, 146, 152-154, 167, 171-175, 178-182, 202-205, 223, 224, 240-250, 251, 264, 265, 273-277, 286, 306, 337-346, 349, 353, 354, 355
自然神 (Nature gods) .. 49-54, 76
自然神教 (Deism) .. 176, 201-208
質疑法 (Questionaire method) 269-273
兒童期 (少年期を見よ)
兒童の意識 (Infant's Consciousness) 13-14, 32, 33, 34
支那, 支那人 72-76
詩篇 (Psalms) 164-166
西比利加, 蒙古 67-69
シャマン, シャマン教 (Shaman, Shamanism) 61, 67-69, 106, 107, 167
ジャストロ (Jastrow) 17
小意識 (Subconscious) 16, 74, 160, 291, 296
少年期 (Childhood) 34, 229-249, 258-260, 278, 333, 337
少年期の神學 (Theology of